

この月寛文七年三月七兩番の頭に會せらるゝは、具足あらための事、書院番小姓組としを隔て、毎年六月中あらたむべし、嘉定、玄猪の時は、營築の事にあづかりし番士も出べし、游泳を習ふ事なし得がたき由申さば、誓狀を出さしむべし、高田乗馬もこれにおなじ、その身痘瘡をなやむ時七十五日過はまうのぼるべし、日光山供奉のともがらは、四月朔日より當直をのぞき、五月朔日より上直すべし、増上寺の御參に裝束行列の時、詰番は還御の後まうのぼるべし、遠國の御使は、參府明日より暇休すべし、増上寺など詣給ふ時、後押の事は、巡夜外郭巡視のともがらのうちより出すべし、營築にあづかる事、前の暇休はさきくのごとくたるべし、但其時のさまにより、官長各相議して延縮すべし、各國に配流のもの没して槍屍にまかるともがら暇休の事、五日路より遠き地は十日、夫よりちかきは五日たるべし、入番のともがらは、本番五回の後、供奉つかふまつらしむべし、并に前髪のものは、童形改めて後漸々につかふまつらしむべし、入番のともがら、本番二回見ならはしむべし、但六月十五日よりのちは見習に及ばず、采地に暇休の期は定制のごとく春秋兩回たるべし、供奉の觸ありし後は、たとひ延稽せらるゝとも、一人まのうぼりたらんに、

一隊すべてつかふまつりたるにおなじかるべし、さきくのごとく、要脚廣蓋給仕習禮せしむべし、沈痾をもて小普請に入事は、病臥期年に及び、此後つかふまつり得がたきは小普請に入べし、また期年に及ぶといへども、病少しくさはやぎ、今より後つかふまつり得べきさまならば、小普請にいらしむべからず、時々上直に候すれど、まばく病にかゝり、三年の直日を會計して三分一よりおほく病臥せしは、回年をまちてのち小普請に入べし、病を謝して小普請にいらしむ事をこは、病のさまつばらにとひたゞし、誓狀をとりて小普請に入らしむべし、小普請に入て後攝生し、快復に至りしをもて、原隊に入つかふまつらんとこひ出ば、老臣に申入番せしむべし、病よりたちて本番のみに候し供奉を辭するともがら、五日を過は血誓せしむべしとなり。

本芝二丁目

芝区内

二高札ヲ建ツ

府内

本芝二丁目高札

府内備考云フ、

本芝貳丁目略

一、御高札

右町内東南之間海手ニ建有之、寛文七亥年三月中、町御奉行渡邊大隅守様綱

本芝二丁目
高札
本芝二丁目
高札事蹟

貞。島田出雲守様○忠御勤役中、初多相立、延寶八申年八月風雨之節損し、御高札八名主に御預ケニ相成拾五年過、元祿七戌年町御奉行川口攝津守様○宗能勢出雲守様○頼御勤役中、右場所御修復有之、正徳元卯年松野壹岐守様○助義。丹羽遠江守様○長御勤役中、御掛直ニ相成、同二辰年坪内能登守様○定松野壹岐守様御勤役中、添御高札相掛り、同四年八月風雨之節損、町御奉行坪内能登守様、松野壹岐守様中山出雲守様○時御勤役中、御懸直ニ相成、享保二酉年八月風雨之節損、町御奉行中山出雲守様御掛りニ御修復有之、御高札二枚名主に御預ケニ相成、夫々引續當時迄相建有之。

定

一、公儀之御船といふよ及そは、諸回船共ニ難風ニ逢時、助船出し、船破損せざる様成程精抜、出せへき事。

一、船破損之時、其所近き浦之者精抜出し、荷物船具等取揚る。其取揚所之荷物之内、浮荷物を貳拾分一、沈荷物を拾分一、但川船と浮荷物ハ三拾分一、沈荷物を貳拾分一、取揚者ニ俵ありせへき事。

一、沖よて荷物とぬる時、着船之湊よおいて、其所代官手代庄屋出合、穿鑿抜と考、船よ相殘荷物船具等之分、證文抜出せらる事。

附、船頭浦之者々申合、荷物ぬれみ取、と稱たると偽申よおいてハ、後日よ聞といふ共、船頭といふよ及そは、申合せる輩よ至るまで其罪重るへき事。

一、湊よ永々船抜掛置輩は、其子細を所之者相尋、日和次第早々出船いよせらる。其上よて難澁仕いハ、何方之船と承届、近邊ハ其地頭御代官、遠方は御勘定奉行迄、急度申達へき事。

一、御城米廻之刻、船具水主不足之惡船よおは積へららば、並日和能節、船破損よおいてハ、船主船頭曲事よはへし、惣る理不盡成儀申掛、又そ私曲よおはるよおゐてハ、申出へし。縦同類といふと、其科をゆるされ、御褒美下さるへき事。

一、自然寄船並荷物流來よおいて、揚置る。半年過迄荷主よおなきよおゐてハ、揚置し輩よお抜取る。若右之日數過荷主出來たるといふとも、おは抜りへせへららば、然りといへとも、其所之地頭代官差圖受る事。

一、博奕惣る賭之勝負堅停止たるへき事。
右條々可相守、若於相背と、可被行罪科者也。

正徳元年五月日

奉行

一、前々々浦々高札相建、公儀之船と不及申、諸回船共、猥成儀無之様ニ被仰付、處、遭難風、節を、所之をの共船之助、も不相成、却る破船、様、いとしの、荷物をは、給させ、或上乘船頭と申合、不法之儀、共有之様、相聞、不届、御料と御代官、私領、地頭より常々、遂吟味、毛頭不埒、不仕様ニ、急度可被、申付、若此上、不埒之儀、於有之、後日、相聞、へとも、其の、はいふ、及は、そ、所之者、迄可、被行、重科、其上、其所之御代官、地頭迄、可爲、越度事。
一、御城米船、近年破船多、い、付、今般諸事、爲改、別る、大切ニ、可仕旨、申渡、船足之儀、を、深、不入、様ニ、大坂船、ハ、大坂奉行、其外、國々、此船、を、其所支配之御代官より、船足實之所ニ、極印、抜打、船頭水主人、數並船足、極印の通無、相違哉、送狀、引合、急度相改、帳面ニ、記置、上乘船頭印、形致させ、右書物、其所、留置、御料、ハ、御代官、私領、地頭へ、差出し、御代官並地頭、より御勘定奉行、まで、可、差出、い、且、又、極印より、船足、深、入、い、船有之、い、積、い、俵數、委細、改之、御城米、此外

附記
子オロシ
禁制

船頭私の運賃、拔取、他之米穀、或ハ商賣、此荷物等、積入、い、歟、又、水主人、數定之内、令、減少、い、私、積入、い、荷物、ハ、其所、取揚置、水主人、數不足、之分、其所、よて、慥成、水主、拔雇、を、努出、船致させ、其上、よて、右之譯、早速、御勘定、奉行、可、訴之、事。
一、破船有之、節、浦々之者、出會、荷物、船具等、取揚、盜取、い、歟、又、不届之仕形、於有之、船頭より、不、隱置、有體、早速、可、訴之、事。
右之條々、急度、可、相守之、若違亂之輩、於有之、ハ、僉議之上、可、被行、罪科、吟味、之子、細、い、ハ、其所、支配之御代官、又、地頭、迄、可、爲、越度、者也。

辰〇正徳三年八月

府内備考

〔附記〕 子オロシ禁制

覺

一、子、あろし、の看板、出置、商賣、致、い、者有之、い、ハ、堅、無用、ニ、可、仕、由、被、仰付、い、間、町中、無用、ニ、可、致、い、從、看板、出、不、申、内々、ニ、る、致、い、者、若、有之、い、ハ、町内、ニ、置、申、間、鋪、い、

未〇寛文七年五月二日

市街充實時代

五四五

右之通樽屋ニ被申渡シ。

塵芥棄場

塵芥棄場

撰要永久錄

一、こみ捨ハ所先奉行所々永代島に捨ハ様ニ札を立置申シ。頃日ハ石河又四郎屋敷際ニすテハ以後ハ淺草川水々安房上總之船往行障ニ可相成様ニ申ハ間前々之通永代島堤際に捨置可申ハ。又四郎屋敷際并御堀ニこみ捨ハ者有之ハハ見合次第急度曲事可申付者也。

右御觸之趣、慥ニ御請負申上ハ間、町中家持ハ不及申、借家、店借、地借等迄爲申聞、此旨急度相守可申ハ。勿論芥取ハ者共方々證文迄取、自今以後、永代島御定之所に捨可申ハ。若相背者於有之ハ、何様之曲事ニモ可被仰付ハ爲後日名主月行事御帳ニ判形申ハ以上。寛文七年未五月九日

右之喜多村ニ被申渡致請判ハ。

撰要永久錄

屋鋪給賜

六月九日壬午

寛文七年(紀元二二二三年)六月九日(壬午)三正綜覽。

屋鋪ヲ賜フ者若干。十五日戊子

寛文七年(紀元二二二三年)六月九日(壬午)三正綜覽。二ハ、鶴岡前國。城主酒井忠義門左衛門。大手屋鋪内麴

町。ヲ返上シ、京極高國後守丹ノ元屋鋪麴町区内ヲ賜フ。忠義酒井左衛門尉元屋

鋪ハ、廿一日甲午寛文七年(紀元二二二三年)六月九日(壬午)三正綜覽。老中土屋敷直馬守但之ヲ賜フ。

○柳營
日次記。

屋鋪給賜事

屋鋪給賜 柳營日次記ニ、

○寛文七年六月九日青○中略。

松平上野介近

松平右近太夫政○隆

兩人於本庄屋敷被下之。○中略。

右典廐○松平綱吉家臣黒田信濃守○用

黒田用綱

右最前本庄屋敷被下處、小石川ニ被引替被下ハ様ニ奉願ニ願之通被仰付。

於本庄屋敷被下。

松平上野介

松平右近太夫

戸田七内○政も

柳營日次記

戸田政次

市街充實時代

右屋敷被下ハ。

源近榮從五位下。松平上野介。幼名大助。

一、同年○寛文七年六月十五日北本庄○政組屋敷地之内切坪○政なる相對替奉願○政以處、十月廿八日願之通被仰付○政以。但右相對替之儀、是亦兄綱隆○政奉願、則同人○政被仰付○政以儀ニ御座○政以。

舊藩屋敷

寛政呈譜

屋敷	町名	坪數	給收年月
上	北本庄	三千六百坪	寛文七年六月給上ル。 天和二年十二月上ル。
上	市ヶ谷本村	六千八百八十九坪	寛文七年十二月給上ル。 明和四年十二月上ル。

子爵松平家回答○廣瀨。

筒井政信

酒井忠義

○寛文七年六月十五日青略。

酒井左衛門尉○忠。大手屋敷差上度以旨願之通被仰出替○高ニ京極丹後守○高。上屋敷被下之爲作事料金三千兩被下旨。

○寛文七年六月廿一日青。

土屋但馬守○直數。

土屋數直

右屋鋪狹ニ付、大手酒井左衛門尉上ケ屋敷被下之、只今迄之屋敷倅相模守○政直。被下○政以。

柳營日記

數直○土屋。從四位。侍從。初號大和守、後改但馬守。幼名辰之助。

寛政呈譜

同文○寛。七年六月廿一日酒井左衛門尉上屋鋪被下之、作事料金貳千兩拜領之。

附記
門松制禁

〔附記〕 門松制禁

是年七月、門松ヲ樹テ正月ヲ祝スルコト行ハレ、制禁セララル。

覺

一、今度在々所々多く松ウキを仕、正月をいゝる申由○政なる、江戸近邊之町屋迄其通ニ正月いゝる申由相聞○政以。就夫御代官所○政も無用ニ可仕○政以旨、被仰渡○政以間、江戸町中○政なる後、右之通正月をいゝる申事、堅ク無用可仕旨、町中家持○政不及申、借屋店借等迄可申渡○政以の也。

未○寛文。七年。七月六日

市街充實時代

右御觸之上、町年寄衆こゝる月行事致請判し。

——正寶事録

尊重院寺領

七月八日辛亥

〇寛文七年(紀元二三二七年)〇辛亥、三正綜覽。

東叡山尊重院〇市内下谷區。寺領寄附狀

ヲ附ス。〇柳營日記。

尊重院寺領

尊重院寺領 前年ノ寄附ニ係ルト云へバ、或ハ六年十二月廿六日淨圓院ニ寺

領寄附有リタル頃ノ事歟。

八日 〇寛文七年七月〇中略。

東叡山

——尊 重 院

一、右寺領〇去年御寄附西葛西領請地村。百石之御書出拜領之。

——柳營日記

八日 〇寛文七年七月〇中略。東叡山尊重院に去年御寄附ありし寺料の御書を下さる。

——嚴有院殿御實紀

記附
吉川屋鋪

〔附記〕 吉川屋鋪

神道者吉川從時、寛文七年秋登庸セラレ、祿百俵ヲ給セラル。本所割下水ニ屋鋪ヲ賜フモ是頃ノ事歟。

廿八日 〇寛文七年七月〇中略。神道者吉川惟足從時はじめて拜謁す。〇日こは吉川半助として、伏見の城にて討死せしものゝ五世の孫なり。幼て孤となり、商人の

家に養はれしが、其身商賣のわざを耻て、世を遁て鎌倉の山陰に隱居し、少しく文學和歌の道に心かけ樂しが、其頃萩原兼從卿は、吉田家天兒屋根命以來、代々神巫の道唯受一人の統を傳たるよし聞つたへ、京にのぼり、兼從卿にしたがひ其道を研精し、年をへて奥旨秘傳委くつたへて、歸らんとするにをよび、兼從卿より唯受一人の道を、この後吉田兼敬成人のうちに返授すべき旨托せらる。かくて紀伊賴宣卿、保科正之朝臣など、このころこの道を信ずる事大方ならず、こたび召見を蒙るにいたりしとぞ聞えし。

——嚴有院殿御實紀

吉川屋鋪〇押上村。 割下水の邊、小梅村境より。吉川源十郎從方、屋鋪あり。從方の祖ハ、吉川從時といへり。惟足軒と號せしにたり。時人吉川惟足とよびて尊稱せりと。萩原家の神道は長じたるを以て、寛文七年の秋登庸せられ祿百俵を賜へり。始ハ京橋の邊は客居せしが、後此屋敷を賜ひてこゝに移せり。

——葛西志

七月 〇寛文七年。末吉川惟足翁神道の學をもて召出さる。惟足の翁は、神路山に深く分け入て、正直の教をひろめ、其道をもて家を起せし人也。又歌をもよみて世に賞せらる。視吾堂は其號也。視吾堂集。

本所の社地拜領の後、神垣に祈りて願ひ叶ひければ、

神垣のねかひもみちて老のなみ立ぬにつけて仰く御代かな。

あふくなり本の所をもととして絶たるをつぐ世のまつりこと。

其他三首あり。社地を賜はりしは延寶中の事なり。社地とは意富比の神社なるべし。本所の地むかし本庄と書しを、元祿元年本所の文字にあらためし由、或書に見えたり。れど、前のうたに本のところとよめるにて、はや此頃より本所と書しと知られたり。

武江年表

〔参考〕 吉川從時

武家閑談云。吉川從時ハ、視吾堂あれミだう惟足軒と號じ。江州佐々木の支流あり。高祖父を源藏廣直といふ。文明の比の佐々木大膳大夫高頼の庶子にて、近江國野州郡を領し、吉川村に住ざるゆへ、始て吉川を以て家號とじ。永祿十一年、將軍義昭公利。足を補佐して、信長公甲。織上洛の時、最初江北佐々木承禎父子被追落し給ふ時、源藏廣直ハ、極老として起居心よ任じ。其子二人あり、長男小次郎家春も當時病よふしなれど、吉川の城を守事不叶明退る。後、家春再び弟源次郎廣末殘兵を集め、信長洛陽へ往來の節を伺ひ、防戦せといへとも、大軍欺きがとく、伊州石川の邑へ落行り。天正三年七月家春再び江州に歸り、石部に住せ。元來當州の輩ハ、佐々木淺井の浪人よて、信

吉川惟足筆蹟



東京武藤一郎所藏

本所の社地拜領の後、神垣に祈りて願ひ叶ひければ、

神垣のねかひもみちて老のなみ立ぬにつけて仰く御代かな。

あふくなり本の所をもととして絶たるをつぐ世のまつりこと。

其他三首あり。社地を賜はりしは延寶中の事なり。社地とは意富比の神社なるべし。本所の地むかし本庄と書しを、元祿元年本所の文字にあらためし由、或書に見えたり。れど、前のうたに本のところとよめるにて、はや此頃より本所と書しと知られたり。

—— 武江年表

〔参考〕 吉川從時

武家閑談云。吉川從時ハ、視吾堂あれミだう惟足軒と號じ。江州佐々木の支流あり。高祖父を源藏廣直といふ。文明の比の佐々木大膳大夫高頼の庶子にて、近江國野州郡を領し、吉川村に住ざるゆへ、始て吉川を以て家號とじ。永祿十一年、將軍義昭公利。足を補佐して、信長公田。織上洛の時、最初江北佐々木承禎父子被追落し給ふ時、源藏廣直ハ、極老として起居心よ任じ。其子二人あり、長男小次郎家春も當時病よふしなれど、吉川の城を守事不叶明退る。後、家春再び弟源次郎廣末殘兵を集め、信長洛陽へ往來の節を伺ひ、防戰そといへとも、大軍欺きがとく、伊州石川の邑へ落行多り。天正三年七月家春再び江州に歸り、石部に住せ。元來當州の輩ハ、佐々木淺井の浪人よて、信

本所の社地并領の世傳は新りて頼り叶ひければ、
 神領のねかひもあつてあつたか空もにつけて何く御代か、
 あふくなり本の所をもととして頼りたるをいつて使つたこと。
 其他三首あり社地を頼りしは頼り中事なり社地とは東京地の神はなすべし。
 本所の地むかし本所と書し武家元年本所の文字にあらためし由縁書に見えた
 ねと頼りのうたに本所と書し武家元年にあらためし由縁書に見えた

〔備考〕 吉川義時

武江年表

武家閑談云吉川從時ハ親吾堂惟足軒と號江州佐々木の支流ふり高祖
 吉川兼房兼房直といふ文明の比東家久波一源和依々木大膳大夫高頼の庶子にて近江國
 野州郡を領し吉川村に住するゆへ始て吉川を以て家號といふ永祿十一年
 將軍義昭公足を補佐して信長公四上洛の時最初江江北佐々木承頼
 父子被追落し給ふ時源藏廣直ハ極老として起居心ま任をば其子二人あ
 り長男小次郎家春も當時病まふしをれて吉川の城を守事不叶明退をる

吉川義時
 源藏廣直



長秀吉臣○豊へ恨を含むゆへ、豊臣の門下馬をばふがん事被欲をばして、
權現様家康○徳川よ其志を通ぞ。仍上京の砌、必光駕を吉川小次郎家春が亭よ
まけられ、その弟源次郎廣末までも台顔を拜せ。或年家春が子半兵衛好春、
十二歳成しを被召出、昵近の列よ入。同十八年小田原御發行の時より供奉
せしめたるが、武威を顯して御腰物國宗御小脇刺永正被下之。同苗
源次郎廣末泉州堺よ居住しけるが、御供よ加_三。是又小田原表にして、其氣
性拔群たるゆへ、甚勇敢を顯して、火炮よ中て死せ。慶長五年景勝上○退治
として、伏見を御進發、石部の驛よ御止宿の處、吉川半兵衛好春ハ、江州九萬
石の御代官を、笹山氏深尾氏ふどもよ勤たるが、待請奉り。台顔を拜し、只
今より後ハ誰が支配たるべき哉と奉伺_ハ處、伏見御留守居鳥居氏よ可相
隨よし也。其月上方蜂起して、伏見城を攻と聞へ多れど、山岡甫庵を先とし
て、笹山理兵衛以下甲賀衆、并吉川半兵衛、子半助等、伏見の城へ馳加_三籠城
したるが、深尾清十郎組のもの、回忠よて落城よ及びしうバ、半助ハ敵多討
取、松丸よて戰死したる。同九月關原御勝利よて、大津へ御旗をそよめらる
時、彼半助が娘を親とも召連、江州八幡蓮照寺にて、御目見遂させられバ、殊

の外父が戦死を憐れ給ひ、かのいと孝ふき娘を掣を取、家を繼ぎよとの上意にて、家祿五百石の上、彼娘を又二百石被下之。掣を取源藏といふ。半兵衛歿後、此源藏罪有て遠流せられ、舟中にて病死す。是も遠流の前よ、半兵衛と稱す。此者子孫有やいふやをまらば、扱半兵衛好春が弟、源次郎廣末、幼年の時、父源藏直江州永源寺の僧とせんと欲せ。源次郎きうば。寺内を出奔しければ、父大に怒り、一生勘當し卒ぬ。仍泉南堺邊に寓居し、武を嗜み、勇力人より越るゆへ、相從遊士多かりし。終に右よあるはごとく、小田原御陣の時、供奉して戦死を遂ぐる也。其子あり、惣次郎廣元といふ。幼稚にして東西を辨へざ、泉南に寓居し年を経て江府に下り、父の功を以て、幕下に奉仕せん事を欲せ。時は朽木河内守元綱入道牧齋、元佐々木の一種たる好を以て、哀憐を加へ、願望を吹擧したる處、惣次郎不幸短命にして卒す。其頃九歳の稚子あり。母可落着手段なければ、金銀を添て彼子を江府の商家にあとへ、在所堺へ歸りたるが、彼子に告ぐるは、汝今商家に落魄せといへども、元江州一郡主の曾孫にして、祖父廣末に東照宮へ命をさしげし者あり、吾も尾州馬場氏の餘裔あり、今父が歿するよあとんで、遊客の習、懸命の所帯ふれば、悲

とふがら商家にあとへ、歸國せる所也。盛衰興廢ハ世の常にして、今更驚へからば、能父母に仕へ、成長に及ぶ、いうよもして、再び家を起し、大樹の恩恵に浴せん事を欲せべし、身貨殖をふし、賤者より下るとも、必武門たらん事を忘るべからばといへり。彼孤其詞心は徹し、骨は銘して、江府の中は年月を送りける。朽木河内守元綱入道牧齋、其身諸侯に列し、息民部少輔植綱に、大猷公の寵臣にて、殿中伺公の面々我支配今の若年寄也。如斯榮耀の身たきども、遠く氏族の好を捨て、彼孤を時々呼て愛憐を加ふ。一日植綱來り見ゆ。牧齋の曰、此童ハ吉川宗次郎が一子あり、父ハ勤仕の願を果さばして夭死す、實は孤とは是也、必いつくしと深かるべしと云々。牧齋寛永九年八十四歳にて卒す。植綱元來知有て情ある人ふれば、父が命を廢さば、尤愛憐を加ふ。彼孤漸く人と成て、商産を受はぐといへども、心は欲せざ。元來富を以て樂とせば、暫養母に仕へ、聊ち孝をふし、養父歿しければ、商業をせて、散人と成、周公孔子の道を學び、日本の古史をまたひ。和歌は志深く、時々泉南に赴き、實母の安否を問ふ。享年三十四歳にて、慶安三年相州鎌倉に退隱して、本朝上古のふきを見るよ、其詞幽微にして通ぞ。先哲の注釋山のごと

しといへども、皆臆見よして、牽合附會の説用ゆるよたらば、熟按せるよ、世に秘して相傳の旨あらむ、其人を得て師とし仕んと求る所よ、其感應にや。武江へ出たるよ、或亭よ數輩集りて雑話しける所、其内一人が曰、天孫日向の國へ降臨の時、天兒屋根命補佐せらる。夫より當今よ至る迄、彼後胤連綿して五攝家とす。尤和國の道、彼兒屋根命より鎌足公まで、代々相傳の處よ、入鹿の逆臣を誅伐さんとの志有し時、其身ハ勿論子孫迄も死亡よ決し給ふ。同姓の内中納言伊美麻呂ハ、其器よ叶たるよ依て、神代をりの秘旨を悉く彼人よ譲り傳へらる。是吉田の祖也。夫々吉田代々本朝の大道を傳へ、數代の間適時よ諂ひ、浮屠よ教るものあれども、虚妄を授け、ゆかく眞偽を秘し、惟受一人の密旨よして、當時五十三代目萩原の三位兼從卿ハ、吉田の嫡家よして是人よ傳來也。然るよ大閤秀吉薨じ、豐國大明神と祭られし時、東照神君の御旨よ依て兼從を祭主たらしむ。仍采邑千石を賜し、豐臣氏亡びて後、豐國の神祠を廢せらるしうバ、兼從も先退隱の體よて、本の稱號を避て萩原と呼。然共連々公義の御構もふく、今よ千石を領し、諸卿よ列せといへども、甚老衰よ及で、此道尙吉田へ傳んと欲せれども、幼少よして不叶、

殘多事共らふと語りたる。惟足いみじく嬉しき事よ覺して、急き鎌倉よ歸りて、頓て旅の粧を調へ上洛し、大徳寺よまゐるべ有て爰よ止宿し、兼從卿へ便らむ事を欲せども、老病よ臥して事の志げきをいとひ、人よまこへ給てぬよ依て無爲方、或日吉田の社へ詣て心の中をいのり一首を詠ぞ。

神の道しるへさかりに、吳服鳥衣やしと人の何おもふらむ。

此歌を兼從卿へ捧げ給へ、近き頃に又詣てべしと社人よ頼置歸宿し、四五日過て、又吉田よ往て兼從卿へ伺公せしよ、童子にたせけられ出て、相看の上、厚き志を感じらる。神代卷の日來ほど多ざる事どもを尋奉るに、むろしをり多の人を教とちびくといへども、足下程よ神書よ委くわたり、廣く見て尤さとき生質の人を見げと、大よ感じ、夫より師弟の交あつく、吉田よ四十年絶てふき神代卷の講談をはじめ、幽妙の意味をさとし給ふ。さて講釋の竟宴よいより、東へ歸り、又次のとし七月上洛して、吉田村の松樂庵といふ庵室に宿り、日々に兼從卿の亭へ趣き、和國の道を傳受あり。正親町大納言實豐卿も、惟足の徳を聞て友としよろき。この人を始、姉小路、富小路、風早などの廷臣、とふ惟足よ隨ひ、中臣板神代卷の講習被聞給ふ。月夜越て三

位兼從卿より、多賀要説をして、七十年以來汝がごとき器を求るに得る事
ふくして、吾道を傳んもの今足下を除きて敢て入ふし、道統の傳悉く授與
せばしと有々れど、惟足も冥加の至り身はあまり難有といへども、本朝の
大道を輕き隱士の身よてうけ繼奉らむ事、恐るの至り、不過之よし、再三辭
退有々れども、兼從卿多年の間、公家武家ハ勿論卑賤のものといへども其
器を考るに汝も及ぶ者ふし、天命汝も歸せる上ハ辭せばからばと有しガ、
猶も惟足再往の辭退終り許容ふくて、悉く本朝の大道其蘊奥を附屬せら
る。兼從卿又曰、足下ハ相陽の隱士ふれば、道必相山も埋れんとの憂、一理
ありといへども、足下も山を出世もかゝりて、道を起し給へるとにあらば、
縦其身山林も潜るとも、天命あらざらば、大人君子必是を招き、道大も興起さべ
し、天命至らざらば道亡べし、道の起らむざるも亡びんざるも、皆命也と云々。
然して惟足年を越て舊里鎌倉も下向あり、其の後この傳の永く和國も殘
るべき天命にや、東照宮の庶子、紀州大守權大納言賴宣卿○德ハ内ハハ聖
賢の道を崇め眞儒を招き、日々講習討論あり、外もハ武を勵し、防能の士を
集め、馳馬擊刀の術を練給ふ、賢息光貞卿并左京大夫賴純、最英才伶俐の質

也、故も天下の文武も遊ぶの士、彼門も必馬を繫ん事を欲せざるハふり
し。本朝の大道相山もかくれ有事、賴宣卿の御耳もふれしかば、惟足も便有
ものを尋られたるも、森田休庵其好あるを以て、渠をして惟足をめし給。時
も惟足領掌しふがら、一句を過て江府も來らば、賴宣卿又休庵も命じて脚
力をして召給へどもいまだ果さば、是併彼卿の賢慮の程を伺見て、出府せ
んとの事ふらむ歟。こゝもあいて、休庵又命を受けて書を贈り、猶々厚く招き
給ふ實拔傳へなれば、翌日惟足相陽を出て武江の御やうも伺公也。則禮
を厚くして道を尋給ふ。抑神道ハ本朝の道として、上代ハ是を以て世を治め
給ふ歟。惟足の曰、まうり、又問て曰、社人神を崇め、所作を行ふを以て神道と
いへり、然れど神學ハ所作を元とせる歟。惟足の曰、神を祭り所作を行ハ、社
人の神道也、是を行法の神道ともいふ、天下を治るハ、理學の神道と申て、全
く日用人の用ゆる所も有て、畢竟武をたふれ義を捨て、外も道ふしといふ
事を詳に述て、當時の冥福を祈り、長生を願ふがごとき、區々たる道もあら
ざる事を辨じけれど、賴宣卿甚敷御甘心あり、他日中臣拔を講説せし、賴
宣卿歎息有て、世の中も講述せる趣ハ、皆習合妄誕の病を遁せ、彼拔ハ神代

の餘管、天兒屋根の妙言深意有事を明免、是を益道を尋問て、遂に幽妙の理を徹し給ふ。殊に本朝の武を以て治め、文を以て治め、あまのつね。然るに浮屠の教盛りに行はれてより、朝廷の道は爲すに誣られ、日用の神道は、巫の道のごとくは成果て、武備日々衰へ、聖道もとまり廢せ、適々詞章訓詁の教計のこりて、詩歌管絃の遊びの多し移り行、終に天下頼朝以後、武將に歸し畢ぬ、東照宮の御控へ、本朝のむかしは叶ひ、武以盛ん、文以てたそく、難有御代あり、殊に東照宮吾國に則て吾國の道を以て治る教やあらん、吉田家の世々其眞偽を得といへり、心得らむものを下すべきよし、諛有て、神龍院と云ものを駿府へ奉りたるに、元來愚昧にして、聰敏は君子の師とあるべき人物は、何ららば、そでに神代卷の講談發端の時、東照宮の御本は無點也、依之よきを問ひ給ふ、さやあらば、則外の事へ轉じて、二つ三つ尋さを給ふ、是も滞りてほどをば、こゝに於て重て講談をかき給ふべきよし、して、其儀やを畢ぬ、汝其節出ふぞ、本朝の道ひらなべき也、時至らざるの歎息不遇之よし、頼宣卿再三仰ありて、講習度重りて事畢り、惟足又相山へ歸りけるが、萬治三年七月、何となく都の方類り、床鋪急ぎ上洛して、萩原

兼從先生へ伺公をし、重病よか、飛檄を以て惟足參洛を催し給ふ折柄あり、ゆへ無限悦び、吉田満丸時、八歳、萩原右衛門佐時、十六歳、兩人を近付、兼從世を辭せむ、汝等後年惟足に隨ひ、大道を請つぎ、再び家傳とふし、無窮に遺せべき旨、堅く願命の上、遺狀并大道不殘、附屬の證明を惟足に授け、同八月十三日、歿せらる。惟足も涙あぐら送葬を勤め、神海靈社と崇め祭りてかくふん。

いとをめて今、神代の鏡ともふるらむ君の影をたよむ。

事果て東へ歸りたるは、會津左中將正之朝臣科保、かよひけふくも台徳

公德川の御落胤、當時輔相の臣、朱子學英たる人あり、餘力ふへ、天文曆道

迄を究め、經學にも山崎嘉右衛門敬義、曆道に説川三哲、彼家賓とし遊べ

り、一日肥州正之朝臣惟足よまゝへ、神道五倫のをしへ問答有て、是より惟

足に從て、吾國の道を尊信せられ、年を重ねて深秘共傳へらる。其外加賀左中

將菅原綱紀朝臣前侍從兼若狹守源直明朝臣平松堀田備中守正俊を始、

國郡の主多く道に歸し、吾國の大道漸起らんとせるゆへ、紀州中納言光貞

卿德より、江府京橋邊に莫大の地を求め、惟足を鎌倉より遷し居しめ給

ふ。難有御惠、誠し神道尊信の表示あるもの歟。さて一言の願望もふかりしが、漸嚴有公○徳川家綱の上聽に達し、寛文七年七月廿八日惟足被召て台顔を拜せられ、祿を給ふ。其後吉田の満丸成長侍従に任じ、兼敬と稱せ從二位下。道の返り傳授、禁裏へ奏せられ、勅許有て、所司代牧野佐渡守親成、關東へ言上の上、惟足を營中へめされ、土屋但馬守數直上意被傳達し、御暇并御朱印傳馬を被下置。同十二年正月下旬、江府を立て上京先神海靈社へ詣し。

祈るふり吉田の山の榊葉の榮行影を常盤かきそよ、かく詠じて講談の席を起しぬ。兼敬ハ日々問來りて其間々ふ相傳の事を受らる。或時惟足、

むろしへやちとろろ本をふみむけて問こし道被又問きぬる。

大概事畢なれど、又近き年頃上京し、不殘道を傳へべきとし約束し、東へ歸りたる。重て上洛せど、無殘所返傳事終るべき被、大内の炎上等のさそぎ事ども有て、師命を果さば、一生是を歎息と云々。むふしく光陰重りて、惟足を以て齡かよぶくゆへ、門人諫て曰、吉田二位殿へ道傳授悉く果さんと欲

給へども、何角打過て早齡高く重り、はうらざる事も出来さば、眞傳斷絶せべき間、息源十郎從長へことごとく附屬あらむこそ、世の中の願不過之、殊は從長道は秀て、常は先生に替りて門人を導き教ゆ、とくく附屬あるべきよし、頻りは諫めなれども、惟足ハ故兼從卿の遺命、必果さん事を欲し、尙兼從卿へ附屬せべき心底の外無他、其上從長ハ愚息也、父子の愛は陥りて眞傳を私家に殘せよし、世上のせしむ恥るは堪らりとて、中々無承諾。猶も諫むる門人多き中、堀田五郎左衛門後任河内守一輝ハ、弱年より道は厚く志して篤實の人也。頻りは此事を諫争し、元々敷島の道に長じなれば、

天鏡そらよ移してあきらなき君の心ハ人も志るらむ、

此歌に惟足感じたまども、猶從長へ附屬の心ハふりしむ、元祿三年五月病よかゝり、療養可及體あらねど、門人の歎き、且諫まなく、流石惟足も非本意といへども、今相傳ふくんで、其傳永く本朝に絶ふん事を思ひつゝ、悉く源十郎從長へ傳授有しが、時あつて吉田家へ返し傳へ、我師命を不果事をとげよ、此道私に傳ふべきよあらざるを遺命して、漸病怠りなれば、例の鎌倉の舊亭へ至り心を慰め、翌年の春兼て公儀を拜受せし武總の

境北本所の別墅に赴き、保養有し、道の時至らぬ夜ふげきて、神代をりふと傳へても濱千鳥甲斐もふきさよ獨鳴也

とうち詠じ、終に同七年霜月十六日七十九歳にして歿せ。此別墅ハ公の重き御惠よて、地廣く拜受有。屋敷の内は道義沼とて、昔より大きふる沼あり。其邊よおさめ祭り、視吾堂靈社とあぐむ。光を後代に残し、神忠を萬世に建る、誠よ希世の人傑也。今按よ道義沼と云ハ、古ハ廣き沼と見えり。天和三年本所上地を記せしもの、堂木沼中島八百三十六坪を以て、近きりより此百姓に預けらるとあり。是ハまご吉川家へ賜はざる前の事也。かく廣き中島あるにても沼の廣うりし事推てあるべし。されど後年埋せしや、今ハやうやく三百坪許の池となせり。江戸志云、吉川家此屋鋪の中は鎮座せる處の神明宮ハ、延喜式神名帳よ此せる、下總國葛飾郡意富比神社の舊跡と傳へり。吉川家此説よ、昔此前よ有しを、惟足が居宅よ賜はりし時、船橋よ移さる、今猶舊址よ大木有と、此説最うけがひがとし。いうよといふよ、かの船橋神明の神職富上總介が藏せる諸家の寄附狀を見しよ、古くハ平治應長を始め、應永より以下の文書數通有て、多くハ千葉家より附せる處

あり、茲の中たしうよ船橋とあるせしもまよ有せと、古よりかの地に鎮座せる事明考し。おもふよ、かの惟足ハ、一世よ名を舉し神學中興の人ふれと、英雄人を欺きて、かゝる妄誕の説をいひ傳へしからん。されど此屋鋪の神明も古くよりの鎮座とミへて、寛文十一年梓行の江戸繪圖よも、此處よ鳥居をゑかきて神社ありしさまミへり。此神明昔ハ隨意よ參拜をゆるせしう、かの惟足歿してより後、久しくこれを禁じたよし、文化癸酉三月九日をり再び公の御ゆるしをかふむりて、もとのどく往還の人をして參詣せしむる事とふせり。

——葛西志

麻布三田新
溝疏鑿

八月九日辛巳○寛文七年(紀元二三二)辛巳、三正綜覽。岡山○備前國。城主池田光政○松平新太郎。鳥取

幡國○因幡國。城主池田光仲○松平相模守。二命○命。明年○寛文八年(紀元二三二)。二月期シテ、麻

布三田新渠○市内。ノ疏鑿ヲ助役セシム。○柳營日記、私記。十月十一日壬

午○寛文七年(紀元二三二)壬午、三正綜覽。老中小田原○相模國。城主稻葉正則○美濃守。命ヲ受ケ

テ之ヲ總督ス。○柳營日記、私記。十三日甲申○寛文七年(紀元二三二)甲申、三正綜覽。十七日

戊子○寛文七年(紀元二三二)戊子、三正綜覽。老臣ノ巡視有リ。○柳營日記、私記。十一月廿八

市街充實時代

五六五

日戊辰 二〇寛文七年(紀元二三三) 〇戊辰(三正綜覽) 川敷用地ヲ公收シ、〇柳營日次記。人見私記。八

年戊申 二〇寛文八年(紀元二三三) 〇紀元 正月廿五日甲子 〇甲子(三正綜覽) 普請奉行喜多見重俊 五〇

郎左衛門。城朝茂 〇半右衛門。 本郷長泰 三〇勝郎。 ヲシテ之ヲ奉行セシム。 日次記。 二

月朔日庚午、四日癸酉 〇寛文八年(紀元二三三) 〇庚午(三正綜覽) 府下大火有リ。 〇變災。 五

月甲戌 〇寛文八年(紀元二三三) 〇甲戌(三正綜覽) 爲ニ工事ヲ停ム。 〇柳營日次記。殿中日記。

麻布三田新溝疏鑿 是ヨリ先萬治元年災後經營ノ一施設トシテ麻布舟入堀

疏鑿ノ計畫有リタルコト、上文既ニ之ヲ記ス。寛文七年ノ麻布三田新堀疏鑿ハ、

實ニ之ガ實現トモ見ル可キ者ニシテ、萬治二年仙臺伊達氏ノ神田川役ニ對比

スル新堀川役ヲ起サムトシ、乃チ岡山鳥取兩池田氏ニ助役セシメ、北面神田川

ノ筋違見附淺草見附ニ對比スル南面新堀川ノ金杉見附ヲモ設ケムトシタル

ガ如シ。 〇港灣。篇參照。

助役下命。

八月九日 〇寛文七年。 早旦ヨリ雨天、終日不止。芝金杉ヨリ麻生筋ハ船入之新堀御

普請之手傳、松平新太郎 光〇池田。 松平相摸守 光〇池田。 被仰付之旨、兩人招殿中被

仰渡之。 殿中日記

九日 〇寛文七年。

麻布箕田新堀之船入普請、來年二月カ可相勤之旨、

松平新太郎 光〇池田。 松平相摸守 光〇池田。

右被仰付之。來年二月カ可取掛旨。 柳營日次記

八月九日 〇寛文七年。 麻布箕田エ舟入ノ新堀被仰付。依之右普請ノ儀、松平新太郎

松平相摸守兩人可仕旨、然ハ來年二月ヨリ可取掛由上意、忠清井。 〇酒申渡ス。老

中列座、列白書院也。 人見私記

九日 〇寛文七年。 松平新太郎光政、松平相摸守光仲に、明年二月より麻布三田新

渠疏鑿の事仰付らる。 嚴有院殿御實紀

總督奉行任命。

十月十二日 〇寛文七年。 晴天。去頃被仰付芝金杉ヨリ麻布三田筋舟入之御用之儀、

稻葉美濃守 〇正可承之旨、昨日 〇寛文七年。 於御前被仰出之。

殿中日記

十一日 〇寛文七年。

市街充實時代

麻布三田新溝疏鑿事蹟

一、箕田麻布筋舟入新堀之儀、去頃松平新太郎、松平相模守兩人へ被仰付之、來年二月、取掛、然ハ右御用諸事可承旨、美濃守○稻葉正則被仰付之。

——柳營日記

十一月十一日○寛文七年、箕田麻生筋新堀御用可承旨、美濃守被仰付。

——人見私記

十一日○寛文七年十月、先に松平新太郎、光政、松平相模守、光仲に命ぜられし三田麻布溝渠の事、稻葉美濃守正則が指揮をうくべしと仰付らる。

——嚴有院殿御實紀

八日○寛文七年十月、○奥

御普請奉行城半左衛門○朝喜多見五郎左衛門○重本郷庄三郎○長今度

——柳營日記

芝新堀之儀、御直ニ被仰含之。
八日○寛文七年十二月、普請奉行喜多見五郎左衛門、重俊、城半左衛門朝茂、本郷勝三郎、長泰に、其新溝の事面令し給ふ。

——嚴有院殿御實紀

老臣巡視。

十三日○寛文七年十月、晴天、芝金杉ヨリ麻布三田迄船入之所爲見分、酒井雅樂頭○忠。

阿部豊後守○忠、稻葉美濃守○正、板倉内膳正○重、被罷出、依之無登城。

十七日○寛文七年十月、晴天、今度被仰付芝金杉ヨリ麻布三田筋、新堀爲見分、久世

——殿中日記

大和守○廣、土屋但馬守○數、被相越、依之無登城。

十三日○寛文七年十月、來年、芝麻布筋船入堀被仰付之、雅樂頭豊後守、美濃守内膳正爲見分、被罷越。

十七日○寛文七年十月、

箕田御堀御普請爲見分、大和守、但馬守相越。
——柳營日記

十三日○寛文七年十月、來年麻布筋堀被仰付間、爲見分、忠清、忠秋、美濃守内膳正被遣。

——人見私記

十三日○寛文七年十月、三田麻布新渠の地を、酒井雅樂頭忠清并に諸老臣巡視す。

十七日○寛文七年十月、○中略、久世大和守、廣之土屋但馬守、數直三田新渠を巡視にまか

——嚴有院殿御實紀

蓋計畫ヲ定ムルガ爲ナリシナル可シ。
敷地收用。

廿八日○寛文七年十月、○中略。

市街充實時代

金杉箕田舟入普請之儀、今度被仰出_以。彼地借屋敷仕有之輩、屋敷御堀に掛ル付る立退、仍る引料并替地被_下之。

鈴木清兵衛屋敷之表、是又御堀切入ニ付る、代地被_下之。

小判百兩。

三枝攝津守組御書院番

伊丹織部〇雅

岡部丹波守組大御番

森兵吉

井上左太夫組

與力五人

小判廿兩。

右織部ハ、屋敷無之故、本庄ニル新規ニ宅地被_下、兵吉ハ拜領屋敷有之間、引料計被_下之。與力同心ハ、於本庄替地被_下之。

——柳營日次記

十一月廿八日〇寛文七年金杉箕田舟入普請今度被仰出_ニ付、彼地借屋仕有之輩、屋地御堀エ掛_以ニ付、立退者共ニ引料替地被行旨、其趣頭々エ老中申達ス。金百兩ツ、伊丹織部津三枝攝津守組同斷森兵吉岡部丹波守組金二十兩ツ、井上左太夫組與力五人。

——人見私記

芝士手跡町

一、當町起立之儀、寛文七未年八月中、金杉御橋際ニ御多門相建_以御沙汰ニ付、同年芝濱松町四町目、同所中門前三町目、同所片門前二町目、都合三ヶ所南

之方地先、御用地ニ被召上_以地所_以、土手出來仕_以。〇下

芝新網町〇中

一、町内南之方金杉川通切地ニ相成_以儀、寛文七未年十一月中、長東西ニ百間幅南北ニ八間、惣坪數凡八百坪程之場所、御用地ニ被召上、右川通土手御築立ニ相成。〇下

芝金杉通壹町目〇中

一、町内金杉御橋際西南之地所切地ニ相成_以儀、寛文七未年十月、金杉御橋際芝濱松町之方、御多門相建_以御沙汰ニ付、川幅御堀廣ケ有之、且町内御橋際手狭ニル、牛車乘馬等往來之節、度々怪我人有之_以ニ付、橋邊場廣ニ被成_下由。〇下

芝濱松町四町目〇中

一、川〇中

右ニ町内南境ニ有之、芝新堀之末ニル、金杉御堀又ニ里俗ニ金杉川ニ唱申_以。古來有來_以川ニル、堀割年代相分不申、寛文七未年八月、金杉橋際ニ御多門相建_以御沙汰有之、金杉橋ヲ將監橋迄之間、川幅七間程之所堀廣十八間ニ相

成川上麻布十番迄之所、川幅拾壹間ニ相成、町内近邊南方之川岸通、土手御築立被仰付、尤當町并芝中門前三丁目同所新網町并川向芝金杉同朋町等之地先、御用地ニ被召上。○中略。

一、町内南金杉御橋際切地ニ相成、儀之、寛文七未年八月中、右御橋際ニ御多門相建、御沙汰有之、御普請奉行阿部四郎五郎様○政重。大久保甚右衛門○計良。御掛ニ、川通土手御築立ニ相成、其節當町内家持五人分之地面、西側南角ニ多間口拾六間奥行町並貳拾間、同東側南角ニ、間口拾六間奥行町並貳拾間、南側惣坪數六百四拾坪之場所御用地ニ被召上。○下略。

中門前三丁目

— 文政町方書上

○上略。寛文七未年八月中、金杉橋際御多門相建、御沙汰ニ付、右川幅堀廣ニ相成、ニ付當町南之方地元間數坪數不相知御用地ニ被召上、三田有馬中務大輔様御上屋敷前ニ、當分拜借地被仰付。○下略。

一、町内南金杉御橋際切地ニ相成、儀之、寛文七未年八月中、右御橋際ニ御多

門相建、御沙汰有之、御普請御奉行阿部四郎五郎様大久保甚右衛門様御掛ニ、川通土手御築立ニ相成、其節當町内家持五人分ノ地面、西側南角ニ、間口拾六間奥行町並貳拾間、同東側南角ニ、間口拾六間奥行町並貳拾間、南側惣坪數六百四拾坪之場所御用地ニ被召上、三田有馬中務大輔様御上屋敷前ニ、當分拜借地被仰付。

金杉同朋町

一、當町起立之儀之、寛文七未年十月、金杉通壹丁目屋御用地ニ被召上、以跡明地ニ有之、以處、天和四子年、追々拜領地ニ相成申、

新網町○中略。

一、町内南之方金杉川通切地ニ相成、儀之、寛文七未年十一月中、東西ニ百間幅南北ニ八間、惣坪數凡八百坪程之場所御用地ニ被召上、右川通土手御築立ニ相成、三田有馬中務大輔様御上屋敷前ニ、御代地拜借仕。○下略。

湊町

一、當町起立之儀之、寛文七未年十二月中、金杉御橋際ニ御多門相建、御沙汰ニ付、芝新網町川通凡長百間幅八間御用地ニ被召上、右町跡ニ土地御築立ニ

有之。略。○下

金杉裏壹町目略。○中

一、川

略。○上 寛文七未年十月川幅御堀廣ケ有之。付、町内家持三右衛門、又右衛門、

五郎兵衛利兵衛與惣右衛門、源右衛門、伊奈兵右衛門、殿、佐野福阿彌殿、都合八

人所持屋敷合三千貳百四拾坪五合御用地ニ被召上、三田有馬中務大輔様御

上屋敷前ニ有、當分拜借地被仰付。略。○下

中門前三町目代地

略。○上 寛文七未年八月中金杉橋際ニ御多門相建、御沙汰ニ付、右川幅堀廣ニ

相成、付、元地内南之方地先間數坪數不相知御用地ニ被召上、當分之内當

所ニ拜借地被仰付。略。○下

松本町壹町目

一、當町起立之儀、寛文七未年八月中金杉御橋際御多門相建、御沙汰有之、

芝金杉通一町目家持一人同所裏一町目家持八人之地所御用地ニ被召上、譯、芝金杉町方申上、通ニ有、同年十二月中爲引料小間ニ銀拾枚宛被下置、三

田松平土佐守様御屋鋪前ニ明地有之、當分右地所御借地被成下、間引移、拾

一ヶ年程致住居、略。○下

松本町貳町目

一、當町起立之儀、寛文七未年八月中芝金杉御橋際ニ御多門相建、御沙汰

有之、御普請御奉行阿部四郎五郎様大久保甚右衛門様御掛ニ有、川通土手御

築ニ相成、付、芝濱松町四丁目ニ住居致、家持共五人之地面御用地ニ被

召上、三田有馬玄蕃頭様御屋鋪前ニ有、當分拜借地被仰付。略。○下

新網町代地

一、當町起立之儀、元地芝新網町方切地之廉ニ申上、通、寛文七未年十一月

中、金杉川通土手御築立ニ相成、付、凡長東西ニ百間程、同南北ニ八間通御

用地ニ被召上、當所有馬中務大輔様御屋鋪前南角通ニ有、表間口四拾六

間壹尺六分、裏行拾間、同年十一月中當分拜借地被仰付。略。○下

府内備考

工事分擔兩池田氏ハ、工事ノ分担區ヲ定メテ之ガ準備ニ著手シタル者ノ如ク、

鳥取池田家ノ所傳ニ左ノ如ク見ユ。

市街充實時代

五七五

一、寛文七丁未年八月幕府光仲田。池ト岡山侯池田光政トニ命シテ芝金杉堀ノ前後ヲ疏鑿セシム。

二、藩各土地ヲ分畫シテ光仲金杉海畔ヨリ中橋ニ至ル迄ヲ疏鑿ス、明年ニ至リ故アリ兩侯俱ニ役ヲ辭ス。光仲執政荒尾志摩老臣荒尾采女等ヲシテ奉行セシム。
——侯爵池田家回答取藩。

起工式豫定。

廿五日寛文八年正月。

城半左衛門茂朝。北見五郎左衛門俊重。
本郷庄三郎泰長。

右被爲召之、麻生筋船入御普請初、來月三日カ可申付之旨、老中被仰渡之。

——柳營日記

江戸大火 寛文八年二月朔日及四日ノ大火ハ下ニ記ス所ノ如シ。
工事中止。

二月五日寛文八年。松平新太郎松平相模守兩人ニ舊臘被仰付ハ麻布筋之御堀普請、先延引可仕之旨、被仰出出。

——殿中日記

三日寛文八年。

一、麻生船入之儀、大火事ニ付、今日御普請初御延引。

五日寛文八年。

松平新太郎

同 相模守

右被爲召出之内々被仰付麻生御堀御普請、先當年ハ度々大火ニ付、御延引被爲遊之、無用之旨、御直ニ被仰出之。
——柳營日記

一、同月寛文八年。五日、御黒書院へ出御、松平相模守松平新太郎ヲ召シ、去ル一日昨四日江戸中大火事ニ付テ、兼テ仰セ付ラル所ノ芝御堀普請ノ儀、當年ハ延引致スヘキ由、仰セ出サル。

——萬天日錄玉露。

二月五日寛文八年。黒書院出御、松平新太郎松平相模守御目見。是去朔日昨四日大火ニ付、當年芝筋堀普請御延引ノ旨、御直ニ被仰含。

——人見私記

是日寛文七年。紀元二。具役園部正名五郎。太鼓役近藤市正太。兵衛。郎。二。

下谷淺草溝渠内。市ノ奉行ヲ命ズ。八年戊申寛文八年。紀元。十月二日戊。

市街充實時代

五七七

下谷淺草溝
渠事蹟

辰正○戌辰三

工成リテ掛員受賞ス。○柳營日次記。殿中日記。人見私記。嚴有院殿御實紀。

下谷淺草溝渠 傳フ。

八月九日○寬文七年 下谷筋下水道惡敷付る、水ハキ堀之奉行御具之役園部五郎

左衛門名○正 御太鼓之役近藤太郎兵衛正○市 被仰付之。——殿中日記

八月九日○寬文七年 下谷淺草筋新規ノ水拂ノ水道堀之、又ハ舟入被仰出、此趣道

奉行エ老中傳之。右奉行園部五郎左衛門、近藤太郎兵衛被仰付。能登守利房○土井

伊賀守○永井 申渡ス。——人見私記

九日○寬文七年

一、下谷淺草筋新規之水拂之水道堀、是又船入御普請奉行。

園部五郎左衛門 近藤太郎兵衛

右之通被仰付ハ。——柳營日次記

九日○寬文七年 又貝役園部五郎左衛門、太鼓役近藤太郎兵衛に、下谷淺草溝

渠の奉行を命ぜらる。——嚴有院殿御實紀

用地收公。
廿八日○寬文七年

一、淺草下水堀御普請被仰付故、右之地ニ在之輩之屋地之表、御堀場ニ碍ハニ付る、九尺ツ、切入レ、依之銀五十枚ツ、被下之。

銀五十枚。

同。

同。

同。

金五兩。

同三兩ツ、。

御勘定 堀江半七郎○成親

御代官 設樂源右衛門○能政

水野周防守組大御番 田邊宇太夫○良龍

三宅傳左衛門之組小十人 小宮山六郎右衛門○宣安

御數寄屋坊主 以 三 人

同所御路次之者 五 人

——柳營日次記

十一月廿八日○寬文七年 淺草下水道被仰付ニ付、右地ニ在之輩ノ屋敷ノ裏堀場ニ九尺ツ、切入之。依之銀五十枚ツ、被下。勘定堀江半七郎代官設樂源右衛門、小十人小宮山六郎右衛門也。——人見私記

竣工。

二日○寬文八年

十月○中略 淺草下水道之御普請御用勤ニ付、

市街充實時代

二日○寛文八年十月○中略。淺草溝渠成功により、奉行せし具役園部五郎左衛門・太鼓役近藤太郎兵衛褒銀十枚づゝ下さる。

此役或ハ淺草新堀ノ疏鑿ニ非ザル歟。府内備考府内誌殘編等ハ、新堀ノ疏鑿ヲ萬治元年頃ナル可シト爲スモ、果シテ然ルヤ否ヤヲ知ラズ。

新堀

中反圃海禪寺の裡手より本願寺の西へかゝり、總て南へ流き、願曆所の北より少しく東へ屈曲し同所東方よて三味線堀と合せ、堀幅凡二間半餘。江戸圖說云、上古を此堀ふし、鳥越より此流を計三味線堀の事也。よして、此所一筋の道なり。明曆後よに出來し事とみえり。此堀なき以前を、金藏寺・慶善寺・西福寺・東國寺今の寺々あり、是慶安の頃此圖ふとへりと。壽松院門前書上ニ、寛永四卯の由。是も恐く誤るべし。今按よ下谷大工屋敷と云ハ、萬治元年淺草新寺町通り道橋水吐下水等御普請の時、元御大工頭支配大工棟梁善二郎傳十郎と云者の掛り成し、此普請の功に依て、同二年右地所割餘り水溜地を賜ひて

町屋敷となせしよし也、恐くハ此時彼邊水落の爲として堀割有しならん、今也石神井用水の餘水をも中反圃の邊よて此堀に落せり。此堀は大川より沙さし入て、通船の便あり。又此堀出來し後を堀の兩岸をも新堀端と呼びて、小地名と成せり。此堀は數條の橋を架して往來に便せり。——府内備考

新堀 海禪寺裏ヨリ東本願寺ノ西堺ニ係リ、南流シテ末ハ願曆所ノ東方ニテ三味線堀ノ流末ニ合ス。此堀疏鑿アリシ年代詳ナラス。按スルニ、萬治元年里俗新寺町ト唱フル邊スヘテ道橋下水等ノ修理アリ。此時疏鑿アリシナラシ。元祿五年町人三人堀ノ定浚ヲ命セラレ、下谷小島町ヲ賜ハリテ、其費用ニ宛テラレシカ、明和元年其地ヲ能役者觀世織部ニ賜ハリ、堀ノ浚ヲモ織部カ奉ハリトナレリ。——府内誌殘編

井伊氏邸前
土手修築

廿五日丁酉○寛文七年八月○丁酉、三正綜覽。小姓組高木定清○忠右衛門。書院番松下

直綱○與兵衛。ヲ奉行トシテ、井伊直澄○掃部頭。邸前ノ土手○市内町區。ヲ修築セ

シム。十二月廿七日丁酉○寛文七年○丁酉、三正綜覽。竣工授賞有リ。○殿中日記。

人見私記。嚴有院殿御實紀。寛政重修諸家譜。

市街充實時

井伊氏邸前土手修築

廿五日○寛文七年八月

一、

右高木忠右衛門○定清相加井伊掃部頭○直澄前土手少々崩○直綱付、可築直旨。

○寛文七年八月廿五日早朝ヨリ終日雨天。柳營日次記

御小姓組植村志摩守組

高木忠右衛門

御書院番仙石因幡守組

松下與兵衛

右兩人事井伊掃部頭殿前御堀破損有之ニ付、修覆奉行被仰付之。

殿中日記

廿五日○寛文七年八月松下與兵衛高木忠右衛門兩人井伊掃部頭前ノ土手少々崩付、可築直旨奉行被仰付。

人見私記

廿五日○寛文七年八月小姓組松下與兵衛直昌は、小姓組高木忠右衛門定清とともに井伊掃部頭直澄邸前の土手修築の奉行命ぜらる。

竣工行賞。嚴有院殿御實紀

廿七日○寛文七年十月

金貳枚

時服貳ツ羽折

井伊掃部頭屋敷外御堀土居破損奉行

高木忠右衛門

松下與兵衛

柳營日次記

廿七日○寛文七年十月小姓組高木忠右衛門定清松下與兵衛直昌は、井伊掃部頭直澄邸前の堀土居修理成功し、○中略金時服給ふ。

嚴有院殿御實紀

定清○初昌次。清房。喜太郎。忠右衛門。

正保四年十二月二十五日御小姓組に列し、○中略七年十二月二十七日また

井伊掃部頭直澄の邸地の前堤普請の事をつとめしにより、時服二領羽織

一領黄金二枚を恩賜せらる。

直綱○甚三郎。源左衛門。與兵衛。

十八年○寛永四月十六日御書院番に列し、寛文七年十二月二十七日高木忠

右衛門定清とともに堤普請の事をうけたまはり、つとめしにより、時服二

領羽織一領黄金二枚を賜ふ。寛政重修諸家譜

松平忠房等
屋鋪替

廿八日庚子○寛文七年(紀元二三二七)年八月○庚子(三正綜覽) 福地山○丹波國 城主松平忠房○主殿頭 常盤

橋上屋鋪○市內 淺草下屋鋪○市內 ヲ返上シテ三田○市內 芝○市內 於ケル

京極高國○後守丹 ノ元屋鋪ヲ賜フ。○柳營日次記。寛政呈譜。 淺草下屋鋪○市內 八、十月

廿九日庚子○寛文七年(紀元二三二七)年七月○庚子(三正綜覽) 老中板倉重矩○正 常盤橋上屋鋪

○市內 八、十一月晦日庚午○寛文七年(紀元二三二七)年七月○庚午(三正綜覽) 厩橋○上野國 城主酒井忠清

○雅頭 ノ子忠舉○河内守 ニ之ヲ與フ。○柳營日次記。

松平忠房等
屋鋪替事蹟

松平忠房等屋鋪替 三田二丁目邸ハ寛文江戸圖春日大明神ニ隣リテ松平主

殿下有ル者是也。

廿八日○寛文七年八月○中略

一、松平主殿頭願ニ付京極丹後守○高 箕田上屋敷被下之、常盤橋上屋敷淺草

屋敷被差上之。
柳營日次記

松平忠房

忠房○從五位下 主殿頭。叙四品。後大炊頭。初五郎八。

同文。七丁未年八月廿八日、常盤橋屋敷淺草兩屋鋪御用ニ付差上三田貳町

目京極丹後守上り屋敷被下置ハ。
寛政呈譜

板倉重矩
酒井忠房

板倉重矩酒井忠房賜邸ハ、

廿九日○寛文七年十月○中略

一、今日松平主殿頭淺草下屋敷上ケ地、板倉内膳正○重 拜領。

晦日○寛文七年十一月○中略

右、常盤橋松平主殿頭上ケ屋鋪被下之。
酒井河内守○忠

十一日○寛文七年十二月○中略

右、今日常盤橋屋敷ハ移徙濟。
酒井河内守

柳營日次記

九月九日辛亥○寛文七年(紀元二三二七)年七月○辛亥(三正綜覽) 上野孔子堂○市內 ヲ修理ス。○柳營日次記。

孔子堂修理 八、

九日○寛文七年九月○中略

東叡山孔子堂大破ニ付、修復被仰出、弘文院○林 春勝ハ達。

柳營日次記

市街充實時代

九日○寛文七年。忍岡文廟修理し給ふべき旨、林弘文院春勝につたへらる。

——嚴有院殿御實紀

附記
谷原事件

〔附記〕 谷原事件

十月廿二日○寛文七年。評定所谷原新田事件ヲ審理シ、代官細田時徳、近山安高ヲ處罰ス。

十三日○寛文七年八月。

一、去年常州谷原新田就御普請、

御代官 細田小兵衛○時徳

近山五郎右衛門○安高

右私曲之由、彼近郷百姓其依捧訴狀、寺社奉行町奉行御勘定頭

御目付 土岐十左衛門○頼親

彦坂源兵衛○重治

右可遂穿鑿旨被仰出之。

十八日○寛文七年八月。

一、今日於評定所、

細田小兵衛

近山五郎右衛門

右新田之儀御穿鑿之内、小兵衛五郎右衛門共ニ酒井修理大夫○忠直御預ケ。

廿二日○寛文七年十月。

一、今日於評定所頃日御糺明之。

御代官 近山五郎右衛門

細田小兵衛

被仰渡之覺。

一、大造成新田御普請被仰付處、布川築留水支、百姓及難儀以段、早速不申上レ、不届ニ思召レ事。

一、去年築留を切レ様被仰渡レ處、不申渡、當二月迄川筋普請申付段、不届之事。

一、繩手一同無之處を、有之様ニ申偽儀、不届之事。

右之通不調法ニ付、切腹をも可被仰付レ得共、御勘定無滯其上、此度百姓目安之趣被遂御穿鑿之處私曲無之ニ付、細田小兵衛儀之内藤豊前守○信良、近山五郎右衛門と秋田安房守○盛季へ御預ケ之旨、北條安房守土岐十左衛門彦坂源兵衛立合、右之通申渡之。

但、小兵衛五郎右衛門儀、十二人扶持ツ、可遣之。召仕之人數ハ五人可附屬旨之。

——柳營日次記

十三日○寛文七年八月代官細田小兵衛時徳近山五郎右衛門安高去年常州谷原新墾の事により秘姦のはからひありと、士民訴るにより、寺社町奉行勘定頭并に目付土岐十左衛門頼親彦坂源兵衛重治して尋鞫せしめらる。
 廿二日○寛文七年十月この日代官細田小兵衛時徳を内藤豊前守信良にあづけられ、近山五郎右衛門安高を秋田安房守盛季に預られ、各月俸十二口づゝ下され、僕五人を従はしめらる。こは隸下の農民訴状をさゝげしにより鞫問ありしに、先に大開墾の事命ぜられしとき、衣川を築留め水さゝへ、農民艱困に及しを、速に聞えあげず、去年その新築の堤防を除くべしと命ぜられしを、強て此二月まで堤防を築き、堰道なき地をありと偽り聞え上しにまぎれなければ、切腹せしむべしといへども、これまで贓罪を負し事もふく、私曲のふるまひもせざれば、寛宥せられて、かく命ぜられしとなり。

嚴有院殿御實紀

〔参考〕柳營日次記二、

○寛文六年十二月廿日青○中略。

一、

伊奈半十郎○忠常。

右被召、年來常陸谷原開發付る、右川築切以處切流、并堤川除之御普請奉行大島雲八被差添、彼地に可申遣以間、萬端相改可申付由也。
○寛文七年二月三日北風。

大島雲八郎○義近。

伊奈半十郎○忠常。

右常陸谷原開發之地、古川築留以所、切流如元御普請付る、爲奉行被遣之、御暇人等之御朱印御扶持方添狀被渡之、拜領物ハ無之。

高木伊勢守○守久。

保田若狹守○宗重。

是又兩人に差添可被遣由。

御被官大工

谷田清三郎○正信。

是又被遣之。

八日○寛文七年閏二月中略。

一、

高木伊勢守

保田若狹守

大島雲八郎

伊奈半十郎

右常州谷原新田歸登城也。

○寛文七年六月朔日申下刻雨。
○中略。

金五枚、
羽時服三折。

大島雲八
伊奈半十郎

居舍新造其
他禁制

此兩人、常州谷原新田築切場所、如元切流堤川除等之御普請奉行被仰付、
去二月被遣、出來歸參、爲御褒美被下之。

十二月廿八日戊戌○寛文七年(紀元二三二七)○戊戌(三正綜覽)、屋舍新造其他ニ關スル禁令

出ヅ。○柳營日次記、殿中
日記、撰要永久錄。

屋舍新造其
他禁制事蹟

屋舍新造其他禁制 蓋申明也。選要永久錄十月廿二日附トス。

廿八日○寛文七年
十月○中略。

一、今日被仰出ハ趣、

一、此以前々如被仰出之所々明地ニ家ヲ作出ハ儀、堅ク爲御制禁之條、明春
以御檢使可被相改ハ。若新規之家を作出ハ輩於有之者、可爲曲事衰。

一、奉公人屋敷之内、賣買人ニ借ハ儀、彌停止也。萬一借ハ輩於有之者、是又可
爲曲事。

一、自今已後、御料私領之百姓、寺社領等之地を借、家を作リ者於有之ハ、可
爲曲事之事。

附所ニ依斷之上、可受差圖之事。

右之通、諸番頭、諸物頭、諸役人ハ執事傳之。

柳營日次記○人見
私記同。

○法文同、略。

未○寛文
七年。八月廿八日

右之通於殿中諸番頭中ハ被仰渡之。

殿中日記

○法文同、略。

未○寛文
七年。十月廿二日御當家
令條同。

右○寛文
七年。同十一月三日御觸、町中連判。

撰要永久錄

〔附記〕 火藥庫燒ク

廿九日○寛文七
年十月。

松平隱岐守○久松
定永。

右箕田下屋敷ニ鐵炮之藥藏、火入悉炎上。

柳營日次記

廿九日庚子○寛文七年(紀元二三二七)○庚子(三正綜覽)、屋鋪替有リ。○柳營
日次記。十一月○寛文七年
(紀元二三二七)

及十二月廿三日癸巳○寛文七年(紀元二三二七)○癸巳(三正綜覽)、ニモ屋鋪ヲ賜ヒタル者

屋鋪給賜

附記
火藥庫燒ク

屋鋪給賜事

東京市史稿

有リ。○寛政呈譜。柳營日次記。

屋鋪賜給 左ノ如シ。

廿九日○寛文七年十月○中略。

松平上野介榮○近本庄屋敷、安藤九郎左衛門矩○重與力屋敷方依頼替被下之。

柳營日次記

安藤重矩
與力

井上正景

正景半十郎。半入。左太夫。

同文。○寛七未年十一月、澁谷ニある下屋敷被下。但右屋敷ニ御鐵炮爲細工所被下。初芝金杉邊ニある被下替地、其後□ニ

廿三日○寛文七年十月○中略。

寛政呈譜

一、今度屋敷拜領之面々、

各寄合之衆

松平五郎八池田政種。

池田庄左衛門濟○政

眞田勘解由就○信

本多忠右衛門之○正

松平織部之○定

千本十郎左衛門門○十郎右衛門長勝敷。

松平内藏介允○内藏

新御番頭 大久保彦兵衛重○忠

松平政種
池田政濟
眞田信就
本多正之
松平長勝
千本内藏
松平内藏
大久保忠重

但屋敷替上ケ屋敷第兵九郎拜領

狩野守信畫像

東京狩野探道所藏

狩野守信屋鋪ハ、御府内共在遺沿革圖書延寶圖殿治橋外北側五郎兵衛町南殿治町一丁目間ニ、狩野屋敷下有リ。扶桑畫人傳探幽傳、元和七年殿治橋外ニ於テ居屋敷ヲ賜ヒ、ト見エ、寛永江戸圖「狩野采女」野主馬寛永九年圖「狩野主馬」ニ作ル。ト記ス。寛文七年賜フ所ハ何レノ屋ナルヤヲ明カニセズ。守信ハ本朝畫史ニ左ノ如ク記ス。

狩野守信者、永德之孫、孝信之長子也。初稱采女、剃髮號探幽齋。自孝信預繪所故、至子探幽畫南殿賢聖者兩度、曾丹青之妙、緬超越于父。海内獨步、更無異論。上自王公、下逮賤隸、珍之重之。以金玉募索冠古今。猶足從一時之好。以所畫、本摹雪舟之奇蹤。於是筆墨飄逸、傳彩簡易、而自然一變狩野氏自成一家。天性得搜奇者也。今夫鳴當世輩、皆非不祇探幽糟粕者。末流漸失古法、而不能論其本。豈知探幽出新意、有思趣哉。起自法眼、叙法印於此時、應太上法皇製、忝拜玉體、令探幽畫之。今所藏于般若舟院之尊像也。延寶二年甲寅十月七日歿于家。壽七十三。

宗 有塗長右
田 澤門正昌
尾 崎源太郎
關 口五左
山 田正朋
大 石莊兵衛
衛 津伊兵衛
栗 津伊兵衛
中 松村勝升
飯 田正吉
奧 村八左
奧 村幸次
田 代信高
林 島嘉高
長 島嘉高

宗 與

御歩行目付
有塗長右衛門

火之番
田澤惣右衛門昌。正

各御鳥見
尾崎源太郎

關口長九郎朋。正

山田五左衛門

大石莊兵衛

栗津伊兵衛

松下安兵衛升。勝

中村又兵衛門。又左衛
利統歟。

飯田又右衛門吉。正

奧村八左衛門

奧村七郎右衛門忠。幸

田代又左衛門次。信

林理右衛門古。知

長島百助高。嘉

一、今日土岐兵部屋敷拜領。

——柳營日次記

信之初宣武。七郎右衛門。

寬文七未年十二月於本所屋敷五百七十坪被下之。寬文八申年二月屋敷爲地
形料金六十八兩被下之。

——寬政呈譜

〔附記〕 小笠原氏抱屋鋪

小石川御屋鋪
一、寬文七丁未年ヨリ、當御屋鋪忠雄公笠。小。願。ノ御抱持トナル。

附記
小笠原氏
抱屋鋪

——武江藩邸記

是年二〇寬文七年紀元
二三二七年。寺院ノ轉移起立シタル者若干有リ。上。續府內備考。

寺院起立轉移 寬文七年中寺院ノ起立轉移シタル者ヲ舉グ。

大長寺 麻布永坂ニ起立ス。

越後國三島郡田村法王妙法寺末
麻布永坂町
本妙山大長寺

一、境内古跡御年貢地百七拾九坪外ニ御預リ地六拾貳坪餘持添地三拾貳坪
餘。

一、開闢起立之譯

寬文七庚午年起立ニ御座由緒緣起等相知不申。

——文政寺社書上

正見寺 元鯨河橋南町ニ借地ス。

西本願寺末
專念山壽光院正見寺 元鯨河橋南町

境内借地百九拾貳坪。

略。上 駒井家十五代玄蕃亮鄉興、其子家興出家シテ祐念了順之號ス。正見寺ニ

市街充實時代

寺院起立轉
移事蹟
大長寺

正見寺

住之。其後寛永之頃、本尊之告こより、江州を退き、江戸赤坂に來り、寛永五戊辰年、江戸正見寺を起立ス。中興開山也。然ル處、明暦元乙未年、寺地御用こ付被召上、地所差上同二申四ッ谷仲町湖雲寺境内に引地仕し。寺地拜領可被仰付間、地所見立可奉願旨、井上河内守様被仰渡し處、同三酉年、御府内火災こ付御取込故、追る可奉願旨こ付、其後寛文七丁未元、鮫河橋南町伊賀衆領百姓地に借地仕し。

續府内備考

發昌寺

發昌寺 鮫河橋に起立ス。

上野國沼田龍華院末
龍泰山發昌寺 鮫河橋

境内年貢地七百五十坪、伊賀衆給地。

起立寛文七未年五月廿九日。

續府内備考

龍善寺

龍善寺 四谷伊賀町ヨリ早稲田町ニ移ル。

東本願寺末
牛込早稲田町
淨土眞宗 太子山聖德皇院龍善寺

一、境内濟松寺領年貢地 南表間口三拾五間、
奥行三拾二間。 此坪數千百貳拾坪。

外御除地 表間口拾三間、
奥行五拾四間。

右に、四ッ谷先千駄ヶ谷に御座し。往古火葬場引跡にあり、寛文四年に抱地に被仰付し。延寶三寅之四月千駄ヶ谷邊御繩入之節、御除地に被仰付し趣、安藤治右衛門願に付被仰付し。○中

一、開祖圓明院教祐。右に、東照神君様御當地御入國被爲遊し、後、安藤治右衛門三州佐々木上宮寺且那故、圓明院教祐ヲ呼下シ、上宮寺分寺にあり、四ッ谷伊賀町にあり、菩提所建立仕し。教祐一代上宮寺ト稱シ來リし處、二代目岡遠院宣伯に任職被仰付し節、東泰院宣如上人、思召ヲ以信證院蓮如上人眞影并御自身御壽像を、御裏書に龍善寺宣伯と寺號并に御名文字迄被下之し。從是龍善寺を相改申し。四ッ谷伊賀町にあり、建立を寛永十五年に御座し。且亦開祖教祐の寛文三壬寅四月二十二日七十八歳遷化、二世宣伯代寛文丁未年○七月唯今之地に引移申し。即寛文十三丑年四月二十一日五十四歳往生、今以三州碧海郡佐々木に上宮寺有之し。

文政寺社書上

大願寺

大願寺 開山曉譽是年寂ス。

淨土宗
京都知恩院末 本光明山放照院大願寺

一、境内四百七拾六坪、濟松寺領年貢地。

市街充實時代

但、表間口貳拾貳間。地尻貳拾七間。

起立之年代ハ相分不申、牛込津久戸下ニ起立致シ處、御用ニ付被召上、當時之地所〇牛込ハ罷越シ。

一、開山天蓮社曉譽上人露明和尚、寛文七未七月二日遷化。右筑前博多人、姓佐藤氏。博多極樂寺ニおゐて出家、觀知國師ニ的法シ、初信州松下大願寺ニ住シ、後當寺并早稻田大養寺開山ニ相成申シ。

本京都知恩院末光明山放照院大願寺 牛込榎町

境內四百七拾六坪、濟松寺領年貢地。(〇中略)

開山天蓮社曉譽上人露吟和尚、寛文七未年七月二日遷化。〇下

續府内備考

洞雲寺

古跡

一、境內八百拾六坪

内、三百六拾六坪

四百五拾坪

外、九百八拾三坪持添

右、洞雲寺々社奉行エ願出シハ、九百八拾三坪之處、四十年以前〇寛文所之者

黄檗山萬福寺末 關口村 洞雲寺

除地。

年貢地。

年貢地。

致寄進持添罷有シ。右之場所捨物杯折々在之、不用心ニ付、寺社方帳面ニ相載、竹垣等致度旨願出シ。彼地今井九右衛門支配所ニ付、様子相尋シ處ニ、元祿六酉年寺社方境內改御帳面ニ相載、年久持添在之。年貢彼等並ニ洞雲寺相勤ハ得ハ、障義も無之由申越シ。右之場所、今程雨宮勘兵衛御代官所ニ成シニ付、右之趣承合ハ處ニ、最前九右衛門方々申越シ通、相違無之由申來シ。猶又遂吟味ハ處、洞雲寺申旨無相違ニ付、願之通指免之。右持添地家作之義ハ勿論、卵塔場ニも堅ク取立申間、鋪旨、證文申付之、洞雲寺惣境內ハ百拾六坪々書出シ得。寺社方帳面々坪數相違ニ付、是又致吟味ハ處、洞雲寺書出シ通、相違無之。依之右之越寺社方帳面ニ致張紙ハ間、本多彈正少弼〇忠方々斷手紙ヲ以申越シ、故、寶永三丙戌年五月申上ハ處、願ノ通爲、仕ハ様ニ被仰渡、則洞雲寺并處之名主召寄申渡之。

除地古跡寺社帳ノ内關口村、本寺宇治黄檗山萬福寺、八幡別當禪宗洞雲寺々張紙在之處ニ張。

心行寺

心行寺 池之端七軒町ニ起立ス。

市街充實時代

淨土宗

小石川法傳寺末

聖衆院影向山心行寺

一、寛文七未年閏二月建立。

一、御除地古跡表口六間。奥行廿八間。惣坪數百六拾八坪。

——文政寺社書上

再校江戸砂子、影向山心行寺、法典寺末、七ケン丁、下記ス者本寺也。

教證寺 下谷茅町ニ起立ス。

東叡山御門前當境内五十七坪。

下谷茅町

教

證

寺

當寺由緒

開基教證院殿、幼名長姫々奉稱シ、御父ニ東本願寺教如御門跡、大阪天滿在住之時、天正十六年誕生。慶長元年勢州桑名ニおゐて本統寺建立、長姫御方九歳之時、桑名ニ下向、女儀シ得共、寺務被致シ、暫ク在住ニシ、慶長四年十二歳ニ歸京。同八卯年十六歳ノ時、花山院左少將忠長卿ニ御入嫁被遊シ。同十二年未十二月十二日久遠壽院殿御誕生。同十四年忠長卿七月四日故有之、後陽成院帝々蒙勅勘、十一月八日松前ニ流罪被仰付シ。依ル長姫御方久遠壽院殿御三歳之時御伴ハ被成、里方東本願寺ニ御歸住之後、元和六申年南光坊天海大僧正本願寺入來有之、久遠壽院殿十四歳之御時、御乞被成、同九寅年駿府惣

持院ニシ御得度有之、寛永元年東叡山を開闢被遊、常ニ被爲住シ。長姫君御實子東叡山ニ被爲在之、故、寛永九年十二月御弟宣如御門跡御同道御下向、然ル處御女儀之御哀故、上野難被爲住思召、不忍池之邊御隱室を被遊御居住有之。然ニ長姫君十二年御在府被遊シ、慶長之比桑名ニ御安住被遊シ、其本統寺を被爲續シ、壽量院宣惠連枝、七月之始メ御病氣之義申來シ、故、無據桑名へ被爲登シ、處、初冬之頃々御發病ニシ、寛永廿年十二月十七日五十六歳ニ卒去。本統寺ニ御墓御座シ。江戸下谷池之端御隱室之地、爲御菩提、慈眼大師之養甥敬念寺了圓と申者ニ被仰付、中陰法夏修行仕シ。其之後、寛文七未年十二月十七日教證院殿廿五回忌被爲當シニ付、山科々久遠壽院殿本願寺ニ御入來、琢如御門跡ニ御頼被遊シ、敬念寺了圓年來御法會相勤シニ付、教證院殿之院號を寺號ニ相改、二代目寺務被仰付シ。本願寺之御一家餘間席ニ被召加シ。○中

——文政寺社書上

古來々地中寺號光善寺と申者有之。尤御奉行所御用達之時、爲院代光善寺指出シ、哀ニ御座シ。

休昌院 本郷丸山ヨリ池之端ニ轉ズ。

市街充實時代

淨宗臨濟派
京都妙心寺末
池之端七軒町
淨松山休昌院

古跡寄進地南北拾一間、奥行東西拾九間、此坪數二百九坪。

一、拙寺起立ハ、明曆元年乙未於本郷丸山借地ニ多建立、其後寛文七年丁未七月廿五日此地ニ移ル。是ハ御鷹師野邊七郎左衛門殿新見備中守殿々替屋鋪之足地ニシテ處、檀越久志本左京亮殿讓請られ、拙寺へ御寄進被成、則寺ヲ只今之處エ引移シ申シ。

瑞泉寺 開山淨譽是年示寂ス。

——文政寺社書上

淨土宗
増上寺末
淺草新鳥越町
頭榮山日晃院瑞泉寺

一、境内坪數千百三拾壹坪。○中

一、開山清蓮社淨譽上人知悅和尚々申、命終年號ハ寛文七未年三月九日御座シ。

一、越前家位牌所、本堂ヨ建續キ有之。

——文政寺社書上

淺草寺

淺草寺 境内一部ヲ車善七ニ貸ス。

金龍山淺草寺○中

一、 非人頭車善七方

園内通行道之儀、寛文七未年替地被仰付シ節、淺草寺領之内ニ多、往來道堀幅共横京間貳間、長サ七拾五間之場所相預ケシ。尤右善七代替之節々、預リ證文差出申シ。

——文政寺社書上

報恩寺

報恩寺 境内百廿四坪ヲ末寺教傳坊ニ貸地ス。

一、當地拾貳年。

淺草
本寺東本願寺
一向宗 報 恩 寺

一、寺内表三拾八間、裏へ七拾間。

淺草本願寺末
淺草
一向宗 報 恩 寺

右諸拜領地
境内貳千六百六拾坪。

右報恩寺境内之内 百貳拾四坪、寛文七年未二月より報恩寺末小塚原新火葬地教傳坊○後隨 借地いたし罷在シ處、寺社方帳面ニ其譯無之ニ付、報恩寺へ爰被相尋シ處、無相違付、寺社方帳面張紙仕シ由、堀田相模守亮○正 方より印形之斷手紙を以被申越シ。依之寛保二壬戌年十一月廿二日申上、御帳面張紙仕シ。

——御朱印拜領地寺社帳

市街充實時代

回向院 小塚原刑場ニ借地ス。

淨土宗 武州葛飾郡本所 增上寺末 國豊山無縁寺回向院略。中

一、小塚原ニ惣惣間口六拾間余、奥行三拾間餘、拜領持地。

右萬治年中渡邊大隅守様貞。綱村越長門守様勝。吉々々牢死并町々行倒等之屍

回向院境内ニ可埋旨仰付有之、然ルニ年々地狭ニ相成、難澁仕ニ付、寛文七

未年小塚原御仕置場持地ニ拜領仕、右死骸等埋來ニ、右地所ニ庵室一字造營、

番非人小屋相立居ニ。

則御仕置場續き地ニて御座ニ。今ニ牢死死罪之屍、町々行倒寄場御人足等之

死骸埋置申ニ、依て古來より年々十二月、兩町御奉行所ニ回向料として金

三兩宛、寄場御役所ニ金貳百疋、今ニ頂戴仕ニ。 — 文政寺社書上

靈光寺 本所中之郷ニ起立ス。

覺

一、 淨土宗 江戸増上寺末 本所中之郷 瑞松山榮隆院靈光寺

右靈光寺ハ、寛文七未年之起立ニ、靈光庵と申庵室ニ御座ニ。庵室之義ニ中

之郷村九兵衛々申者所持之御年貢地ニ、貳百二拾五坪之所、右靈光庵ニ致、寄附依之、永百七拾貳文宛之御年貢諸役共靈光庵ニ上納仕、當靈光寺迄凡ソ百六十貳年御年貢上納諸役共相勤來リニ。 — 文政寺社書上

春慶寺 淺草森田町ヨリ本所押上村ニ移ル。

押上村略。中 春慶寺 同宗同末○法華宗甲斐國 身延久遠寺末長養山下號ス。○中開山眞如院日理、元和

元年起立シ、同七年八月六日寂ス。當寺ハ淺草森田町ニアリテ、寛文七年コ、

ニ移セリ。 — 新編武藏風土記稿

市街地ニ若干ノ異動有リ。○文政町方書 上。府内備考。

市街地異動 寛文七年中ノ市街地異動ヲ擧グ。

四谷鹽町貳町目 文政町方書上ニ、

四谷鹽町貳町目略。中

一、拜領町屋鋪壹ヶ所

表田舎間五間。裏幅五間三尺貳寸。裏行拾六間餘。坪數八拾坪餘。

御膳奉行支配石之間番 金子半兵衛

右ニ、先年大御番渥美太郎右衛門様御屋敷之處、寛文七未年六月廿二日相對

市街充實時代

市街地異動 市街地異動 事蹟

四谷鹽町 貳町目

替被致、町屋鋪相成、其後元祿八亥年新地御奉行藤堂主馬様、興津内記様御改有之、酒井能登守様被仰付ニ、御傳馬役ト不相勤、公役銀割合之通壹ヶ年分銀六匁宛上納仕來り、町御奉行御支配請、拜領町屋敷ニ罷成ハ段、享保四亥年六月中、先代金子金太郎ト朽木周防守様ト書付差出ハ趣、其後代々金子半兵衛持來ハ旨、當拜領主ト申立ハ。○中略。

一、舊家

伊兵衛地借

五兵衛

右佐五兵衛先祖佐五兵衛儀ト、和州添下郡郡山領河本村出生ニ、寛文七未年三月中御當地ト罷出、同年六月中當所ト借地致、青物商賣相始ハ處、追々見世繁昌仕、男子出生仕、壯年之頃家名相續爲致ハ、ニ付、同人義ト隱居仕、寶永八卯年二月廿九日七拾二歳ニ相果、貳代目佐五兵衛義ト、享保十五戌年九月廿七日相果、同人實子ニ、三代目佐五兵衛儀ト、寶曆七丑年正月廿日相果、同人實子ニ、四代目佐五兵衛義ト、安永六酉年十一月廿一日相果、同人實子五代目佐五兵衛時代、明和年中武州多摩郡堀之内村日蓮宗妙法寺自火有ハ儀、節、同人義ト、代々同寺ト出入青物商内仕ハ者ニ、出火之砌、居合ハ處、最早祖師堂へ火移ハ得共、祖師影像未堂内ニ有之ニ付、驚キ早速持出し、依之影像

無恙、從夫以來、日増ニ同寺繁昌致ハ由、其後毎年十一月同寺ニおゐテ燒誇之餅ト唱へ祖師影像ト供シ、其跡佐五兵衛方ト貰受ハ義、今以年々恒例ニ有之。此節之佐五兵衛儀、享和二戌年五月廿八日六拾七歳ニ相果、同人娘ト養子致し、六代目相續、佐五兵衛ト改、惣領女子、其次男子金藏ト申、實體ニ有之處、廿六歳之砌、文政八酉年三月廿一日父佐五兵衛病死仕、悴金藏義佐五兵衛ト相改、七代目相續、先祖ト都ル七代、年數百六拾年來、當所ニ罷在、代々八百屋渡世仕、今以同様連綿相續仕ハ。且此トの宅ニ、先祖見世出之始ト、例年正月門松ト飾附ハ品、逆、長サ壹尺餘真鍮ニ、拵ハ注連六枚、并紙ニ張拔ハ長貳尺程之海老之形致ハ品、持傳へ罷在ハ處、寛政年中ト花美之品ニ付、年々飾ハ儀相止メ得共、今以所持罷在ハ。

但、此トの儀ト、代々浄土宗ニ、四谷南寺町長安寺且那ニ付、同寺ニ代々之墓有ハ之。

——文政町方書上

四谷鹽町三丁目 府内備考ニ、

鹽町三丁目 ○○四谷中略。

一、町屋鋪拜領人名前左之通、○中略。

市街充實時代

右に先年大御番渥美太郎右衛門様御屋鋪之處、寛文七未年六月廿二日相對替被致、町屋鋪相成其後元祿八亥年新地御奉行藤堂主馬様興津内記様御改有之、酒井能登守様被仰付に、御傳馬役之不相勤、公役銀割合之通壹ケ年分銀六匁宛上納仕來に、町御奉行御支配請、拜領町屋敷に罷成に段享保四亥年六月中、先代金子金次郎が朽木周防守様之書付差出に趣、其後代々金子半兵衛持來に。

〔附記〕 南傳馬町公役人馬統計

撰要永久錄ニ據レバ、南傳馬町出ス所ノ役人馬萬治元年ヨリ寛文七年ニ至ル十年ノ統計左ノ如シ。

十ケ年以來人馬高書上

拾ケ年以來相勤申人馬御役數覺。

戊年元〇萬治 人足三千四百貳拾壹人。馬六千五百拾七疋。
亥年二〇萬治 人足四千五百四拾五人。馬六千四百壹疋。
子年三〇萬治 人足四千四百五拾五人。馬七千七百五拾六疋。

丑年元〇寛文 人足四千六百八人。馬八千貳百六拾六疋。
寅年二〇寛文 人足四千五百七拾三人。馬七千八百拾疋。
卯年三〇寛文 人足七千四百五拾五人。馬壹萬貳百四拾五疋。
辰年四〇寛文 人足七千三百七拾人。馬七千七百八拾三疋。
巳年五〇寛文 人足八千四百四拾七人。馬九千四百貳拾貳疋。
午年六〇寛文 人足六千九百五拾五人。馬八千四百六拾疋。
未年七〇寛文 人足九千四拾壹人。馬壹萬四百六拾壹疋。
人足合六萬八百六拾人。馬合八萬三千百貳拾壹疋。 南傳馬町
右に年々御役相増に付、寛文八申年助成願致し、節書上し、萬治元戌年が寛文七未年迄之人馬高也。

閑地新造屋
舎査檢

八年戊申二〇寛文 正月十九日戊午正〇戊午 小姓組藤堂良直主

岡部久綱〇莊左衛門 書院番興津忠直〇内記 中野弘吉〇傳右衛門 二命ジテ江戸

廻ノ閑地新造屋舎ヲ査檢セシム。〇柳營日次記。嚴有院殿御實紀。

閑地新造屋
舎査檢事蹟

閑地新造屋舎査檢 前年江戸廻ノ閑地ニ屋舎ヲ新造スルノ申禁有リタルコ

市街充實時代

ト、既記ノ如シ。是ニ至テ查檢使ヲ發ス。
十九日○寛文八年正月。

御小姓組大久保山城守組 藤堂主馬○良直。
御書院番田中大隅守組 興津内記○忠直。
同大草主膳正組 岡部莊左衛門○久綱。
同戶田相摸守組 中野傳右衛門○吉弘。

右四人被召之、舊冬被仰出江戸廻り明地新規家を作り之儀相改之旨、老中被仰出之。

——柳營日記

十九日○寛文八年正月。小姓組藤堂主馬良直、岡部莊左衛門久綱、書院番興津内記忠直、中野傳右衛門弘吉に、去年令せられし府内閑地新造屋舎查檢すべしと仰付らる。
——嚴有院殿御實紀

江戸大火

二月朔日庚午○寛文八年(紀元二三二八年)○庚午(三正綜覽)。小濱○若狹國。城主酒井忠直○修理大夫。牛込下屋鋪○市内牛込區。火ヲ失シ、延燒麴町○市内麴町區。ヲ經テ芝海邊○市内芝區。ニ至リ、同時ニ御茶水元町○市内本郷區。ニ發シタル火、延テ神田○市内神田區。ヨリ、日本橋附近○市内日本橋區。ニ達シ、四谷鹽町○市内四谷區。ノ火ハ、青山宿○武藏國豊多摩郡。ニ及ブ。四日癸酉○寛文八年(紀元二三二八年)○癸酉(三正綜覽)。四谷伊賀町○市内四谷區。火有リ、芝三田○市内芝區。

江戸大火事

ニ延燒シ、麻生臺○市内麻生區。並ニ下谷車坂○市内下谷區。ニモ火起リ、前者ハ土器町○市内麻布區。ニ至リ、後者ハ本所○市内本所區。深川○市内深川區。ニ達ス。六日乙亥○寛文八年(紀元二三二八年)○乙亥(三正綜覽)。又火有リ、小日向築地○市内小石川區。ニ發シ、代官町○市内麴町區。ニ及ブ。○變災篇參照。

江戸大火 寛文八年二月ノ大火ハ、朔日四日六日ノ三回ヲ連續シ、燒失區域府内各所ニ及ブ。顛末變災篇ニ具録スレバ、此ニハ左ニ殿中日記ヲ抄シテ、其一斑ヲ知ラシム。

○寛文八年二月朔日早且ヨリ曇、辰後刻少雪、即刻止。甚西北風烈。

朔日庚午。未ノ刻、酒井修理大夫○忠直。下屋敷家來阿部傳太夫宅ヨリ出火、番町筋へ移リ、糺町一丁目ヨリ六丁目迄、松平越後守、平河天神長田町筋、井伊掃部頭屋敷、櫻田筋、虎之御門筋、愛宕山、同土器町筋、芝増上寺、同門前、保科肥後守、松平龜千代屋敷、海手切也。

同刻御茶水元町ヨリ出火、駿河臺、津輕越中守屋敷、大久保頼母、石河吉之助、近藤織部屋敷通リ、神田橋之キハ、鎌倉カシ通リ、佐竹前本町一丁目二丁目市街充實時代

通り、尼ヶ崎に消る。

同刻、四谷鹽町ヨリ出火、尾張中屋敷松平左京大夫屋鋪青山宿邊に消る。

○寛文八年二月
四日晴、風烈。

一、辰後刻、四谷伊賀町出火、火本久保五郎兵衛宅より、サメガ橋筋、青山宿赤坂邊、芝三田筋迄焼失。

一、麻生臺山内右近大夫宅より出火、土器町筋迄焼失。

一、未午刻、下谷御切手番柳下太兵衛宅より出火、風烈付、廣徳寺に火移り、新寺町筋、松平伊豫守屋敷、松平兵部大輔、松平新太郎、松平志摩守、松平下總守下屋敷筋、淺草取越筋、御數寄屋方坊主衆町、同御路次之者町、不殘焼失。猿屋町二町、松平備後守、佐竹修理大夫屋敷、酒井左衛門尉屋敷切、淺草西福寺へ火移り、淺草旅籠町壹丁目半程より、南へ御藏前森田町兩ヶ輪、淺草見付キハ、向ヶ輪土手裡、表同朋町中程カ川キハ迄、不殘。兩國橋へ火移り、焼落、無縁寺之寺中焼失、本堂ハ殘ル。本庄同朋中、北カハ一町半程焼失。茶屋宗古屋敷不殘焼失。藤堂大學頭、三浦志摩守屋敷、伊奈半十郎籠屋敷、川船奉行齋藤忠右衛門、勝屋右衛門組同心屋敷六人御數寄屋善甫深川獵師町迄焼失、消る。

○寛文八年二月
六日青天、風烈。

未ノ後刻、小日向築地小十人組之小頭青木市左衛門宅カ出火、風烈ニ付、風下

小石川邊不殘、榊原熊之介屋敷に移り、鷹匠町筋、飯田町筋、代官町へ移り、小笠

原山城守増山兵部少、松平豊前守、秋元攝津守、本理院殿屋敷御賄頭、長谷川藤

高平右衛門預り也、御ツキヤ焼失、酒井日向守屋敷切ニて消る。

大奥御主殿并菱矢倉に火之子參ニ付、大手下馬ニ相詰罷在、小笠原遠江守

奥平大膳本多内記、松平和泉守、松平美作守、水野民部、右之面々被仰付、家來城

中に被爲召、奥方御殿火消被仰付、其外百人組頭御持弓、御持筒御弓、御鐵砲

與力同心追々召連罷出、奥方火消被仰付之。

一、葉山并西ノ丸火消番ニ、青山大膳板倉隱岐守、安藤對馬守被仰付之。

一、在府之御譜代大名衆大手迄相詰、御下知を相待罷在也。

一、西ノ丸に不被爲成、御臺所カ西ノ丸に被爲成云々。

〔參考〕

寛文八申年の天災、火氣北の丸を覆ひて、天壽院殿をはじめ、御丸近き大厦

とも焼失しける。其餘、御守殿より移り、奥方去きりよくすぶりけり。是ハ當

御臺所の鼠をよくませたまひ、天井は萩を積入たるよ、火氣移りてあり。俄よ周章たりけるに、忠秋阿部人々を召具して馳付とせとも、天井よ上らんとするよ、奥方御寢殿の階子類一挺もふし。豊後守阿部下知して御すゑのくま椽を二三間ゆゑよ打放させ、是を打返し、天井に投懸させざる。御大工頭木原木工之丞一番よ上りけるよ、餘焰斜らうつ巻て、天井一面に眞闇よふりけしハ、目をふさきて早く上せと下を招きけるるとよ、御徒士の輩數十人詰掛、手桶とてもふし、御貝桶御鍋□□ふと、各其邊に有合御手箱ふとを以て水を捧げ、かつきつれて上りける。木工之允御大工共よ下知して、一方の破風を打破らせ煙をもらし、跡ハ水を以てまめしけるゆへ、御殿別事ふく、殊よ御臺所の御座の間といふを以て、此度の働きたる輩御褒美を賜はりけるよ、はしめ御徒中天井へ上りさまよ、面々頭の名自分假名を名乗りて上りけるハ、證據ありて祿たまはりける。名對面もせは狼狽して先を急き上りある輩ハ證據ふければ無益の奉公よふりけり。名を惜むといふ事、常に吟味すへき事そありし。

——後編武野燭談

松壽來談。日、六日寛文八年二月。城下火起時、藤堂大學頭高次。自染井別墅赴柳原

本宅、其身乘輿、騎馬者五十餘人、持長兵者、及步卒數千人、本郷湯島十餘町間、絡繹驚目。壽直見之、其日謁會津中將保科正之。語之。中將曰、藤堂常稱多病、登城少、然有拔群奉上之志、故每々有如此之事。久保談曰、加賀中將前田綱紀。奉命備本郷不虞之災、故日夜一騎、率步卒三十人、巡本郷邊、一騎過、則又一騎來、無些間斷、且令曰、若有火變、則風下之家可悉壞之、家主勿憂之、火靜後可新造而弁之、本郷之火起、則近城下、故云爾。寛文八年二月十日條。

——國史館日錄

被害 左ノ二三所傳有ルノミ、之ヲ詳ニセズ。

寛文八年二月朔日江戸回祿覺

侍屋敷 貳千四百七軒

寺 百三拾六軒

町屋敷 百三拾貳町半

百姓屋敷 百七拾軒

兩三日之火事燒屋布之。

侍衆二千六百軒餘

町屋敷百五十七町餘

市街充實時代

——御當家令條

御日記侍屋布大小合二千七百軒。

寺院大小合百三拾三ヶ寺。

町數百三十町

慶延略記

二月六日○寛文八年。此日御家中類火二十七人。去朔日ヨリ御家中類火ノ面々合テ四百四十二人。

人見私記

元延實錄ハ、六日ノ火災ヲ叙シテ去ル朔日より毎日之大火、可燒家もなく、火自然と燒留ル。又續たる火災は、江戸中の寺社大名小名御旗本の健士町人等至迄悉く困窮す。哀成けるありさま也。ト云ヘリ。而モ明曆ノ大火ニ鑑ムル所有リ、人畜ノ被害極メテ少ナカリシト見エ、玉滴隱見ニ左ノ如ク有リ。

地獄儉約ト云仇言葉哀

一、當春○寛文八年亦候ヤ娑婆大火哀ニ付多、專ト儉約ノ相守ルニ依テ、極樂世界并地獄等ニ至マデ、簡略致スベシ。ソノ子細ハ、先年ノ酉ノ年火難ニハ、娑婆ノ人間共、カ、ル大火ニ終ニアハザルユヘ、途ニマヨヒ多クハヤケジニ候エハ、地獄中豊春タリ。今般ノ火災ハ、人間手コリシテ利發ニ立マハリ、財寶ヲ兼テ穴クラ土藏ニトリヲサメ、其身々々ノ退バヲカヘ居タリシユヘハ、家財ヲタ

スクル而已ナラズ、一命マテ恙ナシ。少々ヤケ死シタルモノ有トイヘドモ、彼等ハ皆々娑婆ニ徘徊スル外道ノドロボウ、扱ハヨクフカキ命シラズ、亦ハ法令稠シキ奥方ノ女中等ノ類ナリ。依之地獄火損ノ以ノホカ詰リタルナリ。下略。

鬪爭者處罰 嚴有院殿御實紀ニ、

九日○寛文八年。持弓頭内藤甚之丞正吉細工頭矢部四郎兵衛定房各隊の同心、去六日火災の地にて争鬪し刃傷せしかば、ともに斬に處せらる。増山兵部少輔正彌が辻番人一人其家法に行ふべき旨命ぜらる。こは四郎兵衛定房が同心を面縛せし故とぞ。

防火行賞 左ノ如シ。

○寛文八年十二月 七日○青天、夜ニ入雨少降。

昨日火事ニ付、爲窺御機嫌御一門方諸大名衆登城、於御黒書院御目見畢、本多内記○政勝、小笠原遠江守○忠雄、奥平大膳○昌能、石川主殿頭○憲松、平主殿頭○房忠、戸田孫十郎○澄光、水野民部細川豊前守○隆興、松浦肥前守○信上、加藤出羽守○泰興、酒井修理○直忠、松平美作守○房定、土井大炊頭○重利、青山大膳亮○幸利、安藤對馬守○重博、板倉隱岐守○重常、町奉行○渡邊大隅守、○綱真、島田出雲、御歩行頭大森半七○好輝。

市街充實時代

川口源左衛門恒。宗富永孫左衛門勝。師中西圖書照。元右之面々度々火事ニ付、殊昨日御城近邊火事、一入辛勞仕ニ付、御目見也。

九日○寛文八年二月。

今度方々火事ニ付、定火消之拾人、辛勞仕ニ付、御褒美被下之。

秋山十右衛門俊。正水野半左衛門政。守永井十左衛門孟。直安藤内藏助廣。重

沼新五郎芳。清遠山半九郎次。伊山口平兵衛直。重花房外記昌。幸藤田權之

介行。定堀田五郎左衛門輝。一

右黄金廿枚、時服三羽織一充被下之。

○寛文八年二月十一日 青天。

去ル六日、御城中へ火移リ申、節情を出し申、ニ付、爲御褒美、白銀被下之。

銀十枚ツ、被下。

御步行衆

川口源左衛門組

東惣右衛門

西野又右衛門

同。

大森半之丞組

小野清左衛門

片見兵右衛門

同。

富永孫左衛門組

若林覺右衛門

大野助右衛門

中西圖書組鈴木三郎右衛門

岡本新五左衛門

金三枚。

大工頭

鈴木修理

同斷。

同

木原内匠

銀五枚充。

御被官大工

吉本加右衛門

内山清右衛門

金三兩充。

大工組頭貳人

銀三枚宛。

大工八人

銀拾枚。

御掃除頭

豊田半兵衛

○人見私記同。御徒方萬年記ニモ見ニ。

廿四日○寛文八年二月。白銀壹枚充、御掃除之者十三人。

是を去比火事之節、奥方へ火ノ子參所、情出し、ニ付被下之。

殿中日記

七日○寛文八年二月。○中略。町奉行目付、使番步行頭ならびに船手頭向井兵部正方は、御前に召て、昨日心いれ防火せしとて褒詞を蒙る。本多内記政勝、小笠原遠江守忠雄、松平主殿頭忠房、右川主殿頭憲之、奥平大膳亮昌能、淺野内匠頭長直、戸田孫十郎光澄、板倉隱岐守重常には、おなじ事を老臣もてつたへらる。酒井修理

市街充實時代

大夫忠直・土井大炊頭利重は、郭内を防ぎ留め、青山大膳亮幸利・安藤對馬守重博は、郭外を防ぎ留め、松浦肥前守鎮信・細川豊前守興隆・市橋下總守政信は、去りし四日寛文八年二月、兩國橋の火を消防せしとて、ともに老臣褒詞をつたふ。また松平讃岐守頼重・松平右京大夫頼常・松平下總守忠弘・大留守居松平美作守定房は、御前にて褒詞を加へらる。

九日寛文八年二月、留守居伊澤準人・正直信・北條右近大夫氏利・瀧川長門守利貞を御前にめして、六日防火の勞を褒せらる。同じ事も、火消役十人をも召て褒せられ、金廿枚時服三内一は紅裏羽織一づゝ給はる。

十一日寛文八年二月、この日、先日後閣に火及びし時、承塵を打破り、のぼりて消防せし歩行士十人に銀十枚づゝ褒賜せられ、御座所邊火焰飛來りし時撲滅せし大工頭二人に金三枚被官大工・掃除頭に銀十枚づゝ、手大工一人銀五枚、小頭二人金三兩づゝ、平大工八人銀三枚づゝ下さる。

—— 嚴有院殿御實紀

對災措置

防火 災變ニ對シ、臨時ニ防火警備ヲ左ノ如ク下命ス。

四日寛文八年二月、近日火災まばらければ、火災の時は、家士召具し、指揮を待て防火すべしと、各其地を分附せらる。大手下馬所は、奥平大膳亮昌能、本城北桔槔橋外は、本多内記政勝、櫻田は、松平主殿頭忠房と定め、各防具を携へ出べし、尤供奉の輩に混ざまじとなり。

五日寛文八年二月、小日向傳通院邊鷹匠町飯田町番町牛込田安門内一橋邊住居の番士、このほどは家において、火災あらば速に出あひ防ぎ留べき由番頭に傳へらる。

八日寛文八年二月、石川若狹守總良、居邸邊并に鼠穴邊火あらば消防すべしと命ぜらる。

九日寛文八年二月、使番柘植平右衛門正直・加藤平内・泰直・櫻井庄之助・勝正大久保甚左衛門長昌・佐々木又兵衛隆眞・岡野孫九郎・貞明、近日火災まげきにより、各所巡察せしめらる。

十一日寛文八年二月、火災まげきにより、各所巡視を命ぜらる。松平左近將監忠昭は、巢鴨より牛込市ヶ谷、小出信濃守莫知は、淺草谷中千駄木、諏訪因幡守忠晴は、四谷澁谷、木下右衛門大夫俊長は、麻布白銀品川邊たるべしとなり。中酒略。

井修理大夫忠直牛込別墅邊には萬石以上の邸宅なきをもて、忠直家士を出し、近火見廻らしむべしと仰下さる。

十七日○寛文八年此後郭内火災の時、西城の火の番勤むべきよし、板倉隱岐守重常内藤飛驒守忠政に仰付らる。

米穀廉賣 罹災市民ニ毎日米三俵ヲ廉賣ス。嚴有院殿御實紀ニ、

十一日○寛文八年こたび火にあひし府内市人、戸毎に米三俵づゝ、一石金一兩の價をもて拂ひ給はるべしと令せらる。

俸米前貸 罹災者ニ夏給俸米官料ノ三分一ヲ前貸ス。

九日○寛文八年こたびの災に逢ひし輩、夏給の廩米并に官料三分が一を今借給はるべしと令せらる。

日用品書上 左ノ令有リ。

覺 嚴有院殿御實紀

- 一、米
- 一、大豆
- 一、菜種
- 一、大麥

- 一、油
- 一、鯨
- 一、鹽
- 一、小麥

- 一、荏
- 一、小豆
- 一、薪
- 一、酒

- 一、炭
- 一、胡麻
- 一、魚油

右之品々、町中諸問屋并諸商人商賣物ニ買置、今迄自分ニ多藏又と借り藏ニ入置、分當二月廿八日相改、品々何程有之、有體ニ書上可申。改書上ハ内々買手有之ハ、何程ニ多賣拂、慥ニ其證據を取置、以來書上ハ都合、相違無之様ニ可仕。附、右之品々相改書上ハ以後、諸國ヨリ追々到來ハ分、其町々名主五人組相斷立合ハ、員數相改之、名主五人組ハ證文を取置、其荷物と別ニ仕置、員數重る書上可申。是又賣拂ハ義と勝手次第ニ、其證據を取置、以來書上之都合、相違無之様可仕事。

右之趣、町中家持と不及申、借屋、店借地借、諸問屋、諸商人ニ堅申渡、早々員數相改、書付差上可申、重るを藏々ヲ相改可被成、間、少々相違無之様書上可申。違背申もの於有之、急度可被仰付事。

見舞金并ニ復舊費貸賜 左ノ如シ。

三月三日○寛文八年今度類火之御傍衆へ黄金等被下之。

御守 内藤式部少次○正 御小姓番頭 石川美作守○乘

同斷 松平外記○忠

黃金貳拾枚充。

三枝對馬守德○守

岡部志摩守好○直

黃金十枚充。

神尾播磨守知○元

內藤上野介勝○正

金百兩。

土岐伊豫守股○賴

金百兩充。

河野了意以○良

金五十兩。

成瀬惣右衛門治○重

大久保市郎右衛門好○長

金五十兩。

坂本小左衛門治○重

松本傳左衛門正○利

金五十兩。

須田市兵衛輔○盛

右の屋敷住ニ付テ也。

○寛文八年三月十一日早且より細雨。今度類火之輩、高三百石以下之面々、拜借金可被仰付之

旨、諸番頭中へ被仰渡し。

廿九日年○寛文八今度類火ノ面々ハ拜借之次第被仰出之。

一、三百俵ヨリ三百九拾石迄金子五拾兩充。但親屋敷ニ居住之面々、金卅兩充。

一、貳百俵ハ貳百九十石迄金子卅兩充。但親屋敷ニ一所居住之面々、金廿兩充。

一、百俵ハ百九十石迄ハ金廿兩充。但親之屋敷一所居住之面々ハ拾五兩充。

一、與力之面々ハ金子貳拾兩充。

右之分拜借被仰付之。

一、御徒組頭七兩。組中ハ金子五兩充被下之。

一、諸同心其外之面々ハ金子三兩ツ、被下之。

一、六尺ニ金子二兩ツ、被下之。

右何れも類火之者計也。

一、設樂七左衛門竹村八郎兵衛・大原新左衛門平野三郎左衛門、右四人金子三枚宛被下之。

一、岩手平左衛門能瀬武左衛門・小泉茂左衛門・守屋權太夫守屋傳兵衛。

右六人金貳兩宛被下之。

一、金丸喜左衛門松田又兵衛志賀權右衛門・設樂小左衛門。

右四人金拾兩充被下之。

一、仁科勘左衛門大柴清右衛門。

右二人金一枚ツ、被下之。

右之面々常々精出し御役儀相勤申ニ付、爲御褒美被下之也。

去年御番入被仰付之御書院番御小性組番無足之面々、類火ニ逢申ハ、白銀貳拾枚充被下之。

但、小十人組新御番ニ銀十枚ツ、被下。是又類火之輩計也。
覺

一、富士見番、御天守御番、御寶藏番、廣敷添番、奥方目付、同火之御番、御手鷹匠、御臺所方、御賄方、御歩行目付、火之番、御貝太鼓之役、進物取次、二ノ丸火ノ番、二ノ丸添番頭、御掃除之者頭、此類類火之輩、百俵ヨリ三百俵迄ハ、百俵ハ百九十石迄ノ高同前也。

一、抱屋敷、地子屋敷、親類ノ屋敷借リ、自分ノ作事仕居住之面々ニ、自分屋敷可爲同前事。

一、親兄弟屋敷ノ内ニ、自分作事仕居住、或自分屋敷家半分類火、或ハ借家之輩拜借高、親屋敷一所ニ居住之面々と、可爲同前事。付自分屋敷ハ親類ニ借置、其所類火、自分ハ他所居住類火ニ、不逢輩ニ、拜借無之。
右之拜借、來酉年九〇寛文より十ヶ年ノ可爲上納事。

一、同心并伊賀衆并々、三兩充被下事。

一、坊主衆、三兩充被下事。

一、御仲間御小人黒鍬、御掃除之者并ハ、金子二兩ツ、被下事。

一、路次之者、金子二兩ツ、被下事。以上。

殿中日記

御納戸之同心類火之輩、金子四兩充被下之事。

十一日寛文八 今度類火ニ逢ハ者共、三百俵以下ノ者、拜借金被仰付旨、番頭

諸役人共エ上意ノ趣、老中并能登守利房、伊賀守永井申渡ス。

廿九日寛文八 今度類火ノ者共、三百九十石迄拜借金五十兩、但シ親ノ屋敷

ニ同居者共ハ三十兩也。二百石ヨリ二百九十石迄三十兩、親同居ハ二十兩、百

俵ヨリ百九十石迄二十兩、親同居ハ十五兩、自是以下モ拜借、但シ同心ナトハ

金三兩ツ、被下。中間小人黒鍬、掃除ノ者類二兩ツ、長病又ハ跡目幼少ノ者

迄モ同前。次ニ兩番無足ハ銀三十枚、大番二十枚、小十人十枚、次與力二十兩ツ

ツ拜借、徒ノ者馬責ニハ五兩ツ、被下。徒組頭ハ七兩被下。次ニ表坊主三兩ツ

ツ、同組頭ハ五兩ツ、數寄屋坊主同前被下。納戸同心、細工同心、凡テ四兩ツ、

被下。
——人見私記

三月三日^{○寛文八年}ニ、去比ノ類火ニアイタル面々へ、御内證ニテ御金ヲ下サル。

一、銀二十貫目ツ、内藤若狹守石川美作守松平内記以上三人に。

一、銀二十枚ツ、内藤上野介神尾播磨守土岐伊豫守以上三人に。

一、金廿枚ツ、三枝對馬守岡部志摩守に。

一、金百兩ツ、小納戸衆に。

一、金五十兩、須田市兵衛へ。

一、同百兩、川野宗喜に。

四月廿八日^{○寛文八年}ニ、今春ノ類火ノ面々四百石以下へ拜借金ヲ仰セ付ラル。所謂、

百石ヨリ百九十石マテ金廿兩。

二百石ヨリ二百九十石マテ金三十兩。

三百石ヨリ三百九十石マテ金五十兩。

右ハ御旗本中也。與力へハ金二十兩ツ、拜借也。且ツ右ノ金子^{○元十年}ニ返上致スヘキ由。

御歩行組頭ハ金七兩ツ、

同組中ハ金五兩ツ、

御廣間坊主衆并ニ諸同心ハ金三兩ツ、御小人御中間ハ金二兩ツ、

右之面々ハ返上ニ及ハス。

——萬天日録

一、同日^{○寛文八年四月廿八日}ニ、今春ノ類火ノ面々、四百石以下へ拜借金ヲ仰付ラル。

——天享吾妻鑑

三月廿九日^{○寛文八年}此度住宅燒失之御徒衆、金子五兩宛組頭七兩被^下い。

——御徒方萬年記

十一日^{○寛文八年二月}増山泉光尼宅災にかゝりしにて、銀二百枚給ふ。

十七日^{○寛文八年二月}知恩院門跡尊光法親王學文所災にあひしかば、合力米三百俵を價金百廿兩にかへて遣はさる。

三日^{○寛文八年三月}傳役内藤式部少輔正次銀二百貫目、小姓組番頭奥勤石川美

作守乗政松平内記忠益小姓三枝對馬守守清岡部志摩守直好に金廿枚づ、

神尾播磨守元知土岐伊豫守頼殷内藤巳之助某に金十枚づ、小納戸成瀬惣

右衛門重治坂本小右衛門重治松平傳左衛門利正大久保市郎右衛門長好奥

醫河野良以通宗に金百兩づ、小納戸須田市兵衛盛輔に金五十兩たまふ。皆

先の災にかゝりしゆへなり。

廿九日○寛文八年三月○中略。災にかゝりたる輩に、貸賜の制を令せらる。三百九十石より三百石までは金五十兩、但父のもとに同居せる蔭子は三十兩、貳百九十石より二百石までは三十兩、父子同居せば蔭子は二十兩、百九十石より百石までは二十兩、但父と同居せば十五兩、富士見、天守寶藏番、廣敷添番、奥方目付火の番手、鷹師、庖人、賄方奉行目付表火の番、貝役、太鼓役、進物取次、二丸火の番、二丸添番頭、掃除頭等は百俵より三百俵までは前制におなじ、九十俵より六十俵までは金十兩、五十俵以下は七兩、私に持たる宅地、地子地、あるは親戚の賜地をかり、みづから營作して住めるは、をのが宅地におなじ、父兄弟の宅地にみづから營作し、あるはをのが宅地の家人連焼し、あるは借宅の輩は、父同居の制におなじ、宅地を親戚にかし災にかゝり、其身はこと處に住てまぬかれしは恩貸あるべからず、貸金返納は明年より十年をかぎるべし、同心の類は、各金三兩、中間小人、黒鍬、掃除のもの、露地のもの、小間遣には各金二兩賜はり、病臥幼稚の者もこれに同じかるべし、またいまだ祿賜はらざる兩番は銀三十枚、大番二十枚、小十人組は十枚を賜はるべし、諸隊の與力は各金二十兩を

かし給はり、歩行組頭は七兩づゝ、歩行士調馬のものは五兩づゝ、表坊主組頭にもおなじ、表坊主には三兩、數寄屋方も同じ、納戸細工所の同心には各四兩を下さるべし、月俸のみ給はるものは、一人扶持を五俵づゝにあて、貸給はるべしとなり。

——嚴有院殿御實紀

參觀緩期 罹災諸侯、參觀ノ期ヲ緩ウシ、四月ノ參觀ヲ七月トシ、在府者ノ就封ヲ許ス。

○寛文八年二月九日 青天。

四月參觀之大名衆類火之面々を、七月可致延引旨、仰出之。

——殿中日記

十日○寛文八年二月。松平丹後守光茂初め就封の暇給ふもの五人、丹後守光茂は、邸宅災に逢し故なり。

——嚴有院殿御實紀

番士賜暇 三月ヨリ明年二月マデ番士ニ交番休暇ヲ賜フ。

○寛文八年三月十五日 青天。

大御番御書院番御小性組之御番衆、自今以後、一組之内ニある三分一充御番御免、其上面々知行所又を在江戸ニ成とも勝手次第ニ罷在、下人をも一人成共、

召仕ハ共、如何様ニ勝手相續シ之様ニ可仕之旨、可申渡シ之由、彼番頭中ニ被仰渡シ也。

— 殿中日記

二月廿日〇寛文八年 大番頭兩番頭共被召出、各一組ノ人数ノ内、三分一ツ、當三月朔日ヨリ來年二月晦日迄、可致休息旨、被仰出。忠清井。酒忠秋部。阿及老中共列座、美濃守〇稻葉正則 申渡シ、能登守〇土井利房。モ出席ス。

— 人見私記

二月十五日〇寛文八年 御小性組、御書院番組、大御番組、向後ハ三分一御番御免ハ間、面々ノ知行へ成共、在江戸ニ成共、僕ヲ減少致シ、進退ツ、キ申様ニ仕ルヘキ旨、御老中列座ニテ仰渡シ。

— 萬天日録

〔參考〕 憲教類典ニ、

寛文八戊申年二月廿日

一、上意之趣、〇儉約之儀跡々々被仰出ハ通、彌堅相守可申ハ。今度、火事付、下々まで困窮致ハ由、被聞召ハ間、面々屋作萬事輕仕、儉約用可申ハ。番頭ともハ、組々ニ此旨可申渡シ之由、御意ハ。

一、御老中被仰渡ハハ、御番衆一組之内三分一、壹年休ませ可申由、上意之旨ニ被仰聞ハ。御直ニ被仰出ハ上ハ、諸事急度儉約を用、衣服之儀、出家門跡衆

御禮之刻、又ハ五節句〇各別、常ハ御禮日ニあも、縮紬の小袖木綿袴ニあも、不苦ハ。寢道具以下、葛籠ニあ無之ハ共、如何様ニもいと持セ可申ハ。一年休之内ハ、縦小物一人召仕ハ様ニ成とも不苦ハ以上。

申〇寛文八年。二月廿日

御番衆〇申渡覺

一、御番衆一組三分一、三月朔日〇より一年爲休可申事。

一、休之内ハ、番頭組頭〇付届無用之事、若自然之用所之時〇、可爲格別事。

一、御番休被申内〇、大火事出来ハとも、番頭宅へ入夜付置被申事、可爲無用事。

一、自今以後、作事被致ハ節、番頭組頭〇様子可被申聞ハ事。

一、當年休ハ類火ニ逢ハ衆之内、差替申度と申入ハハ、其子細承届可叶事。

一、諸事儉約を可相守上〇、番頭組頭仲ケ間之儀も目ニ懸ハ作事もハハ、

互ニ無遠慮、通合、儉約を用可申事、是等之趣申合ハ間、御番衆仲間ニあも、目

ニ懸ハ儀ハ、互ニ通合、被相守ハ様ニ、可申渡ハ事。

一、休之内湯治御暇之儀被申者、同村常之ごとく、但斷之様子〇より五廻も

六廻も、又ハ再篇も遣可申事。

申^〇寛文八年。二月廿日

知行所^レ來^ルニ相極^ル時之覺

一、休之内知行所より江戸に被參^ルニ、早速案内組頭方へ可被申^ル。又知行所^レ歸^リ被申^刻ニ、案内可被申事。

一、知行所^レハ逗留の内見積^リ、知行之爲ニ罷成^ルニ普請等被申^付ニ、外之百姓むきと不召仕、いとまさる様ニ用捨可有之事。

一、休之内知行所ニ在^之、其所より湯治被致^度仁、番頭組頭^レ斷被申^越、差圖次第可被仕、但常々之ことく五廻も六廻も、又ハ再篇も遣可申事。

番頭自分之覺

一、無足衆ハ、類火ニ逢^ル共、休被申^間敷事。

一、自分知行、親兄弟之知行、妻所引越^度と被申^ルとも遣し申^間敷事。

一、當年休被申^御番衆^ニ、類火逢被申^衆三分一より多^ルとも、翌年^レ鬮取ニあ^りくりこし遣し可申事。乍去一兩人多分ハ、當年休之内へ入、類火逢當年休之人數三分一より少^ニニ、休内^ニ鬮取ニ仕とく可申事。

一、申之年^〇寛文八年。休之刻先條之趣ハ用可申事。

一、酉之年^〇寛文九年。ハ申之年之殘ニ、知行取御切米取鬮取ニある一所ニ分、其内ニある^〇寛文十年。之休鬮取ニて可相極事。

一、無足衆ハ、酉之暮御切米被^下分^セ、戌之年休セ可申事。知行取御切米取打込、三分一人數多^ル共、二三人分^ニ休^ニ方へ付可申事。

寛文八年二月廿日

^{朱書}右^ニ被^レ仰^出之御書付^ニ不^レ被^レ存^ル間、取調之上、可^ニ相認^ル。

寛文八年二月廿一日

一、御番衆、休之内知行所^レ被參^ル儀、土井能登守殿房^〇利御伺^ル處ニ、知行所^レ被參^度子細承届^ケ、番頭組頭了簡次第可遣^ル。日數之義ハ、其様子次第差置尤^ニ。親兄弟之知行所^レも、右之旨^ヲ以て遣し^ル様ニ可仕之旨、被仰^ル間、知行順之時之覺書之通り、御番衆^ニ被仰^渡可然^ル。以上。

寛文八年二月廿一日

^{朱書}右^ニ被^レ仰^出之御書付^ニ不^レ被^レ存^ル間、取調之上、可^ニ相除^ル。

儉約令 二月來幾回カ出ツ。

市街充實時代

朔日 三月〇寛文八年
三月〇中略。

覺

一、今度火事ニ付、彌堅儉約相守の様ニ被仰出間、參勤繼目等之祝儀ニ、公儀ニ被献之外、下々ハ、太刀馬代黄金壹枚、白銀五枚三枚二枚一枚、鳥目百疋迄之内、相應ニ可被遣之可然事。

一、國持大名衆之惣領よりといふ共、部屋住之内ハ、公儀之外、音物之儀不入儀事。

一、端午重陽歳暮御祝儀之節、公儀ニ被献之外、下々ハ、時服被遣義無用之事。

一、諸國ニ酒造之儀、當年々去年迄之半分造の様ニ御定之上ハ、公儀之外、樽看取カハシ、樽代鳥目百疋より千疋之内、相應ニ被遣可然事。但其所之名酒ハ、かろき手樽杯ニ被遣可然事。

一、嫁聚之節ハ、小袖代柳樽取カハシ可然事。

一、在所より爲伺御機嫌書札并奉書之御請等は、依其品々、飛脚ニ差越可然事。

一、於江戸用所有之間、被差越ハ使者ハ各別書狀口上書等ハ、歩行若黨持參致

可然事。

以上。二月〇寛文八年
〇中略。

右之御法度書於殿中諸大名留守居招之、高木伊勢守〇守北條安房守〇正黒川丹波守〇直出座被傳之。右三人大目付〇正傳之。

七日 三月〇寛文八年
〇中略。

北條安房守口上覺

一、今度火事ニ付、彌堅儉約ヲ守、下々困窮不仕の様ニ、可被仰付。

一、御旗本殊之外ツカレハ故、不斷御番所相勤ハ、絹紬木綿襦〇正ニ有、儉約守相勤可申旨、被仰出。御直參衆中さへ、絹紬木綿襦着の様ニ被仰出。上ハ、諸大名家來儀、夫々衣服輕被申付。可然存。綸子紗綾縮緬等、其外結構衣類、遠慮可致。其節ニ應シ、輕衣類可仕被仰出無御座。故、夫々衣類差圖難申出。兎角御直參さへ、絹紬木綿襦着し被申儀。間、是ヲモトニ仕、末々之者ハ、次第ニ輕様ニ可然存。又家中之者とも、一城も持申仁有之。故、又家中一統、彌何色々輕衣類難申。

一、熨斗目ハ、名代之使者、或ハ御城御祝儀之時ハ、可然。兎角至時了簡致度々

市街充實時代

聞合、着可然事。

- 一、上下之裏熨斗目付申事、元來用來之間、是ハ不苦い様ニ存い。
- 一、平かめや羽二重之小袖羽織持來いハ、着可申い。是ハ絹紬之様ニ見え申
衆有之い。新規之仕立いハ、絹紬可然存い。是ハ差圖ニある無之い。
- 一、於江戸書狀口上ニハ歩行使者可然い。被仰出ハ物毎ケ様ニ輕ク被仰出い
上ハ、月次出仕相延いハ、御觸被成間敷、左様ニ御心得可有之い。
- 一、主人方をい共、紗綾縮緬綸子其外結構成衣服、不入事い。供廻リ之面々、
結構ニ見えい。不遠慮様可然之様被仰出い。
- 一、御老中々、一兩日以前々家中絹紬木綿等着之申様被仰付い。何度輕様ニ可
然存い事。
- 一、毛織類、堅無用可爲事。

十四日 三月〇寛文八年
三月〇中略。

覺此御書付十五日ニ出。

一、町人縱雖爲御扶持之者、刀帶之江戸中徘徊、彌堅可爲無用。但免許之輩ハ制
外之事。

一、町人之屋作并衣類諸事、相守儉約、成程輕可仕之事。
一、何方より蒔繪道具雖誂之、惣梨子地惣金之粉々ミ惣切金之道具、向後一切
不可仕事。

右之通、町中急度被相觸之、自今以後、違背之族在之ニおゐてハ、可被處嚴科者
也。

申〇寛文 三月廿五日〇十五
八年。 日賦。

廿日〇寛文八
年三月。

御書付出ル。

覺

- 一、組中振舞、又ハ相役人等寄合之節ハ、二汁五菜と御定ニハ有之い。得共、向後
ハ、二汁三菜二ノ汁ナシ、吸い物の肴一色、菓子一色可然事。
- 一、寄合之節、一汁二茶杯ニ、香物一色、菓子一色可然事。
- 一、惣御番衆辨當、一汁二菜可然事。右ハ御番頭御役人ハ被仰出い。以上。
- 一、三月日〇寛文
八年。

覺

一、御徒衆儉約可相守之。番頭中、若年寄衆、口上ニ被仰渡事。
 一、御番之節、絹紬之小袖、木綿襦、ニ相勤可申。但、持來ハ者ハ、當分紗綾縮緬、綸子ニも可着。自今以後、絹紬之外、拵申儀無用ニ可仕。羽二重ハ不苦。附、紋ヲ定付ハ不入事。
 一、召仕小者、貳人下女、壹人、此外可爲無用事。
 一、振舞仕間敷侍輩ハ、參ハ節、茶之外、一切出申間敷。但、嫁聚之節、又ハ無據義ニ付、振舞出申、あゝて、組頭迄可相斷。一汁二菜酒、三色肴、一種之外、可爲無用事。

一、熨斗目小袖、持合ハ正月計致着不苦。御能御宮御佛殿御供等之節、熨斗目無用。尤、向後拵之儀、可爲無用事。

一、御禮日、裏付上下ニも不苦。但、御能日五節句、公家衆御對顔之節ハ、麻上下ニも可相勤事。以上。三月〇寛文八年。

柳營日次記

三月朔日〇寛文八年。諸大名共留守居等殿中、呼出シ、儉約ノ書付兩通、大目付渡之。所謂今度火事ニ付、彌堅ク儉約相守ベシト、被仰出間、參勤繼等ノ祝儀ニ公儀

儀ニ献上ノ外、下々エハ、太刀馬代金一枚、銀五枚、或ハ三枚二枚一枚、或ハ鳥目百疋マテノ内、相應ニ可遣事。國持大名等ノ總領タリトモ、部屋住ノ内ハ、公儀ノ外、音信物不入儀ニ事。

端午重陽歳暮ノ御祝儀、公儀ニ献上ノ外、下々エハ、時服無用ノ事。第三代ハ、時服アリ。當御代止乎。諸國酒造去年造ノ半分造、様御定ノ上ハ、公儀ノ外、樽肴取カハシハ、樽代鳥目百疋ヨリ千疋邊ノ内、相應ニ可遣。音信ト申答マシキナリ。世ノ中、百石取モ同様ニ出シ、四五萬石ハ別テ少分ニ出ス。古。賤シク成時ハ、二百疋出ス所エ來ハ、千石ニテ、二百疋出セハ、百石マテ、金五兩出ス也。但シ、其名酒ハ、輕キ手樽杯ニテ可遣事。嫁娶ノ節ハ、小袖代柳樽取カハシ可然事。在所ヨリノ伺候札并奉書御法等、依其品、飛脚ニテ可差越事。

十三日〇寛文八年三月。御坐間エ寺社奉行町奉行、勘定奉行頭字、勘定エ奉、被召出、儉約ノ儀、支配方エ堅ク可申渡旨、御直ニ被仰含。人見私記

三月九日〇寛文八年。柳生殿參上、如例此度公儀ヨリ被仰出、以覺、屋作儀輕ク可仕事。衣類、絹紬ノ小袖、木綿上下可着之、但シ、木綿タリトモ、日本織ノ外無用、只今マデ所持ノ衣類ハ不苦。自今卷物類ノ衣服仕立申マシキ事、公家門跡來駕ノ時、年始、五節句、能改リ、御振舞、嘉祥玄猪、紅葉山御參詣、上野増上寺御參詣、規

式ノ時分ノ御使、右ノ節ハ格別、常々ノ御供又ハ御使等ノ節ハ、御定ノ時服、裏付上下ニテモ可相勤レ。寐道具、絹紬木綿可用事、毛織ノ合羽羽織仕立マシキ事、足輕以下ノ面々、被下レ羽織ハ格別、布木綿ノ外不可着事、附リ御ヤシキハ勿論、何方エ罷出レトモ、定ノ外ノ衣類堅ク着用申マシクハ事、御家中ノ輩召仕供廻リ、絹紬木綿ノ外、衣類不可着事、振舞停止ノ事、附、親類縁者年始ノ振舞二汁三菜タルベシ、但シ、二ノ膳ハ不出、吸物一種、取肴一色、菓子一色、嫁娶ノ祝儀振舞ハ二汁三菜ノ事、附、木具盃臺停止之、吸物一種、取肴一色、菓子一色ノ事。右ノ外被仰出覺、長押作リノ事、杉戸ノ事、附書院ノ事、何方ニテモ櫛形ノ類彫物組物ノ事、但、スカシ結構成木ニテヌクイ板ノ事、床ブチ其外サンカマチ等塗物事、附リ、唐紙ハリツケノ事、ケヤキ門ノ事、右ノ外無用ノ事、大井能登守利房トノ被仰渡レ。

三月廿七日○寛文八年伊澤隼人正○政トノ北條右近大夫利○氏トノ瀧川長門守貞○利トノ參上、新溜ニテ御逢、先日被仰出レ御條目ノ通、御儉約ヲ御用ヒレ様ニトノ義、直々被仰演之。御老中ヨリ御内證ノ由也。

人見私記附録

大目付之面々申渡覺

一、今度火事以後、御直參之歷々ハ、絹紬平島之小袖、并木綿裏付之肩衣袴とも不苦ハ、間勝手次第可着之旨、被仰出レ間、勿論至諸家中ニ可應之事。
 一、綸子ハ、跡々より御法度ハ、自今以後ハ、紗綾縹紗又ハ毛織之褐雨、不可着用之。羽二重も御法度雖可被仰出之、當分可及難儀ハ、間持來輩ハ可着之。以後可爲無用之哀。
 一、例月之御禮相延申節、跡々ハ老中雖被相觸之、向後ニ從面々可被承合之事。以上。

申○寛文八年三月日

慶祿記

覺

御目付衆被申聞レハ、今度火事付、儉約之儀堅被仰出、御旗本中も衣服等絹紬ニも不苦之旨御諒レ。依之御老中方ニも御遠慮を以て、家來中向後紗綾縮緬毛織之類着用之儀停止ニ、せぬトへ平島着ぬるし次第、重ハ絹紬之外無用之由、御申付レ也。御座ハ面々召仕之者を其通ニ申付之、万事無遠慮、輕仕可然由、被申レ間、何も下々を致其心得、右之衣類所持之ものハ、當分目ニ不立

市街充實時代

六四三

様着仕、以後拵儀無用尤事。以上。

申〇寛文八年三月三日

同年〇寛文八年三月

御當家令條

覺

一、御徒衆儉約可相守之、番頭中若年寄衆々口上ニ被仰渡事。

右番頭文字不審、但小十人番頭トモ云準、御徒頭の其向ニある番頭ト書タルニヤ。

一、御番之節、絹紬之小袖木綿袴トて相勤可申。但、持來ル者ト、當分紗綾縮緬綸子ニあるも可着、自今以後絹紬之外拵申儀無用ニ可仕。羽二重ト不苦。附定紋附ト不入夏。

一、召仕小者二人、下女一人、此外可爲無用事。

一、振舞仕間敷。傍輩共參ル節、茶之外一切出申間敷。但、嫁娶之節、又ニ無據儀ト付振舞出申トあるト組頭迄可相斷。一汁二菜酒三献一肴一種之外、可爲無用事。

一、熨斗目小袖持合ト、正月計致着不苦。御能御宮御佛殿御供等之節ト、熨斗目無用。尤向後拵儀、可爲無用事。

一、御禮日裏付上下ニあるト不苦。但、御能日五節句公家衆御對顔之節ト、麻上下ニあるト淺可相勤事。以上。三月日〇寛文八年

右ニ御徒衆ト被仰渡ル由也。

御徒方萬年記

覺

一、町人家作致輕少、なニ考し杉戸付書院、くしかトなりトの組物無用、床縁棧かまチ塗ル事、并ニ紙張付、停止之事。

附、遊山船金銀之紋、座敷之内繪書申間敷事。

一、嫁娶之刻、万事成程輕可仕事。

附、刀脇差出しル淺無用之事。

一、町人衣類上下、隨其分限、儉約を相守可着之。毛織之羽織合羽、彌無用之事。

附、召仕之者、其外輕職人、尙以龜相成衣類可着之事。

一、町人振舞、成程輕くトるト。縱雖爲有徳、二汁五菜不過之。但、家督又ハ嫁娶之時ト、伺名主可受差圖事。

一、金銀之唐紙ト、ま弓ト、こト板ト、むトふトの道具、五月之甲、金銀之押箔、一圓ニ無用之事。

一、祭禮之渡物、不可結構、輕く可仕事。

一、葬禮佛事、有德之輩よりといふ共、目ニ不立様ニ成程、輕ク可仕事。

右之通、江戸町中ニ觸聞、堅相守の様ニ、證文可取置者也。申^{〇寛文八年}三月。

右者、三月廿日^{〇寛文八年}御觸町中連判。

覺

一、新吉原家作嫁娶振舞惣之義、江戸町中之法式承合、隨其分限、成程輕ク可仕事。

一、新吉原之者、衣類絹紬木綿可着之事。

附、遊女之衣類、何地ニあるも可爲紺屋染事。

一、新吉原に駕籠ニ通ル者有之ハ、其斷仕、よせ付申間敷也。但、無理ニ參ル者於有之ハ、奉行所ニ急度可申上事。

附、手負有之ハ、無隱置可申上事。

申^{〇寛文八年}三月日。

一、塚町木挽町見勢物、不可結構之。并惣役者衣類、絹紬木綿可着之。但、舞臺衣裝ハ、平島羽二重絹紬可爲紺屋染物。紫裏紅うら紫頭巾、總ハ類停止之事。

附、舞臺ニ縮緬木綿之幕不苦。但、紫縮緬ハ無用之事。

一、塚町木挽町野郎舞臺之狂言仕廻、奉公人々出會をるらば、尤雖爲百姓町人、猥參會長座いとさせ間敷事。

附、棧鋪ニ幕簾、彌懸ケ間敷事。

申^{〇寛文八年}三月日。

右之通、面々に御觸有之。

建築制 左ノ如ク定ム。

朔日^{〇寛文八年}三月^{〇中略}。

覺

一、長屋堀下石垣之儀、雖爲大身、向後を野ツラ石垣ニ可被致之。但、有來分ハ、其儘差置之、重る築直シハ時、連々ニ野ツラ石垣ニ可被致事。

一、長屋堀腰板之儀、跡々ハ結構ニハ、向後ハ雖爲大身、何木ニあるも勝手次第輕可被致事。

一、一万石以下之面々ハ、縱雖爲番頭座敷ハ二間半梁ニ不可過。但、臺所ハ三間梁不苦也。有來之家を作置ハ時ハ、右之間敷を可用事。以上^{〇享保集}殿中日記同。

市街充實時代

六四七

—— 撰要永久錄

二月〇寛文八年。

右之御法度書於殿中、諸大名留守居招之、高木伊勢守勝、北條安房守房、川丹波守直、出座被傳之。右三人大目付正、傳之。

〇寛文八年三月七日快晴。

柳營日次記殿中日記同。

覺

一、なけし作之事。

一、杉戸之事。

付書院、并何方よもくしるとの類ほり物くミ物之事。

一、結構なる木よてぬくひ板之事。

一、床ふち其外さんかまち等ぬりものノ事。

附唐紙張付之事。

一、けやき門之事。

右之分無用とるへし。但、三千石已下之面々向後無用とるへき也。

殿中日記御當家令條同。

寛文八年三月。

覺 但、番頭より惣御番衆ニ申渡ス。

一、ふけし作之事。

一、杉戸之事。

一、附書院之事。并何方ニもくしるとの類ホり物くミ物之事。

一、結構成木ニてぬくひ板之事。

一、床ふち其外さんカまチ等ぬり物之事。

附、うら紙のセり付。

一、けやき門之事。

右之通家作、今度類火ニあひひものハ無用とるへし。有來家ハ其儘差置、重ル作直シ節ハ、此ケ條之趣守シ様ニ被申渡之。三月

十四日〇寛文八年三月〇中略。 享保集成

覺

一、梁行京間三間一限。但、桁行ハ心次第。

一、佛壇ツノヤ、京間三間四方可限。

一、小棟作タルヘシ。

市街充實時代

一、ヒラ木作リヨリ上ノ結構、無用可爲。右堂舎客殿方丈庫裏其外何ニあるも此定より梁間廣作ヘカラス。若廣ク可作子細有之ハ、寺社奉行所ヘ相伺、可得差圖ハ。以上。

申〇寛文八年三月廿五日

覺

柳營日次記

一、町人家作致輕少、なぞし杉戸付書院くしかと入りもの組物無用、床縁棧かまぢ塗ハ事、并から紙張付停止之事。〇中

右之通江戸町中ニ觸聞、堅相守ハ様ニ證文可取置者也。

申〇寛文八年三月

右者三月廿日〇寛文八年御觸。町中連判。

撰要永久錄

二月〇寛文八年。この日、災に逢ひし輩、燒跡に板圍なすべからず、竹垣葦垣をも圍べしと令せらる。

この月二月〇寛文八年。また令せらるハ、長屋堀下の石垣は、大家たりとも、この後は、野づら石もてつくるべし、但もとより築しは、猶舊により改築の時漸々野づらをもちゆべし、長屋堀こし板美麗なれば、このハちは大家もその材をえらばず、心のまゝにかるくつくるべし、萬石以下はたとへ番頭たりとも聽

事二間半梁に過べからず、庖所は三間梁にても苦しからず、此後改構せばこの間數を用べしとなり。

七日〇寛文八年令せらるハ、長押つくり杉戸ならびに附書院かつ櫛形等刻物組物、美材の拭板床ぶち、其他さん櫃の漆塗、唐紙張付、規門、是等みな停禁せらるれば、こたび火災にかゝりしもの、屋舎つくるともとゞむべし、災を免れし家は、其まゝにして、かさねて、更に造營せば、此制を守るべしとなり。

廿日〇寛文八年。市人屋舎は、狭少に輕く營作し、長押杉戸、附書院、櫛形彫物組物、漆塗の床ぶち、さん櫃、唐紙張付等、停禁すべし、遊船に金銀の紋をつけ、戸障子丹青を加ふべからず。〇下

廿五日〇寛文八年。此日佛刹營造の制を令せらるハ、梁桁は京間三間を限るべし、但、桁ゆきは心のまゝたるべし、佛壇角屋は京間三間四方を限り、四方の鋸庇京間一間半を限り、小棟づくりにし、臂木作りを越えし美麗あるべからず、堂舎客殿方丈庖厨其他各所、この制をこえ、梁間をひろくつくるべからず、もしひろくつくるべきゆへあらば、奉行所に伺ひ、指揮に任すべしとなり。

嚴有院殿御實紀

麻布三田舟入堀中止 二月朔日ノ大火ニ依リ、三日起工式ヲ中止シ、四日ノ大火ニ依リ、六日一旦工事ヲ延期ス。顛末別項記ス所ノ如シ。

邸宅移置 代官町其他罹災地ノ邸宅移徙有リ。下文各項ニ分叙ス。

〔參考〕 元延審録ニ、

上野花盛大久保出羽守依仰一覽之事。

同年^{八〇寛文}三月六日、上野の花盛ふり。將軍家綱公上意ニ云、例年ハ花見東叡山み群集して繁昌也、當年ハ二月朔日ハ六日迄打續とる大火みて、不焼處少し、定る上野ニ無人、花も色を失ひ、寺中寂莫たるべしと被思召也と、大久保出羽守を召て、上野へ參り、花見の者共有哉否哉を見て可罷歸、徒者不召連穩便ふして可參旨、被仰付。出羽守則參向ス。白小袖を脱、袴をり着し、編笠を着て馬ふ乗、籠をも不爲持、徒僕ハ五六輩を召連て、二天門の外ニある馬より下り、侍一人、草履取一人、挾箱持一人、主從四人ふて此方彼方を巡見るみ、花見の貴賤男女群集して、内幕外幕を打ふらへて酒宴し、諷ひ舞もの有、或は幕ふき者ハ席を設け、琴三絃よて諷ひさゝめさし所もあり、己うさまゝに戯れ興を催せ、出羽守則歸參して委細ニ申上る。將軍家御機嫌不

町附記

〔附記〕

町觸 覺

一、町中海道を不り諸道具を埋置申ニ付、道せそく、往行之さゞに罷成の間、自今以後、海道に諸道具埋置申間敷也。今程埋置所ハ、早々不り出し、海道能作可申事。

一、燒金物古かき道具、此方々左右無之内、一圓商賣仕間敷事。

右貳ヶ條之趣、被仰付の間、町中家持を不及申、借屋店借下々迄、相守可申也。尤燒かき物商賣仕間鋪也。若相背をの於有之ハ、急度可被仰付の間、左様ニ相心得、町中不殘可被相觸也。少々油斷有間敷也。以上。

二月七日^{八〇寛文}

町年寄三人

寛文八申年二月

一、町中海道をほり諸道具を埋置申ニ付、道せどく、往行之さまり罷成の間、自今以後海道ニ諸道具埋置敷い。今ほと埋置いハ、早々不り出し、海道を能作りふをし可申し。若相背いハ、急度可被仰付い間、少も油斷有間敷い以上。

二月〇寛文八年

享保集成

板倉氏等屋鋪替

十八日丁亥

寛文八年(紀元二三二八年)二月〇丁亥、三正綜覽。

側役板倉重直

後守

西丸下

市内區前

側役内藤忠由

出雲守

元屋鋪ヲ賜フ

十九日戊子

寛文八年(紀元二三二八年)二月〇戊子、三正綜覽。

亦屋鋪替有リ

柳營日次記

板倉氏等屋鋪替

柳營日次記ニ左ノ如ク見ユ。

板倉氏等屋鋪替事蹟
板倉重直

十八日〇寛文八年
二月〇中略。

一、内藤出雲守由忠西丸下上ケ屋敷板倉筑後守直重拜領。

十九日〇寛文八年
二月〇中略。

一、代官町松平豊前守義勝屋敷被召上之爲替飯田町水野信濃守知元上ケ屋

松平藤義

附記一
岡山池田氏屋鋪

敷被下之旨、息備中守則勝被仰渡之。

〔附記一〕 岡山池田氏屋鋪

麻生邸 寛文八年二月岡山藩池田光政麻布善福寺屋鋪を借地す。

麻布邸

江都城南一里許リ、麻布古川ノ西、一向宗善福寺ノ傍ニアリ。元此地ハ善福寺ノ地面ニテ年季ノ御借地ナリ。故ニ一名ヲ善福寺屋敷トモ舊記ニ書セリ。此邸ハ寛文八年二月御借地ノ約ト、ノヒヌ。地面ノ歩數傳ル處ナシ。然ルニ當月四日世子曹源公御事オハシマス處ノ下谷邸火災アリシ折ナレハ、早速此邸土木アリテ、程ナク成就セシカハ曹源公綱池田眞證夫人トトモニ淺草ノ邸音觀裏穴栗御下屋敷也ヨリ爰ニ移ラセ玉フ。其年月ハ舊記ニ見エサレハ、何レ今年ノ内ナルヘシ。同九年七月廿一日振姫殿本多家へ嫁シ玉ヒシ蓮珠院殿ノ御コトナリ。此邸ニテ誕生アリ。同十年三月曹源公御參府アリテ、後久シク御不例ナリシカハ、六月晦日將軍家ヨリ上使ヲ以テ雲雀賜ヒシ時、御居屋敷麻布へ來臨アリテ、御疾ヲ訪セラレシ事モ舊記ニ見エタリ。同十二年烈公池田光政老シ玉ヒ、曹源公立セシ後モ、猶此邸ニオハシ、アクル延寶元年正月元日ニハ本邸ニワタラセ

群臣ノ拜賀ヲ受タマヒ、晡時ニ及テ麻布ニ歸ラセ玉フ。御家督ノ後直ニ本邸ニ移ラセ玉フ由記セハ當時ノ日記ニ見エシ處ナリ。説同三月九日圓盛夫人松姫殿曹源公御事。是ヨリ先圓盛院殿御養育アリシ也。麻布邸ニワタラセ御逗留ノ事ナトモ皆其比ノ記録ニ見エタリ。是月十九日太公烈公ノ御事。參府シタマヒテモ猶本邸ニ入ラセ玉ヒヌ。同六月八日曹源公御歸國アリシ後、烈公圓盛夫人ト共ニ此邸ニ移ラセ、眞證夫人本邸ニ入ラセ玉フ。翌年四月廿三日曹源公御參府アリテハ直ニ本邸ニ入セラル。今年九月廿二日丹波守殿靈樹院殿。モ此邸ニ移リ住セラル。按此時ハ丹州殿奥方ハイマタ備前ニオハセシメ。夫ヨリ延寶五年十一月マテハ、烈公圓盛夫人此邸ニ住セ玉ヒシカ、此月十日烈公御歸國アリシ後、此邸ノ館ヲ土器町ノ新邸ニ移シ造ラレンタメ、同十五日圓盛院殿假ニ向屋敷ニ移ラセ玉フ。アクル六年秋ニ至リ、此御屋敷當年季明キニテ、土器町御普請モ落成シヌレハ、麻布御屋敷ヲハ、善福寺へ返シ、辻番モ引セラレ度旨御願アリシニ、同九月廿一日御願濟ケレハ、翌廿二日水野作右衛門在江戸小仕置。大野十兵衛判形瀧波與兵衛居役。出合ヒ、善福寺へ引渡シ事濟ケル由、其時ノ日記ニ見エタリ。此邸寛文八年ヨリ爰ニ至テ十一年ニシテ止ラル。此邸ノ跡今善福寺ノ裏道ニ

附記、二
巾着切穿

〔附記二〕 巾着切穿鑿

廿三日 ○寛文八年
二月 ○中略。

金壹兩ツ、

御小人見付
八

人

備藩邸考

明地アリ。此地カ、又寺ノ北隣ニ肥前家守松平直。前ノ別邸アリ、若此地ニモアラシカ、詳ナル事知カタシ。

右兩國橋并所々、巾着切穿鑿捕之ニ付。

柳營日次記

廿七日丙申

○寛文八年(紀元二二二八)年二月○丙申、三正綜覽。

島原○肥前國。城主高力隆長○左近大夫。ノ封

ヲ收メ、其邸ヲ公收ス。○柳營日次記。嚴有院殿御實紀。

高力氏邸公收

島原高力氏收封ハ、嚴有院殿御實紀ニ左ノ如ク見ユ。

廿七日○寛文八年二月。肥前國島原城主高力左近大夫隆長、所領三萬七千石没入ありて、松平龜千代にあづけられ、嫡子伊豫守常長は酒井左衛門尉忠義にあづけられ、二男右衛門季長は眞田右衛門幸道にあづけられ、居邸は牧野飛驒守忠成に預られぬ。この隆長は、もとの攝津守忠房の子なり。忠房初め遠江國濱松の城主たりしが、寛永十五年肥前島原の賊徒たちのきて後、かしこを鎮撫するもの忠房其任にあたりとて、今の城給はり、良民を各所よりよびあつ

高力氏邸公
收事蹟

市街充實時代

め、いかにもして人心歸服せんはからひせよとて、米金若干下されて、其地を保護せしめられたり。去かるに隆長そのはじめ父か岩槻の城にありしころ、慶長十七年十二月八日神祖を拜し、元和三年台徳院殿にも、日光御詣の折から、その城に立よらせ給ひしかば、拜し奉る。九年御上洛の時、叙爵して左近大夫と稱し、明暦二年二月八日家つぎしより、奢侈につのり、領地の政事あしく、非理の課税をかけ、四民をくるしむるのみならず、家士等虐使に堪ず。さきに鎮西の國々巡視の御使つかはされし時、領民隆長が虐政にくるしむよし訴ふる者少からず。よてかく罪蒙りて、後延寶四年十二月廿五日配所にて死しぬ。齡七十二。

廿八日寛文八年諸大名の輩御前近く召て、こたび高力左近大夫隆長、領國の民をくるしむるつみもつともかるからず、よて國除かる、隆長が外にも猶政績よろしからぬ聞えなきにあらず、各前弊を改め、維新の政を行ふべきむね面命あり。

邸宅收公ハ、朔日寛文八年

一、高力左近家財息女ニ被下之、屋敷發拜領地ニ被召上、自分求屋鋪ハ、娘ニ被下之。左近ニ家來八人、伊豫守ニ同八人、右衛門ニ同五人被爲附之。

三日寛文八年一、高力左近上ケ屋敷、保科肥後守之。正に當分被爲借之。——柳營日次記

廿九日戊戌寛文八年將軍家綱徳川燒跡ヲ巡視ス。殿中日記

次記。人見私記。

將軍燒跡巡視 代官町屋鋪割有ルヲ以テ也。

廿四日寛文八年明廿五日御堀廻り今度燒失之場爲御上覽、可被爲成之旨、被仰出之。御供觸四時也。

廿五日天終日雨。雨天故御成延引也。

廿九日青午刻、御堀廻り燒跡爲御上覽、被爲成。御道筋、大手方雉子橋、飯田町、代官町、田安御門、糺町土橋より、松平越後守屋敷前通、虎口御門、窪町、幸橋、馬場先御門、内櫻田、入御、未ノ刻也。

御供能登守利房民部少松平筑後守板倉御先へ參上、代官町迄老中不殘、

市街充實時代

將軍燒跡巡視

將軍燒跡巡視

御留守因幡守信興其外當番之輩殿中ニ祇公也。

殿中日記

廿五日寛文八年二月代官町屋敷割依有之爲上覽出御有へき所雨故御延引也。

廿九日寛文八年二月午堀廻り出御雉子橋飯田町由安代官町半藏町元山王久保町幸橋邊等今度燒失ノ跡上覽未還御。

人見私記

廿五日寛文八年二月中略。

代官町屋敷割依有之今日爲上覽可遊出御處雨天ニ付御延引。

廿九日寛文八年二月中略。

一、已下刻御堀廻り出御御供土井能登守板倉筑後守松平民部少其外御近習之面々雉子橋飯田町由安代官町半藏町元山王久保町幸橋邊今度燒失之跡上覽。

柳營日次記

中丸其他普請

三月六日乙巳寛文八年(紀元二三二)乙巳(三正綜覽)小姓組曾根崇次兵衛書院番内藤

景忠九郎權ヲシテ中丸及比丘尼屋鋪麴町区内營造ヲ奉行セシメ小姓

組設樂貞政衛門市左書院番大岡忠貞衛門市右久保町門麴町区内營造小

姓組曾我助壽之權書院番山角定勝兵衛藤ニ市谷門麴町区内營造小姓

組石尾氏一兵衛書院番長崎元義衛門市左二代官町麴町区内地形ヲ奉行

セシム。柳營日次記嚴九月十八日甲寅寛文八年(紀元二三二)甲寅(三正綜覽)工成リテ掛

員受賞ス。柳營日次記

中丸其他普請事蹟

中丸其他普請 二月燒失シタル中丸藤原氏居第其他ヲ營造スル爲メ三月六

日奉行ノ任命有リ。

六日寛文八年三月

今度火事ニ付所々御門燒失ニ付御書院御小性組々奉行被仰付之。

中丸御方御屋敷

松平監物組 曾根五郎兵衛次崇

比丘尼衆屋敷

仙石因幡守組 内藤權九郎忠景

久保町御門

松平内記組 設樂市左衛門政貞

市谷御門

酒井伊豫守組 大岡忠右衛門真忠

代官町地形

石川美作守組 曾我權之丞助

代官町地形

三枝隱岐守組 山角藤兵衛勝定

代官町地形

松平縫殿頭組 石尾七兵衛一氏

市街充實時代

六六一

右御普請奉行被仰付旨、老中被傳之。

柳營日記

六日○寛文八年三月。さきに焼たる本理院殿○將軍家光夫人藤原氏の第宅并に比丘尼の宅地構造奉行を小姓組曾根五郎兵衛崇次・書院番内藤權九郎景忠、虎門を小姓組設樂市左衛門貞政・書院番大岡忠右衛門忠真、市谷門を小姓組曾我權之丞助・壽書院番山角藤兵衛定勝、代官町堤防石壘を小姓組石尾七兵衛氏一・書院番長崎彌左衛門元義に命せらる。

嚴有院殿御實紀

内中丸本理院第八、九月八日工畢リテ老中ノ查檢有リ、十二日移徙ス。

八日○寛文八年九月。

中丸御作事出來、老中見分。

十一日○寛文八年九月。

本理院御方○將軍家光夫人藤原氏。新宅に明日御移徙之由也。

十二日○寛文八年九月。

本理院御方御住宅御造畢、今辰后刻御移徙有之に付、御留守居衆榊原四郎左衛門・徒頭安藤傳右衛門組共被遣之、館林殿下屋敷方御供勤之、御留守居衆兩

人、北條右近大夫・伊澤隼人正御新宅へ豫參。

右に付、御使女中迄に。

金十枚
綿百把
二種 鶴布 一荷

本理院御方へ

小袖四

白井平兵衛

同 貳

北村木工

同 貳

岡本清左衛門

銀十枚

こ かう

同

ます やま

銀百枚

男女惣中

綿五把
二種 一荷

御臺様へ本理院殿へ

銀五枚ツ、

はま。こ かう。はま。す やま。

同 三枚ツ、

す 惣。 せん。

柳營日記

代官町地形普請ハ、亦工成リテ九月七日八日老中ノ見分有リ。

七日○寛文八年九月。

市街充實時代

一、代官町土手普請出來ニ付、爲見分、今已下刻老中不殘罷越。

八日○寛文八年九月

老中午刻以前退出、直代官町御普請場巡見之。

——柳營日記

行賞。

十八日○寛文八年九月

金三枚時服三ツ、本理院御方。

曾根五郎兵衛

内藤權九郎

石尾七兵衛

長崎彌左衛門

山角藤兵衛

曾我權之丞

設樂市左衛門

大岡忠右衛門

同斷。代官町土手。

同斷。市ヶ谷御門。

同斷。虎御門。

右所々御普請被仰付出來ニ付、爲御褒美被下旨、土井能登守○利傳達之。右御普請相勤ニ付。

銀十枚ツ、

御被官大工

吉村加右衛門

清水彌左衛門

前澤藤兵衛

鈴木權兵衛

——柳營日記

吉正○孫助。五郎兵衛。致仕號「祐齋」。今の呈譜崇次に作る。

十七年○寛文三月十九日御小性組に列し、○中八年文九月十八日中丸を

よひ虎門市谷門あるひは代官町の土手普請をうけたまはりしにより、時

服三領、黄金三枚たまひ、○下

景忠○助十郎。權九郎。内藤。

四年○正保十二月二十五日御小性組の番士となり、○中寛文八年さきに中

丸及び虎門市谷門代官町の普請をうけたまはりしにより、時服黄金等を

賜ふ。

貞政○甚之助。市左衛門。肥前守。從五位下。設樂。

十八年○寛文六月二十八日御小性組にうつり、○中八年文九月十八日虎

門の普請をつとめしにより、時服三領、黄金三枚をたまふ。

忠真○權四郎。忠右衛門。大岡。

市街充實時代

萬治二年七月十一日御書院番に列し、寛文八年九月十八日虎門の普請を奉行せしにより、時服三領黄金三枚をたまふ。

助壽權左衛門。權之坂。曾我。

三年應。二月二十三日御小性組の番士に列し、略。中八年文。九月十八日

所々の普請の奉行を勤めしにより、時服黄金をたまふ。

定勝清三郎。藤兵衛。山角。

十一年文。御書院番にうつり、略。中八年文。九月十八日市谷門の普請を

奉行せしにより、時服三領黄金三枚を賜ふ。

氏一初治重。長三郎。助右衛門。七兵衛。石尾。

略。上。御小性組にうつり、略。中八年九月十八日中丸の御殿及び虎門市谷門

等の土手普請のことをつとめしにより、時服三領黄金三枚をたまふ。

元義半兵衛。半左衛門。彌左衛門。長崎。

四年保。十二月二十五日御書院番に列し、寛文八年九月十八日先に本理

院殿の住せたまふ中丸の御館をよび虎門市谷門代官町等堤の普請を奉

行せしにより、時服三領黄金二枚をたまふ。
——寛政重修諸家譜

附記
中丸家老
役屋鋪

〔附記〕 中丸家老役屋鋪

九日。寛文八年四月。

一、中丸御方家老白井平兵衛事、代官町役屋敷爲作事料、白銀貳拾貫目被下
之旨、老中被仰渡之。
——柳營日記

一、同月。寛文八年四月。九日ニ、中丸様御家老白井平兵衛、岡野内藏允與力屋敷
ヲ下サルニ付テ、作夏料トシテ、銀五十貫目下サル由、仰渡サル。
——天享吾妻鑑萬天。日録同。

屋鋪替

八日丁未寛文八年(紀元二三二八)三月。丁未。三正。綜覽。代官町市内。麴町區。ニ於ケル諸士ノ宅地ヲ

收メテ、之ヲ外ニ移ス。柳營。日次記。

屋鋪替事蹟

屋鋪替 左ノ如シ。

八日。寛文八年三月。略。

一、代官町屋敷被召上之面々、替地被下。

川村重正

福留平左衛門
上ケ屋敷。

川村善次郎重正。へ

宮城和澄

日下部五郎八
上屋敷。

宮城主殿和澄。へ

市街充實時代

六六七

鳥居忠以

高力左近大夫
中屋敷

鳥居權之助○忠以

酒井重頼

右御藏近所ニ面
屋敷

酒井作右衛門○重頼

森川氏知

右同所ニ面
屋敷

森川助右衛門○氏知

伊奈忠常

鐵炮洲ニ面
淡路守上屋敷

伊奈半左衛門○半十郎忠常

朝比奈泰通

右同所ニ面
屋敷

朝比奈彌三郎○泰通

右之通替地被下旨老中被仰渡。

柳營日記

附記
松平氏賜
邸

〔附記〕 松平氏賜邸

岩村藩松平家

一同所○代官町屋敷焼失同所向屋敷ヲ賜フ。

下賜 寛文八年月不知。

子爵松平家回答○岩村藩

兩國橋淺草
橋邊屋鋪外
移

十五日甲寅○寛文八年(紀元二三二八)三月○甲寅三正綜覽兩國橋淺草橋○市内日本橋區附近ノ坊主

屋鋪及町家ヲ外ニ移ス。○柳營日記。嚴有院殿御實紀。

兩國橋淺草
橋邊屋鋪外
移事蹟

兩國橋淺草橋邊屋鋪外移 兩國橋附近ノ坊主屋鋪ヲ外ニ移スコト既ニ之ヲ記ス。此ニ云フ所ハ猶多少殘留シタル者有リテ乃チ之ヲ移セシ歟是ヨリ先三

月七日若年寄土井利房書院番頭板倉重直兩國橋附近ノ坊主屋鋪ヲ巡視スル
コト、柳營日記ニ、

七日○寛文八年三月○中略

一、土井能登守房○利房板倉筑後守直○重直兩國橋近所坊主衆屋敷爲見分被罷越レト見ユ。

廿二日○寛文八年三月

一、去十五日日下柳原ハ兩國橋之近所故坊主衆八人屋敷被召上其代淺草寺町并鐵炮洲築地兩所ニ被下且又淺草橋近所ニ有之町屋少々被召上之爲代地淺草寺町ニ被下之。
——柳營日記

十五日○寛文八年三月○中略淺草橋邊の市店を同所の閑地にうつさる。

——嚴有院殿御實紀

是日○寛文八年(紀元二三二八)三月十五日ニ特許有ル者ノ外市人ノ佩刀スルヲ禁ズ。

○殿中日記。人見私記。御當家令條。

市人佩刀禁 左ノ如ク傳フ。

○寛文八年三月十五日晴天。

市街充實時代

市人佩刀禁
事蹟

市人佩刀禁

一、町人縱雖爲御扶助之者、刀帶之、江戸中徘徊、向後堅、可爲無用。但、免許之輩ハ制外之事。

一、町人之屋作并衣類諸事、相守儉約、成程輕可仕事。

一、何方より誂いとも、向後惣梨地、惣フンダミ、惣切金之道具、一切不可仕之事。右之通被仰出、ハ間、町中急度被相觸之、自今以後、若違背之族於有之ハ、可被處嚴科者也。

——殿中日記

十五日〇寛文八年三月、町に被仰出趣、町奉行共書付相渡ス。所謂、町人雖爲御扶助ノ者、刀帶之、江戸中徘徊、彌堅ク可爲無用。但、免許ノ輩ハ制外ノ事。町人ノ屋作并衣類諸事、相守儉約ヲ、成程カロク可仕事。何方ヨリ蒔繪道具雖誂之、惣梨地惣金之粉タミ、惣切金道具、向後一切不可仕事。

——人見私記

一、同月〇寛文八年三月、十五日ニ仰セ出サル、ハ、町人ノ面々、御扶持人タリ、刀ヲ帶ル、ハ彌堅ク無用タルヘキ也。但シ御許ノ輩ハ、急度御法度ニ仰付ラル。

——天享吾妻鑑

一、町人刀帶之、江戸中徘徊之儀、堅可爲無用。但、免許之輩者、制外事。

一、何方より蒔繪道具誂之、惣梨子地、惣金の粉だみ、惣きり金の道具、一切不可仕事。

一、扶持人之町人刀御免、但、法體之者ハ無用事。

附、召仕之下人、是又刀無用之事。

右刀御免之輩。

吳服所七人。金銀坐七人。

本阿彌七人。狩野九人。

大佛師左京。木原縫殿助。

大久保主水。伊勢屋作兵衛。

岩井與左衛門。丸田喜右衛門。

辻彌兵衛。伊阿彌角之丞。

土屋右衛門。臺屋五郎右衛門。

申〇寛文八年三月廿日

——御當家令條

〔附記〕 猿樂人帶刀禁及其條例

四日〇寛文八年五月、〇中略。此日猿樂等鼓吹手狂言師まで刀帶る事を禁ぜらる。よて

市街充實時代

附記
猿樂人帶
刀禁及其
條例

條例を下さる。旅行の時も鎗もたすべからずをのく其技をもはらとし
につかはしからぬ他技をなすべからず衣服は絹紬を着すべし猿樂催さ
るゝは大夫の宅に集り試業すべしすべて若黨めし具すべからずとなり。
役者惣員三百七十人此旨堅く守るべしとなり。

一 嚴有院殿御實紀

屋鋪給替

廿一日庚申

寛文八年(紀元二二二八)三月三日

屋鋪替有リ。

廿二日辛酉

寛文八年(紀元二二二八)三月三日

三月〇辛酉

廿三日壬戌

寛文八年(紀元二二二八)三月三日

及四月朔日己巳

寛文八年(紀元二二二八)三月三日

三二八年〇己巳 同ジ。柳營日次記。寛政呈譜。

屋鋪給替事

屋鋪給替

左ノ如シ。

廿一日〇寛文八年三月

一、屋敷御用地ニ被召上之替地旨下之。

板倉重大

板倉市正大。重

酒井忠供

酒井采女忠

宮崎政泰

宮崎若狹守泰。政

大久保忠

大久保平左衛門忠

奥山重正

奥山藤十郎重正。重

伊奈宗英

伊奈十左衛門宗英。宗

森正勝

森新兵衛正勝。正

森新兵衛屋敷。鐵炮洲上ケ屋敷本庄ニ被下。十左衛門屋敷。

右之通被下旨老中被傳之。

廿二日〇寛文八年三月〇中略。

一、石丸石見守次。定屋敷上ケ爲代地吉祥寺ニ被下之。

廿三日〇寛文八年三月〇中略。

一、石川美作守政。乘代官町屋敷上ケ爲代地於同所松平豊前守屋敷被下之。

朔日〇寛文八年四月〇中略。

一、平野權平勝。長於麻生下屋敷被下之。是之上屋敷ニ養子丹波守長政。平野居

住ニ付被下之旨也。

柳營日次記

一、二代目生國武藏。

酒井土佐守忠供半助。采女。又下總守。〇中略。

同文。〇寛文八年二月六日私居屋敷類焼節御用地ニ五百坪被召上右足坪大

久保村ニ私所持仕以抱屋敷之内ニ相願同年三月廿二日五百坪拜領仕

也。

市街充實時代

平野長勝

石川乗政

石丸定次

石川乗政從五位下。美作守。后改能登守。又改美作守。幼名助十郎。

同文。○寬八申年代官町屋敷類焼ニ付、爲替地同町向屋敷被下之。但、月日相知不申外。

寛政呈譜

附記一
堀田正俊
澁谷下屋
鋪

〔附記一〕 堀田正俊澁谷下屋鋪

明治十一年十一月調

下	屋敷	町名	位置	坪數	給	收	年	月
	澁谷斧町	今ノ開拓使用地	四万七千五百坪餘	寛文八戊申年三月正俊(○堀田)代ヨリ追々給シ、明治四年十一月正倫ノ片上ル。				

——伯爵堀田家回答倉○佐藩。

附記二
新吉原新
道

〔附記二〕 新吉原新道

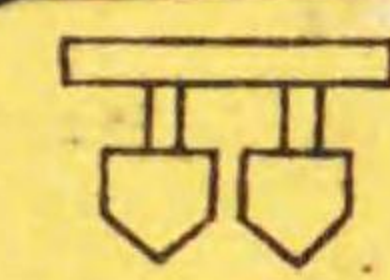
新吉原廓内ニ新道ヲ開キ、境町伏見町ト號ス。

新吉原略。中

境町

右境町之儀、新吉原ニ引移、寛文八年申三月中、江戸町貳町目名主町人共御訴認申上、面々之屋敷之内を切り、新道ニ作り、境町を名付申外。此時分端

五拾間道



新吉原横京間百八十間也此外惣堀有

京町式丁目

兩側惣間數百九十六間八分

角町

兩側惣間數百七十七間二尺

江戸町二丁目

新吉原中町 大門より水道より道百三十五間

五拾間道

兩側惣間數百六十三間五尺七

京町壹丁目

兩側惣間數百六十一間一尺

揚屋町

兩側惣間數百六十六間二尺一

江戸町壹丁目

境町

右境町之儀ニ、新吉原ニ引移、寛文八年申三月中江戸町貳町目名主御訴訟申上、面々之屋敷之内を切り、新道ニ作り、境町ニ名付申上。此



右境町之儀と、新吉原に引移、寛文八年申三月中、江戸町貳丁目名主町人共御訴訟申上、面々之屋敷之内を切り、新道ニ作り、境町を名付申上、此時分端

惣堀幅五間

新吉原横京間百八十間也此外惣堀有

目下式町京

兩側惣間數百九十間六尺四寸

町角

兩側惣間數百七十間六尺二寸

江戸町二丁目

新吉原中町

大門より水道ニ一河
百三十五間

五拾間道

兩側惣間數百六十三間五尺七寸

京町壹丁目

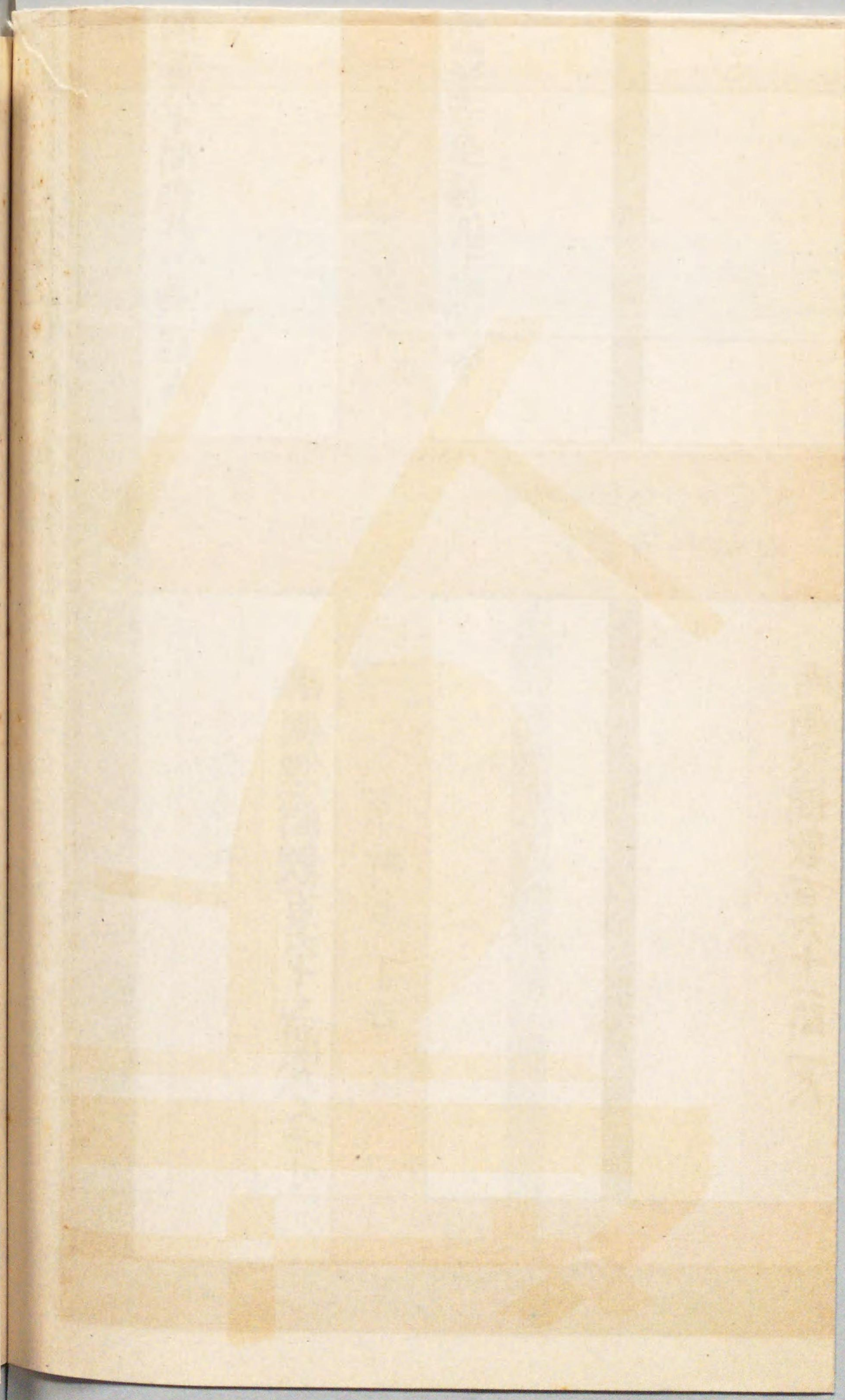
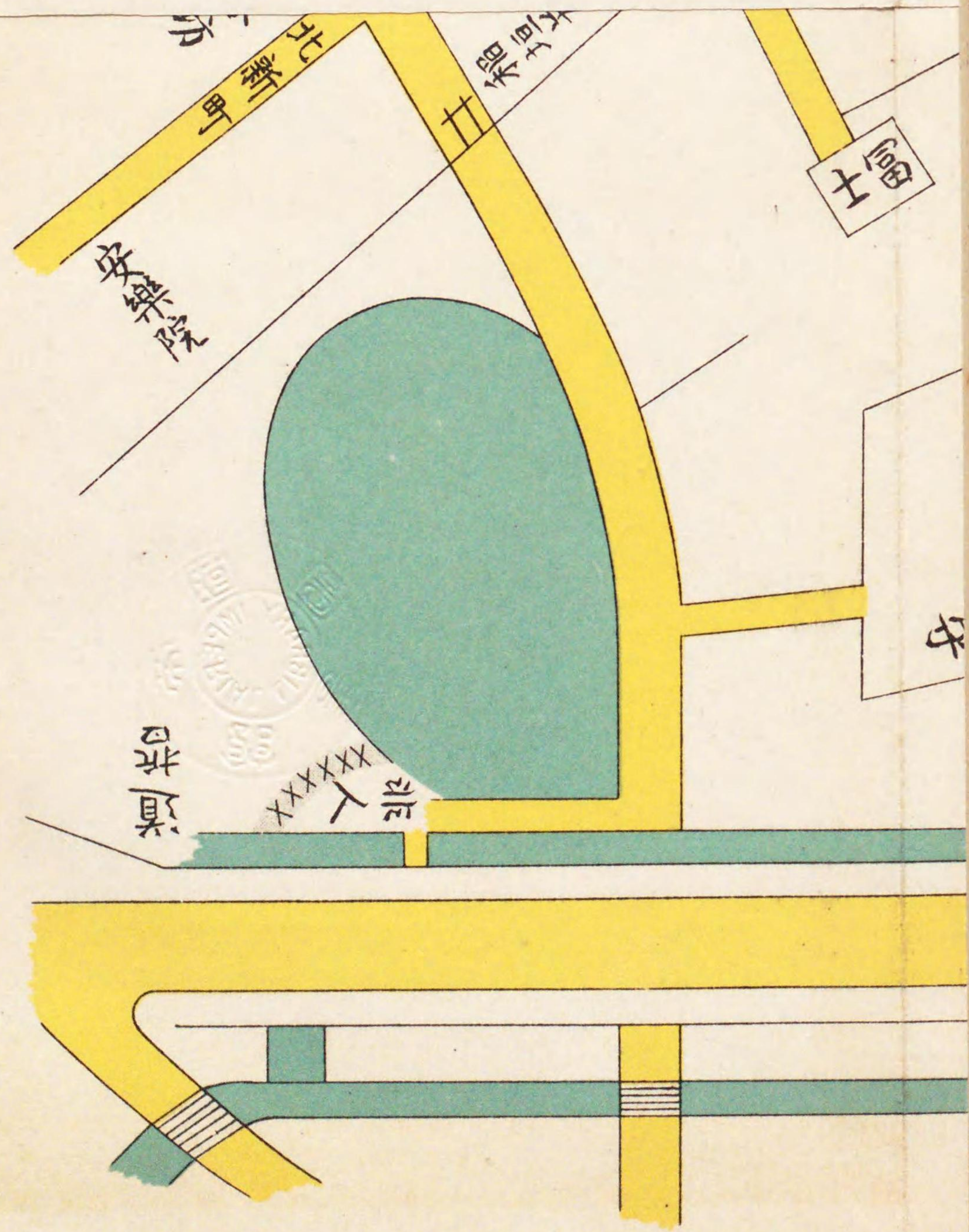
兩側惣間數百六十二間一尺

揚屋町

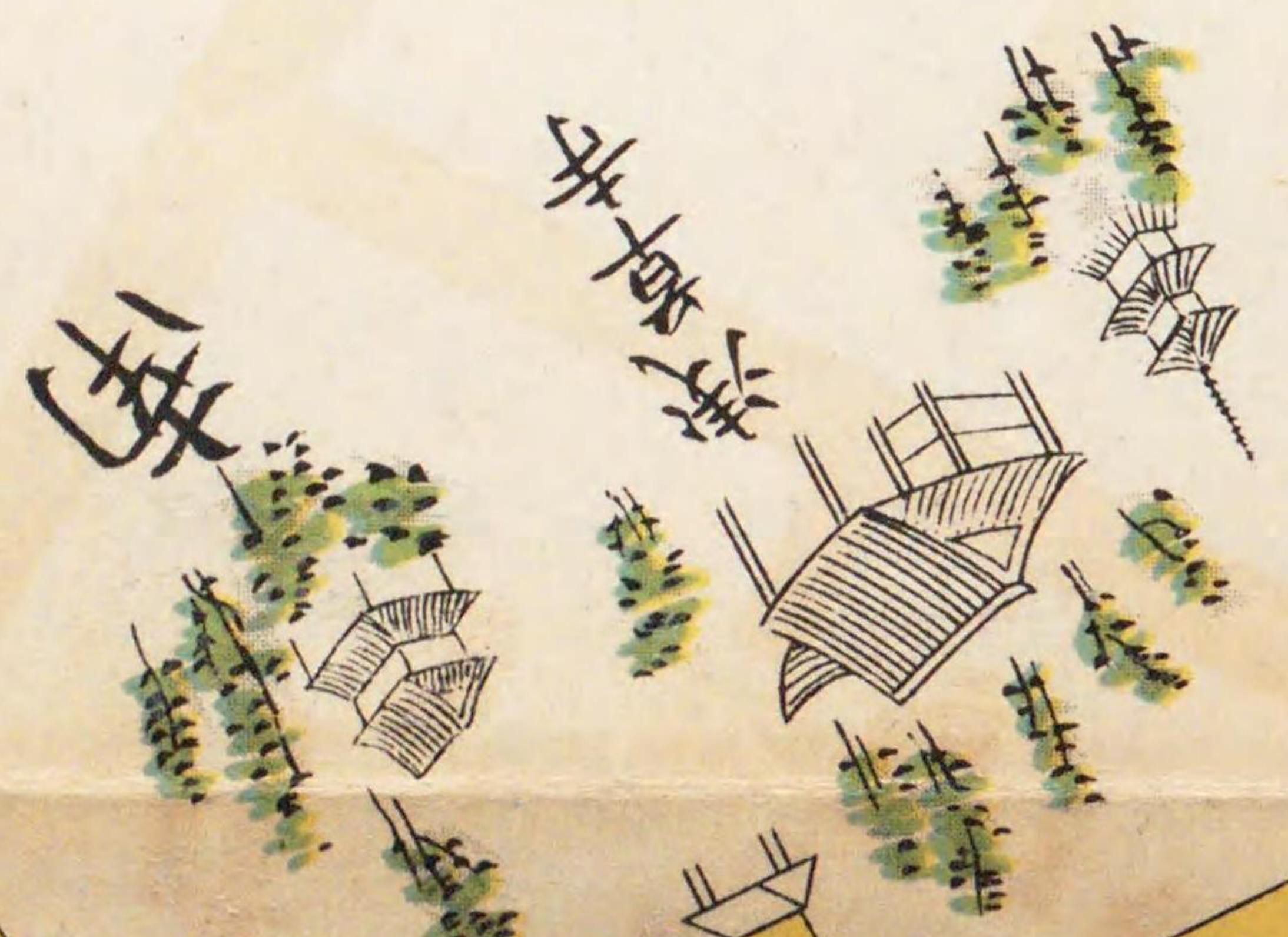
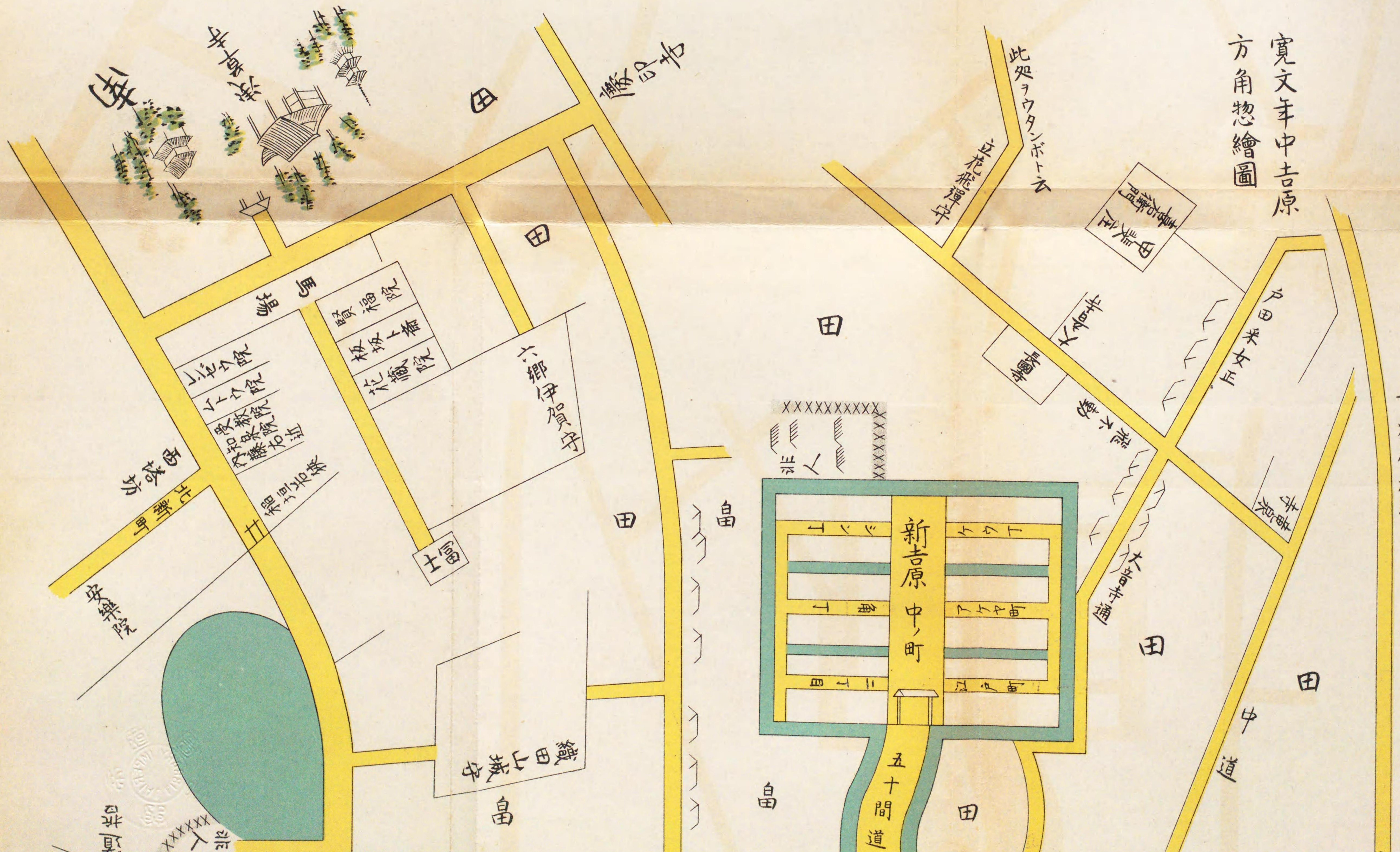
兩側惣間數百六十六間二尺寸

江戸町叁丁目





寛文中吉原
方角惣繪圖



下谷金杉通

此処ラウタンボト云
花畑

田
五郎

田
大島川

田
大島川

田

中道

田

田

田
人

島

田

島

田

五十間道

鐵田子城子

島

土富

六郷伊原氏

福院
花藏院
板橋上番

山崎院
下口院
安樂院
和泉院
外藤和近

安樂院

安樂院

道

人

道

海

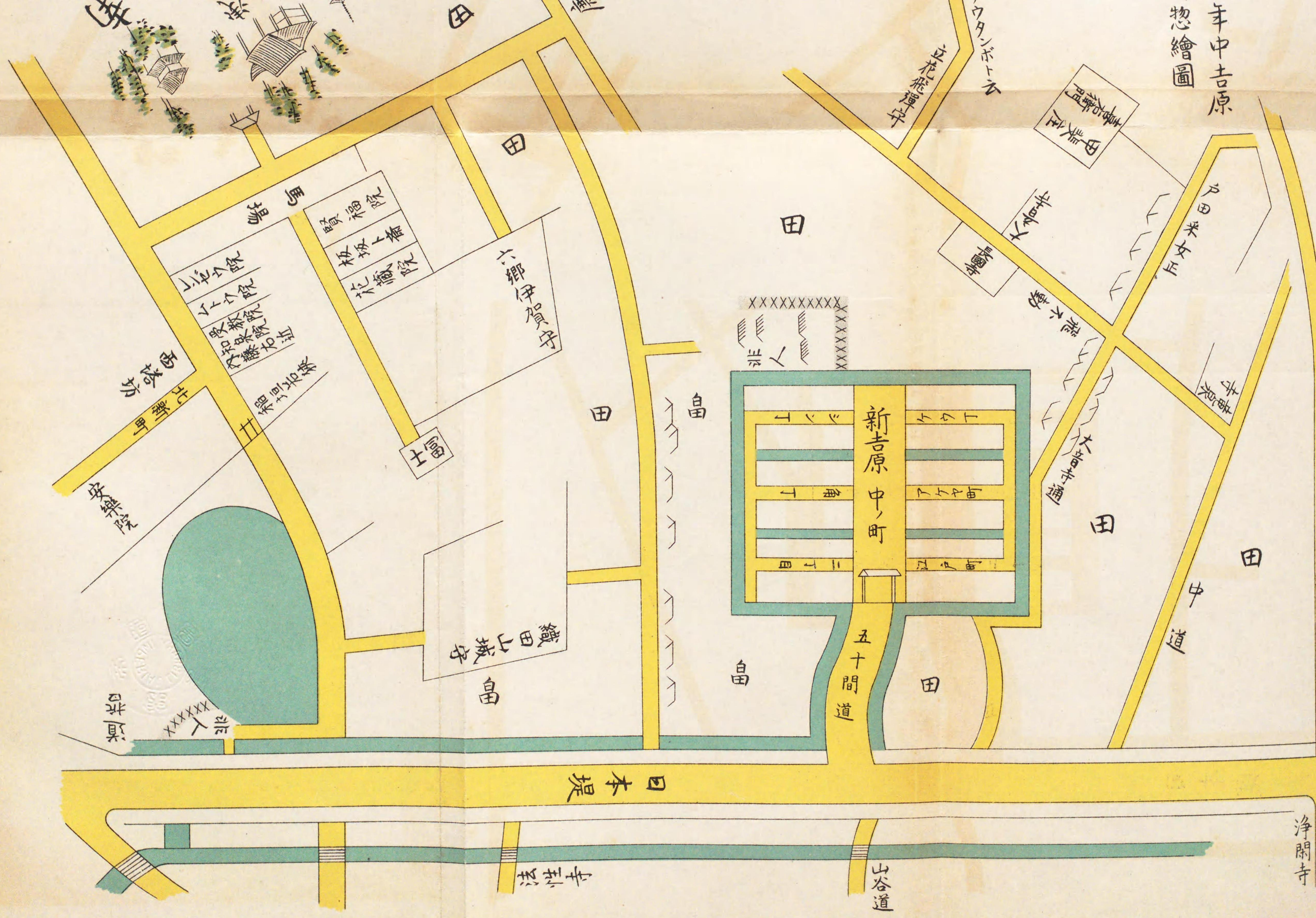
田

島

幸中吉原
惣繪圖

下谷金杖通

淨閑寺



田
五間道

田
大和井

田
飛不動

田
大和井

田

田
中道

田

田

田
人

田
島

田
島

田

田

田
島

田
岩

田
福院
極上番
花藏院

田
六郷伊原子

田
土

田
鐵田子城子

田
安樂院

田
道
人



田
ワタンボト

日本堤

山谷道

山谷道

端之賣女御詮儀御座いる端々ニ罷在い茶屋遊女持とい吉原町い他言仕
いる其段御訴訟申上い得え御慈悲を以御免被遊いニ付、毎度御訴訟申上、
遊女持共惣ゑ七拾餘人、方々い吉原い入込申上。依之右之新道を作り、右之
者共ニ借宅いとさせ申上。

伏見町

右伏見町之儀も、境町を取立い節、同時ニ新道ニ作り、伏見町い名付申上。其
比江戸町貳町目之年寄とも多い生國伏見堺之者共有い故、右之新吉原
古郷之名を付申上。

——府内備考

三月〇寛文年吉原廓内い新道をひとた、堺町伏見町と號い。○伏見町い、年寄古
とけし。境い、故、い名つ

——武江年表

〔参考〕新道開設前即チ新吉原轉移完了當時ノ狀況ハ、東京岡本則録所藏「準
繩帳」ニ、左ノ如ク見ユ。

準繩帳

寛文元年辛丑七月八日
喜多村彦右衛門殿い納。

○新吉原圖。

御高札御文言覺

市街充實時代

一、新吉原之外、町中遊女隱置者有之、兩町奉行所にかへ入る。縦普代永年季たゞといふ共、早速入主方に返し、身のまゝに可申付し。若又うけ込ひ事難成ひ、人ぼてを以書付可指上事。

一、新吉原に駕籠ゝる通者、あゝ、其斷ヲ申、よせ付百間鋪ひ。并鑓長刀停止たるべし。押之通者有之、奉行所に可申出事。

明曆三年酉ノ八月中悉引移ひ。御引料金壹万五百兩。但シ、小間壹間ニ付拾四兩ふらし。

覺

- 一、日本堤吉原入口かみ乃町迄四百貳間。
- 一、同千住通か吉原入口迄三百九拾四間。
- 一、同南側下水樋口迄長サ三百四拾貳間。
- 一、大門か水道シリ迄百三拾五間。
- 一、横幅京間百八拾間。外ニ幅五間ノ惣堀有。

中ノ町

表京間拾六間四尺八寸	甚左衛門
裏行二十間	
同六間四尺貳寸	仁兵衛
同八間五尺貳寸	四郎三郎
同六間壹寸	次郎兵衛
同四間貳寸	吉兵衛
同四間四尺三寸	九右衛門
同六間六尺	善太郎
同六間三尺壹寸	大左衛門
同六間三尺三寸	又左衛門
同四間貳尺	長三郎
同四間九寸	小左衛門
同六間壹尺四寸	藤左衛門

通岸河

江戸町壹丁目長八拾三間六尺

兩側家持二十壹軒

同八間八寸	新左衛門
同八間四尺壹寸	兵左衛門
同四間五尺貳寸	甚九郎
同拾八間八寸	太郎兵衛
同七間貳尺七寸	市兵衛
同五間三尺四寸	介左衛門
同四間壹尺五寸	野村
同四間七寸	所左衛門
同五間三尺六寸	九右衛門
七寸	表京間七間貳尺

市街充實時代

六七七

表京間四尺三寸	三分	藤右衛門
同二間五尺四寸	一分	喜左衛門
同三間一尺八寸	甚左衛門	表京間四尺七寸
同三間一尺八寸	甚左衛門	源藏
同三間一尺八寸	甚左衛門	小左衛門
同三間一尺八寸	甚左衛門	九郎兵衛
同三間一尺八寸	甚左衛門	九郎左衛門
同三間一尺八寸	甚左衛門	勘右衛門
同三間一尺八寸	甚左衛門	兵右衛門
同三間一尺八寸	甚左衛門	次郎兵衛
同三間一尺八寸	甚左衛門	佐左衛門
同三間一尺八寸	甚左衛門	仁右衛門
同三間一尺八寸	甚左衛門	八兵衛
同三間一尺八寸	甚左衛門	又三郎
同三間一尺八寸	甚左衛門	傳兵衛
同三間一尺八寸	甚左衛門	藏
同三間一尺八寸	甚左衛門	仁左衛門
同三間一尺八寸	甚左衛門	喜左衛門
同三間一尺八寸	甚左衛門	次郎兵衛
同三間一尺八寸	甚左衛門	市右衛門

江戸町貳丁目

表京間四尺二寸五分

源藏

表京間拾間貳尺	山田屋
同六間三尺	次郎左衛門
同六間三尺	半左衛門
同六間三尺	彦右衛門
同五間五尺二寸五分	利兵衛
同六間五尺二寸五分	正三郎
同三間二尺五寸	久兵衛
同三間	八左衛門
同五間三尺	吉左衛門
同四間三尺	孫兵衛
同四間四尺二寸五分	喜右衛門
同四間貳尺	彌左衛門
同四間四尺五寸	了四
同六間二尺	與兵衛
同六間五尺二寸五分	久右衛門
同貳間五尺	源兵衛

中之

河 岸 町

河 岸 町

源藏

表京間七間一尺	裏行二十間	庄左衛門
同四間四尺二寸	源左衛門	
同四間四尺二寸	勘左衛門	
同四間四尺二寸	仁左衛門	
同四間四尺	三郎兵衛	
同四間四尺	權右衛門	
同五間壹尺	又右衛門	
同六間壹尺	市右衛門	
同四間壹尺	多左衛門	
同三間壹尺	半兵衛	
同三間壹尺	五十七兵衛	
同三間壹尺	八郎兵衛	
同四間壹尺	七郎兵衛	
同五間壹尺	市左衛門	
同四間壹尺四寸	喜兵衛	
同四間壹尺四寸	五郎兵衛	
同五間四尺貳寸	吉兵衛	
同四間壹尺	太郎兵衛	
同五間五尺	太郎右衛門	

市街充實時代

六七九

中之

表五間一尺二寸 仁兵衛	治右衛門
同五間一尺二寸 權十郎	甚介
同九間二尺 庄右衛門	同 人
表京間四間壹尺	崇右衛門
同三間四尺三寸	同 人
同六間三尺	九左衛門
同四間四尺	利右衛門
同四間四尺	長右衛門
同四間四尺	平左衛門
同四間四尺	長兵衛
同四間四尺	甚三郎
同四間四尺	長左衛門
同四間四尺	久左衛門
同五間	善左衛門

揚ヶ屋町

長八拾壹間一尺六寸

西側家持三拾三軒

表七間四尺 十郎兵衛	同三間
同七間 九郎兵衛	同三間
同五間一尺二寸 常 祐	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同四間四尺	同三間
同五間一尺五寸	同三間
表京間八間三尺六寸 長兵衛	同三間

評定所裁斷
制事蹟

右寛文元年辛丑七月喜多村彦右衛門殿に相納申上。以上。
四月十日戊寅^八評定所裁斷ノ制ヲ定ム。殿^〇嚴有院。

松平直政赤坂邸擴地

十三日辛巳^〇寛文八年^〇紀元二二三八^〇松江^〇出雲國。城主松平直政^〇出羽守。高島信^〇濃國。城主諏訪忠晴^〇因幡守。ト相對替ヲ爲シテ、赤坂邸^〇市內。地ヲ擴ム。伯^〇松平家回答^〇江藩。ニ、

松平直政赤坂邸擴地事蹟

松平直政赤坂邸擴地 伯爵松平家回答^〇江藩。ニ、
一、赤坂上邸

雲州松平氏第一代出羽守直政公、寛永十五年二月十一日封を出雲國に受け、江戸赤坂に藩邸を賜ふ。寛文八年四月十三日山の手邸^〇麹町附近。の地半を割て、隣家諏訪因幡守忠恒^〇時魁。の宅地より易へ、赤坂館地を廣む。今の赤坂

市街充實時代

見附内閑院宮御邸及舊華族女學校のありし地なり。明治四年上納よ至るまで歴代松江侯の藩邸たり。

總坪數壹万參千五百〇參坪六合。

〔附記〕 水野氏等屋鋪替

忠増從五位下。周防守。幼名長吉。又權兵衛。後周防守と改。

同文。〇寛八戊申年四月日不相知屋敷三方相對替。願之通被仰付之。小石川屋

鋪須藤次郎左衛門信。〇盛に遣し、鷹匠町屋鋪森川藏人芳。〇氏を請取申し。

寛政呈譜

十六日甲申〇寛文八年紀元二二二八高田ノ方徳川氏〇松平忠直夫人。二、第宅營

造料ヲ給ス。〇天享吾妻鑑。萬天日録。殿有院殿御實紀。

高田ノ方第營造 亦二月ノ火災ニ燒失シタル者歟。

一、同年〇寛文八年四月。十六日ニ、高田様御作事料トシテ金千兩遣ハサル。

天享吾妻鑑〇萬天日録同。

十六日〇寛文八年四月。高田御方第宅營造料金五千兩つかはさる。

殿有院殿御實紀

附記
水野氏等
屋鋪替
水野忠増

高田ノ方第
營造

高田ノ方第
營造事蹟

〔參考〕 談海二、

一、寛文八年十月四日

岩手五右衛門下屋敷を高田御方御屋敷ニ御望由、當六月原町ノ覺右衛門と申者佐五右衛門屋敷へ參召仕之者ニ一往申し、其已後終不參し。然所ニ同月ニ良意と申醫師、又右之通申し故、依其品相談可申之旨、佐五右衛門召仕挨拶申しへ共、其後高田御方家來佐五右衛門方へ參し、見分之上屋敷替相濟し所ニ、秋元彦太夫山中半太夫と申浪人、其外人數八人召列、佐五右衛門宅へ兩三度ニ及罷越申様ハ、高田御方と佐五右衛門屋敷替之儀前廉我々共肝煎仕とる事ニハ、間屋敷替落着之上ハ、禮金取可申由よて、様々惡口雜言仕し得共、佐五右衛門召仕し者色々挨拶申し返しし得也、九月朔日之晚、又右兩人其外以上十人參りし、彦太夫半太夫ハ寄付へ上りし、是非共今晩埒明可申之旨申付、佐五右衛門方々右之通町奉行所へ注進申し得也、則與力同心差越し得共、程遠き故令延引付、彼二人ノ浪人共佐五右衛門ニ令對面、是非埒明可申旨、次之間、左五右衛門罷立、申分一々承し故、無是非罷出致下知、兩人共ニ爲討申し、相殘ル八人之者をハ搦捕之、

町奉行所へ右之段注進申付、八人共籠舎申付穿鑿處、左五右衛門申分無相違し。彦太夫・半太夫重々不届之仕合に被討ひ。原町ノ覺右衛門事ハ、屋敷替之儀に付、一往申聞ひ、其以後終に不參ひ得共、身を隠し、事曲事ハ之間、江戸廿里四方追放申付、相殘ル八人之者共ハ、遂穿鑿處、彦太夫・半太夫召連參ひ付て罷越ひ之由申ひ故、八人共江戸追放申付之者也。

附記一、三十三間堂矢數

〔附記一〕 三十三間堂矢數

一、寛文八年申四月十八日於淺草三十三間堂矢數之覺。

一、惣矢數六千五百筋。

築瀬龜之助八歳

弓ノ長ケ四尺八寸五分五厘。矢東壹尺七寸。

弓師當町

次郎兵衛

矢師當町弓丁

木村河内

龜之助親

築瀬勘兵衛

右勘兵衛今ハ浪人仕ひ。龜之助名ヲ改内記ト云。

〔附記二〕

増山氏祖母屋鋪作事

談海

附記二、増山氏祖母屋鋪作事

一、同日○寛文八年四月廿八日。ニ、増山兵部少輔祖母當春ノ類火ニ付テ、今度ノ作夏料トシテ金二千兩ヲ下サル。——天享吾妻鑑

馬場先門及新橋

是頃馬場先門

○市内

ヲ開キ及新シ橋

○市内

ヲ架ス。○坂上池院日記。萬

天日錄。天享吾妻鑑。

嚴有院殿御賞紀。

馬場先門及新橋事蹟

馬場先門及新橋

不明門ニ橋梁ヲ架スルコト、是ヨリ先所傳有リ。上文記スル所ノ如シ。是時ヨリ通行ヲ許シタル歟。

此春○寛文八年。火車ニ付、馬場先御門開、橋カ、ル。元ハアカスノ御門ト云。同ク虎

ノ御門ト幸橋ノ間ニ新ニ橋カ、ル、アタラシ橋ト云。

坂上池院日記

一、同年○寛文八年。春ノ火夏ニ付テ、馬場崎ノ御門明、橋カ、ル。元ニハ明カスノ御門ト云シ。

一、同ク虎ノ御門ト幸橋ノ間ニ新規ニ橋カ、ル新橋ト云。

天享吾妻鑑○萬天日錄同。

晦日○寛文八年四月○中略。これ迄馬場先ノ門は、常に閉て往來せしめざりしかば、不明

門とも唱へしが、この春ノ火災後より、門を開き橋をわたし、往來を通ず。又虎

市街充實時代

門と幸橋の間に橋を架して、新橋と唱ふ。
馬場先の門は、一名不明門ともとなへ、常にどちて往來なかりしが、寛文八年の春大火の後門を開き橋を架して、往來を通ずる事となり、また虎門と幸橋との間に新に橋を渡し、新橋と名付けしも、この御世○徳川家よりはじまりしなり。○附録。 嚴有院殿御實紀

五月七日乙巳○寛文八年紀元二三二

賜宅者有リ。○柳營日記。

賜宅 柳營日記二、

七日○寛文八年略。

天樹院殿附

湯上與三右衛門○彌次右衛門兼政歟。

宇地甚右衛門

同 森川此右衛門○助右衛門照方歟。

春 悅 林 齋

同 早見半左衛門 同 早見太郎介 加 雲 曾 閑

右之面々、屋敷被下之。
〔附記〕 邸宅巡檢

賜宅

賜宅事蹟

湯上兼政 早見半左 衛門甚右 宇地甚右 早見太郎 介 森川照方 春川悅 加 雲 林 齋 閑

附記 邸宅巡檢

三日○寛文八年略。

一、御歩行目付甚右衛門伊太夫善左衛門源左衛門彦右衛門嘉兵衛甚五兵衛嘉右衛門彌次兵衛小兵衛小日向市ヶ谷四ッ谷紀伊殿山屋敷牛込御門之内、飯田町番町糺町元鷹匠町神田橋外駿河臺赤坂麻布増上寺裏門通愛宕ノ下、虎ノ御門外糺町南側永田町櫻田、虎ノ御門内大名小路元山王下谷淺草深川不殘見分、御法度ニ背ハ屋敷一ヶ所も無之由申上ル。すり合ノ石垣有之、右石垣ニ少宛修復所ハ有之由也。 寛文遺録

六月晦日丁酉○寛文八年紀元二三二

襲祿手續ヲ令ス。○嚴有院殿御實紀。

襲祿手續 嚴有院殿御實紀ヲ抄ス。

晦日○寛文八年略。 けふ令せらるゝは、襲祿の事ねぎ奉る時、父の年齢、長子の名

并に齡、かつ二子三子共殘なく書つらね、父の歿日も注記し、養子は實父の年齢、其身の名齡、おなじく、かき出すべし、はじめやしなひし時、誰伴ひて老臣又は官長に謁せしめし月日をもゑるし、其他親縁のうちに養子とすべきものなきよしもかき載て出すべしとなり。

〔附記〕 品川驛高札

市街充實時代

襲祿手續 襲祿手續事蹟

附記 品川驛高札

十四日○寛文八年七月

近年米大豆高直成故、江戸より品川迄駄賃錢一駄ニ付五拾文、乘懸荷ハ人共ニ同前、荷ふしよ乗ハ三拾貳文、人足賃壹人ニ五六廿文可取之旨、被仰出之。

——柳營日次記

十四日○寛文八年七月品川驛に高札を建らる。近年米豆の價騰貴により、府より品川驛迄の駄賃、一駄に錢五十文、乘掛荷は人ともにおなじ、荷ふきは三十文、驛夫の直錢は二十五文たるべしとなり。

——嚴有院殿御實紀

殉死申禁

八月三日庚午○寛文八年(紀元二三二)八月(紀元一七六三)庚午、三正綜覽。宇都宮野國下城主奥平昌能膳亮ノ

封ヲ削リテ、山形城前國羽ニ移ス。家士殉死ノ禁ヲ犯シタルヲ以テ

也。五日壬申○寛文八年(紀元二三二)八月(紀元一七六三)壬申、三正綜覽。殉死ヲ申禁ス。○柳營日次記。嚴有院殿御實紀。土津遺事。

殉死申禁事蹟

殉死申禁 奥平氏家士殉死ノ禁ヲ犯シタルヲ機トシ、之ヲ申禁ス。

四日○寛文八年八月

奥平美作守昌。忠跡式之儀、昨日○寛文八年八月三日。年被仰出。然と美作守卒去之節、殉

死仕。杉浦右衛門兵衛惣領善右衛門、二男權田吉十郎事、切腹被仰付。右衛門兵衛掣兩人、奥平五太夫男子共、伊奈田瀬兵衛事、御追放被仰付。是殉死ハ御制禁之處、相背ハ條、如斯被仰付。

兩典○松平綱重。尾光友。紀光貞。水光。家司營中へ召之、昨日奥平美作守

跡式被仰付趣、且又殉死之子共、掣等、御仕置之趣達之。

五日○寛文八年八月

在江戸之萬石以上之諸大名、詰衆并諸番頭被爲召、於白書院、奥平大膳亮被仰。向後諸家中之輩、殉死不仕様、彌堅可申付旨。奥記。

渡ハ旨、老中出座上意之趣、酒井雅樂頭清。忠被傳之。

一、奥平大膳大夫能。昌家來美作守追腹切申。右衛門兵衛子 杉浦善右衛門 同人次男 權田吉十郎

右兩人、斬罪被仰付。

右衛門兵衛掣 奥平五太夫 右衛門兵衛掣彌五右衛門子 伊與田瀬兵衛

右兩人、追放被仰付。右之趣被仰付旨也。

諸家中之輩、殉死不仕様可申付旨、達之。——柳營日次記

三日○寛文八年八月。下野國宇都宮城主奥平美作守忠昌死けるとき、家士等制禁を

市街充實時代

違犯し殉死せるやからあるをもて、長子大膳亮昌能も罪科に處せらるべしといへども、祖先の忠勤并に忠昌は當代儲副におはしましける時より、先代の仰をうけ奉仕の勞を思召し、寛宥の御沙汰をもて、野州宇都宮を轉じ、二万石を削られ、新に出羽山形にて昌能に九万石を賜ふ。此忠昌は、故の大膳大夫家昌が子なり。年わづかに七歳にて、慶長十九年十一月十八日家つぎ、人となりし後、元和七年正月十一日台徳院殿の御前にて元服し、叙爵して御諱の字たまはり、美作守忠昌と稱す。これよりさき五年十月野州宇都宮より下總の古河にうつり、一万石加へられ十萬石を領し、八年ふたゝび宇都宮にうつり、寛永十一年九月十五日從四位下にのぼり、この八月寛文二年二月十九日六十歳にて卒せしなり。世に傳ふる所は、忠昌が卒せし時、家士國禁を犯して殉死せるのみ、藏允腹切て死す、かく物さはがしき事打つゝいさしかば、その家既に絶べかりしを、別の儀をもつて、かく上裁ありしとぞ聞えし。

嚴有院殿御實紀

八月三日寛文八年官命あはせて上野國宇都宮城主奥平大膳亮昌能をめし、老中旨を傳へていはく、汝か家來殉死の禁を犯せ、之をもはて領地貳萬石を減して、封を羽州最上の邑に移さると。五日列候を營中より召し、酒井雅樂頭忠清を

もて命を告て曰、今度奥平大膳亮殉死の禁を犯す、故に祿を減し邑を移して之を罰せらる。列候をめし命令のむを慎へしと。これ公の奏請する所奈里、實事

土津遺事

松浦氏等屋鋪替事蹟

松浦鎮信

岡田義政

久松僚恭

金田正長

附記
岡山池田氏
伊皿子

廿八日乙未寛文八年紀元二二二八年八月〇乙未三正綜覽平戸肥前國城主松浦鎮信肥前守等屋鋪替ス。柳營日次記

松浦氏等屋鋪替 柳營日次記ニ、

廿八日寛文八年八月〇中略

松浦肥前守信〇鎮

岡田豊前守政〇義

金田源兵衛長〇正

同伊右衛門門〇猪右衛門信貞

久松彌一郎僚〇恭

右を相對次第屋敷替可仕旨、老中被仰渡之。

〔附記〕 岡山池田氏伊皿子邸

是頃二本榎上行寺移轉跡ヲ領受ス。

伊皿子邸

江都城南五十餘町、荏原郡伊皿子町ニアリ。モト此地ハ上行寺ト云ヘル日

市街充實時代

蓮宗ノ寺地ナリシカ、寛文八年ノ夏、上行寺ハ二本榎浄土宗覺眞寺ノ地面ニ移リ、其跡御屋敷地ニ約定リ、御願有テ三千貳百六十坪御拜領地トナリ、按此度新ニ御拜領地トナリシカ、又他ノ邸地アリシヲ替地御願アリシニヤ今詳ナラス。外ニ、九百三十二坪高輪分、貳百廿三坪三田分、上行寺ノ抱地アリシヲモ一所ニ買トラセラレテ、都合四千四百拾五坪ノ邸ナリ。右ノ寺地故一名ヲ上行寺屋敷トモ其比ノ記録ニハ見エタリ。然ルニ此地烈公池田ノ御心ニ叶ハサリシニヤ、其マ、ニテ置レシモノト覺エテ、土木等ノ事舊記ニ見ル所ナシ。同十二年烈公老シ、曹源公御代ツカセラレシ後、同年十二月永井對馬守組屋敷此地詳ナラス。ト弓削多忠右衛門組屋敷土器町此伊皿子邸ト三方相對替リノ約調ヒテ御願アリシカハ、同廿八日御ユルシアリ、明ル延寶元年二月八日土器町弓削多ノ屋敷ヲ受取、直ニ此邸地ヲ永井家ニ渡サル。瀧波與兵衛、水野三郎兵衛立合テカキ物等渡セリ。此時ノ古文書今モ此組屋敷ニ傳タリ。此邸置レシヨリ僅ニ六年ニシテ替地トナル。然ルニ彼抱地ノ分ハナヲ此方ノ抱地分ニテ年貢等出サレシヲ、其後何レノ比ニヤ、三田分貳百廿三坪ノ地ハ、金子百兩添テ組屋敷請ケトナサレ、此方ノカハリハハナレヌ。サレト高輪分九百三十二坪

ノ地ハ、今ニ至リ毎歳年貢銀二百六拾壹文目ツ、大崎奉行取計ヒニテ、伊皿子町十右衛門ト云者ニ渡ス例トナレリ。此九百坪餘ノ地面モ何レノ處ト云事サタカナラサリシヲ、近キ頃三宅門平大崎奉行彼組屋敷ニ往テ古老ノ人ニ問糺シテ、ヤウヤク此アタリナリト云事ヲ辨シタリ。

備藩邸考

罹災新寺地收公

十月十五日辛巳

○寛文八年(紀元二三〇八年)○辛巳(三正綜覽)

新地寺院中、今春ノ火災ニ燒失

シタル者ハ、其寺地ヲ收公ス

○柳營日記。天享吾妻鑑。嚴有院殿御實紀。

罹災新寺地收公事蹟

罹災新寺地收公 相傳フ。

十七日○寛文八年十月

覺

新地建立之寺御停止之旨、三十八年以前被仰出ハ處、其後借置ハ寺院、當春大火之節燒失之分、被召上之旨、寺社奉行より申渡ハ。然共右之明地之儀ハ、借置ハ輩之面々、頭先可預置ハ事。

一、當春不燒失、新地子細無之ハ、約束年數迄、先其儘可差置ハ。但、住持より明退ハ儀ハ、可爲心次第事。

市街充實時代

申八年○寛文文 十月十五日

柳營日記

十七日十月○寛文八年中略。この日令せらるゝは、新佛刹建立の事は、寛永辛未年八嚴禁せられしに、そのうち寺にかしをきし武家の宅地、この春の災にかゝりしは、ことごとく收公せらるゝ旨、寺社奉行所より令したり、さればその曠地は、さきにかし置しともがらの官長にしばらくあづかり置べし、また災にまぬかれし新寺院又私曲のはからひもなきは、定期の年迄は猶舊によるべし、但住僧その地をかへし退かん事は、心のまゝたるべしとなり。

——嚴有院殿御實紀

天享吾妻鑑同○萬年ニハ左ノ如ク見ユ。

一、同日四月○寛文八年中略。ニ仰セ出サル、ハ、新地建立ノ寺院御停止ノ義ハ、三十八年以前六年○寛永ニ仰セ出サル、處也、其以後御借置ル、寺地ノ分ハ召上ラル、由ナリ。是當春ノ火夏ニ焼失ノ寺院ハカリナリ。其外ハ年數之通借シ置セラル。

〔附記〕

秤賣買券及紺屋査檢券

四日一月○寛文八年中略。十この日守隨彦太郎に秤賣買の券、土屋五郎右衛門に紺

附記
秤賣買券
及紺屋査
檢券

屋査檢の券授らる。その文にいふ。武相豆腐常上下野上下總、すべて九國紺屋藍瓶の抽税、天正二十年二月朔日その家祖五郎右衛門に下されたる御朱印の旨に任せ、各國城下の地をのぞき、その他は藍瓶一つに米一斗づゝおさめしむるといへども、今時米價湧貴するをもて、このち錢二百文にさだめらる。府の市井并に下總の國のうち佐倉領は、同職土屋右衛門に分附せらる。その他各國抽税は、五郎右衛門これをはからふべし、但近郊三里のうちの税錢は、毎歲十一月五郎右衛門がもとに持行ておさめ、三里外の地は、手代をつかはしとろおさむべし、もし澁滯するやからあらば、すみやかに奉行の廳にうたへ指揮をうくべきものなりとぞ。

——嚴有院殿御實紀

堀田氏等賜

十二月廿二日丁亥

八○寛文八年中略。二前佐倉總○下國。城主堀田正信野○上介。

ノ子正職

後○正體。帶刀。嚮ニ公收スル所ノ前島原前○肥國。城主高力隆長左○近大夫。

元屋鋪ヲ賜フ。

柳○營日次記。子二本松城○磐國。城主丹羽光重左○京大夫。中奥

小姓秋田季久

淡○路守。屋鋪替、亦是頃歟。子○丹爵家回答。

堀田氏等賜邸

柳營日次記其他二、

市街充實時代

堀田氏等賜
邸事蹟

堀田正職

廿二日○寛文八年十月○中略。

堀田帶刀職。正へ高力左近長。隆上ヶ屋敷被下之

柳營日記

一、麻布上屋敷

下賜 寛文八年十二月廿二日高力左近大夫隆長ノ明屋敷拜領。

——子爵堀田家回答宮川藩。

丹羽光重
秋田季久

丹羽氏秋田氏屋鋪替ハ、

三、青山長者丸邸

寛文八年戊申十二月重時代。丹羽光 櫻田御や布と長者丸秋田淡路守季久主のや

敷と取替とあり。不詳。

——子爵丹羽家回答○二本松藩。

〔附記〕 賜宅

附記
賜宅
岡井道
薰

道薰自庵。岡井。

寛文八申年御本丸に御供、神田松下町三丁目ニる屋敷被下之。

——寛政呈譜

是年○寛文八年(紀元二二二八年)

社寺ノ起立轉移若クハ廢撤シタル者若干有リ。

○文政町方書上。地子古跡寺社帳。

社寺起立轉
廢撤

社寺起立轉
廢撤

社寺起立轉移廢撤 寛文八年中起立轉移廢撤シタル社寺ヲ舉グ。
稻荷社 麻布宮村稻荷社南部氏屋鋪際ヨリ百姓地ニ移ル。

麻布宮村百姓支配

稻荷社

古跡年貢地
一、境內貳拾壹坪

右稻荷社、麻布宮村鎮守ニる、開基之儀ニ年久敷罷或ハ成不相知、南部主馬屋鋪際ニ有之、以處、寛文八申年辻番敷罷成、其節百姓庄右衛門と申者畑拾坪致社地、移置由。然る處十四年以前元祿八亥年織田越前守檢地之節貳十壹坪相増、尤右之社地宮村之氏神ニる、水帳ニ該相載以得共、寺社方帳面ニ之無之ニ付、修復仕事不能成、段々破損及以間、古跡被仰付、寺社方帳面ニ相載申度旨、氏子百姓共拾三年以前元祿九子年より毎度相願以ニ付、彼地伊奈半左衛門御代官所故、被承合以處、右麻布宮村稻荷社地之儀、百姓共申以通相違無之、先年南部主馬屋敷際ニ有之、以處、寛文八申年辻番敷ニ罷成以故、唯今之所へ引移以、然る處元祿八亥年檢地之節、社地貳拾壹坪ニ相増、半左衛門方帳面ニ相載、宮村百姓支配仕以、古跡ニ罷成以る該障儀無之由申越以、依之見分之者遣し、遂吟味以處、年久敷建來以宮地ニる、外相障儀無之ニ付、御老中へ被相

市街充實時代

伺古跡並ニ被申付_レ旨、本多禪正少弼_○忠堀丹後守_○直鳥居播磨守_○忠連印之斷手紙を以申越_レ付場所遂見分_レ處、相違之儀無御座_レ付、御帳面ニ相載_レ段、寶永五戊子年四月右之趣申上_レ處、其之通り可仕旨被仰渡、御張紙差上_レ之。

光淨寺 新地ノ故ヲ以テ廢寺ト爲ル。

上高輪村聖町裏燒跡
小湊誕生寺末寺

蓮 乘 寺_○中

右上高輪村日蓮宗蓮乘寺脇隣小湊誕生寺末寺光淨寺と申、境内百八拾三坪之寺有之處、寛文八申年致類燒、新地故、其節潰、拂地ニ罷成_レ略_○下

——地子古跡寺社帳

松久寺

松久寺 六番町ヨリ三田樹木谷ニ移ル。

貝塚青松寺末
三田樹木谷

曹洞宗 長盛山松久寺

一、境内拜領地 坪數七百四拾三坪六合六厘。

一、開關ノ慶長十乙巳年迄六番町ニ建立有之_レ處、御用地ニ付、寛文戊申年八年。三田樹木谷ニ拜領被仰付_レ。但し開關年代不詳_レ。

——文政寺社書上

源昌寺

源昌寺 六番町ヨリ三田樹木谷ニ移ル。

貝塚青松寺末
三田樹木谷

曹洞宗 龍溪山源昌寺

一、境内拜領地六百貳拾五坪餘。

表口拾九間貳尺。
裏行三拾貳間貳尺。

一、境内地續圍外抱地面田畑今里村御年貢地惣地坪四百四拾四坪。

表口三拾九間五尺。
裏行拾九間三尺。

尤も東名光と申地名ニ御座_レ。

一、開關慶長十乙巳年六番町建立在_レ之_レ以得共、此所御用ニ付、寛文八戊申年三田樹木谷替地拜領被仰付_レ。

——文政寺社書上

清林寺

清林寺 起立年代明カナラズ。開山頓譽是年示寂ス。

京知恩院末
武州在原郡芝二本願

淨土宗 金泉山五劫院清林寺

一、境内四百九拾五坪間口廿壹間。

内 拜領地三百七拾坪。
御年貢地百貳拾五坪。

市街充實時代

一、當寺起立之儀を古來の燒失之節を古記録等燒失仕ひ哉一切相分り不申
ひ。寺類燒之儀も何頃あるに哉是又書留等無御座に故相分り不申ひ。

一、開山乘蓮社頓譽上人智哲寛文八戊申年八月十日寂。

但、俗姓事跡等不相知。

——文政寺社書上

上行寺

上行寺 伊皿子ヨリ二本榎ニ移ル。

駿州富士郡西山本門寺末
芝二本榎
日蓮宗 富士山上行寺

一、境内拜領地三千百八拾四坪五合五勺。

右之内拜領地二千二百五拾四坪五合五勺。
六百六拾坪白金村分。二百三拾坪上高輪村分。

略。上 寛永十二乙亥年、寛文八戊申年迄三十四年、高輪上町伊皿子ニ住居。同
年類焼仕、此地松平新太郎殿池田光政。替地仕、寛文八戊申年、當二本榎に引移。

——文政寺社書上

立行寺

立行寺 麻布市兵衛町ヨリ白金ニ移ル。

一、古跡拜領地 千八百拾貳坪六合。略。中

京都本禪寺末
麻布白金村
日蓮宗 智光山立行寺

右當寺を、寛永七庚午年開山日通聖人爲法儀弘通之於麻布市兵衛町ニ百姓
地を求、一字建立仕ひ。尤寺號山號を本寺を授與之由申傳ひ。則後住を弟子日
祐聖人ニ御座ひ。三十九年之間年貢地罷有ひ。其の寛文八戊申年二月大火事
之砌類火ニ寺燒失仕ひ。其節御用地ニ被召上ひ。替地三田白金村當時之場所
拜領被仰付ひ。——文政寺社書上

祥雲寺

祥雲寺 麻布臺ヨリ廣尾町ニ移ル。

本寺京紫野龍寶山大德寺末
禪宗臨濟派 瑞泉山祥雲寺

一、境内惣坪數八千貳百拾七坪。

内、五千四百六拾坪 拜領地

内、貳千七百五拾七坪 持添年貢地

但、下澁谷村。

享保元丙申年九月晦日御被官方御役人御徒士目付御檢地御渡り御座ひ。其
其上同年十月三日芝口御門外片山三七郎殿方迄繪圖面差出相濟申ひ。
享保十一丙午年持添年貢地寺社御奉行加賀爪甲斐守殿、小笠原山城守殿に
御願申上、拜領地並ニ圍仕ひ。三浦五郎左衛門殿、三浦甚之丞殿、森川六左衛門

市街充實時代

殿御知行所ニ御座シ。

一、開闢起立之儀

當寺開基ニ、黒田筑前守忠之法號高樹院殿前拾遺補闕筑前都督傑春宗英大居士、承應三甲午年二月十三日逝。黒田筑前守長政法號興雲院殿前大中大夫筑前都督古心道卜大居士、元和九癸亥年八月四日逝。同年先考爲菩提寺、於溜池屋鋪内忠之一寺建立、時號龍谷山興雲寺。其後寛永六己巳年八月日相分不申シ。於麻布臺新地拜領再興、改號瑞泉山祥雲寺。寛文八戊申年類焼仕シ。月日相分不申シ。其節御用地被召上、同年替地被仰付當時之地所拜領仕シ。月日と相分不申シ。麻布臺舊地之儀ニ被召上シ後、相分不申シ。

——文政寺社書上

祥雲寺 廣尾町ニアリ。瑞泉山下號ス。紫野大徳寺末ナリ。當寺ハ黒田筑前守忠之筑前守長政カ子ナリ。開基ニシテ、開山ヲ龍岳ト云フ。初メ忠之カ父筑前守長政、龍岳カ道徳ヲ崇敬シ、屢談話ノ席ニ列セシ事有リ。斯テ元和九年長政卒去ノ後、忠之カ父冥福ノ爲ニ、赤坂溜池ノ邸内ニ一寺ヲ創シ、龍谷山興雲寺ト號シ、龍岳ヲ請テ開山トス。岳ハ石州ノ人ニシテ、京紫野玉林院開山月岑ノ嗣法ナリ。寛永三年勅シテ竺仙大法禪師ノ號ヲ賜ハリ、同五年十一月二十八日示寂ス。龍岳カ行狀ハ、舊記烏有シテ詳ナラズト云フ。改撰江戸志ニ、寺傳ヲ引テ龍岳初メ業ヲ安國寺惠瓊ニ學ヘリ。後師ノ恩ニ感シ、惠瓊カ刑セラレシ時ヒソカニ首ヲ盜ミ取リテ、建仁寺ノ竹林中ヘ埋メシハ、此人ナリトアリ。二世默翁カ時、同六年麻布臺ニ於テ今ノ市兵衛町ナリ。新ニ寺地ヲ拜賜シテ轉移シ、此時今ノ山ノ寺號ニ改ム。斯テ寛文八年火災ニ罹リシ後、此地ハ公ヘ收メラレ、今ノ地ヲ替地ニ拜賜シテ轉移セリ。略。中境内八千二百十七坪。内五千四百六十坪ハ拜領地ニシテ、二千七百五十坪ハ持添年貢地ナリ。

支院 ○節

景德院 開山ヲ愚溪ト云フ。延寶五年二月二十五日寂ス。當院ハ慶安二年麻布日下窪ニ於テ起立セシカ、寛文八年火災ニ罹リシ後、本坊ノ境内ニ再建スト云フ。
——府内誌殘編

西教寺 古跡並ト爲リ、一木町眞淨寺跡ニ定住ス。

築地本願寺末
赤坂一ツ木町
淨土眞宗 藝國山西教寺無院號

一、境内 古跡年貢地三十九坪。町地并一木借添町地十四坪餘。町之内。

市街充實時代

別紙繪圖面略之通。

當地所之儀ハ、古跡年貢地ニ有、伊賀衆知行所之内三十九坪、去ル寛永五辰年中淨土宗之僧致借地寺建立仕、眞淨寺ニ相唱、同曆十三子年迄住居之處、同年取拂被仰付_ハ、拙寺儀ハ、其節迄芝柴井町ニ罷在、右廢寺跡地主ニ掛合、引越、寺造立仕、寛文八申年迄二十八年寺相續仕來_ハ處、場所替仕_ハニ付、同年中可取拂旨被仰付_ハ、間、右地所之儀ハ、前々より寺地ニ御座_ハ、趣申立、取拂之儀御免被成下置、古跡并ニ被仰付_ハ、元祿八亥年迄其儘罷在_ハ。

——文政寺社書上

大宗寺

大宗寺 御下屋敷内藤氏。諸說記聞ニ據レバ、一寺ト爲ル寛文八年ニ在ル可シト云フ。

淨土宗 芝増上寺末四谷 霞關山本覺院太宗寺

一、境内古跡拜領地 東西間口三拾五間。南北裏行百六拾六間。此坪數七千三百九拾六坪餘。

一、當寺起立之儀也、關東御入國之後、内藤家二代目内藤彌三郎後修理亮清成法名孤光、屋敷地被拜領之節、太宗ニ申僧、當寺之場所小庵、被結_ハ罷在_ハ。

より、誰呼とふく、太宗ク庵と申せしよし、其後同家四代目修理亮清政法名院、五代目百助正勝法名本覺之廟洒掃等相勤_ハ、公クテ小寺之如ク相成、太宗寺ニ號し_ハ、由ニ御座_ハ、其後内藤大和守重頼地所寄附_ハ、一寺ニ相成申_ハ。

一、當寺山號之儀也、往古此邊地名霞ヶ關_ハ、唱_ハニ付、則山號ニ唱_ハ、義ニ御座_ハ。
——續府内備考

太宗菴考

霞關山太宗寺。此寺地往昔ハ、御下屋敷ノ内ニテ、内藤左右衛門屋鋪ノ地内也。草菴ヲ造リ、太宗ト云道心者ヲ置。其頃ハ諸侯多分山屋鋪ノ内ニ葬送アル通例也。則本覺院様正勝。内藤御廟所出來、幸ニ右菴主洒掃ヲ勤メ、追日小寺ノ如ク御取立アリシ由、無着院様重頼。内藤御若齡ノ砌、從公儀寺院御改有之節、兼テ御出入致シ候武田吾入ト云浪儒へ御沙汰有テ、寺山號備ル。蓋霞ヶ關ト呼所、江戸近所三ヶ所有リ。四谷大木戸モ其一ニテ、御屋敷東門前街道ニ在ル石橋ヲ霞ヶ橋ト呼來レリ。因テ山號ヲ霞關山ト題シ、菴主ノ最初太宗ノ名ヲ以テ太宗寺ト號シ、御書上御内寺ニ成シ由、傳聞之趣、享保之初星野好純ヨリ承之ト、

市街充實時代

祖父藏人忠貴カ筆記ニ在リ。太宗寺ノ起リ來ルコト顯然ナリト雖、尙疑ヒ少カ
 ラス。爰ニ按ルニ、星野好純トアルハ、初代ノ縫殿ト申セシニテ、天和ニ水野家
 ヨリ慎護公○内藤清枚ノ御供セシナレハ、太宗菴ヲ取立ラレシヲ目ノアタリニ
 見ルニアラサレト、僅ニ十四年計寛文八年ニ取立ラレシ。云事、尙末ニ云フヘシ。ヲ隔タル頃也。又武
 田吾入ト申セシハ、元祿ノ頃モ尙經書ヲ講シナトセシナラン。慎護公ニ常ニ
 參リシ由ハ、好純カ自記ニ載タレハ、疑フヘキニ非ス。又公儀ニ寺社ノ事ヲ改
 メラレシハ、嚴廟ノ御世寛文八年也ト承ル。新地ノ寺社ハ破却スヘキ旨ヲ命
 セラレテ、三十八年以上ニ及フハ古蹟ト定メラレ、三十七年迄ヲ破却セラレ
 シ也。卅八年前ハ寛永八年ニアタレリ。寛文八年ハ、無着公四拾歳ノ御時ニシテ、此年大御番頭
 ニ成セラレシ也。前ニ云如ク、一字ノ寺地ニ取立ラレシハ寛文八年ナルニハ、
 内藤杢右衛門信政カ歿セシ後ナル事云迄モナシ。此杢右衛門ト申セシハ、
 ツノ頃ヨリ奉仕セシカ、元和寛永ノ頃老臣ノ列ニ見ヘタリ。

附云、今江府ノ御武器ノ内ニ、イトモノフリタル撓數々有リ。地ハ白キ絹ニ、
 中程ヲ黒ク染メ、又上ノ所ニ石餅ト云モノヲ是モ黒ク附タリ。姓名ヲ印シ
 タルモ有テ、杢右衛門組何某ト記シタルモ有ル也。思フニ組ナト預リ奉リ

シ、莫モ有リシト覺ユ、外ニハ名倉武右衛門組ト云モアリ、又靱負組伊藤左
 太夫組ナト、記シタリ。頭ノ名ヲ記サ、ルモ亦多シ。按ルニ此物慶長ノ末
 元和ノ初メノ物ト覺ユ。サレハ杢右衛門信政イマタ老臣ノ列ニ加ヘサセ
 ラレサル頃ニシテ、物頭杯ト申セシニテアラシク、尙此撓ノ事、己レカ考別
 ニ記シヌ。此人家繼ヘキ子ナクシテ後家絶タリト、近代ノ杢右衛門周受カ
 語リシナリ。又没セシ年月ヲ同家ナレハ如何ニ傳ヘシト、今ノ角太夫信喜
 ニ問シニ、其家ニモ傳ヘ洩セシト申越タルハイト殘リ多シ。サレトモ己カ家
 ニ藏メシモノニ、此杢右衛門寛永十七年ノ頃迄ハ在世ナリシト見エテ、正
 ク記セシモノ在リ。又極老ニ至ル迄在世ナリシトモ聞ヌ。又此人ハ角助尙
 信ノ姪ニテ、其祖考ハ御爪ノ端ナリ。尙信幼少ヨリ當御家ニ來リテ孤光公
○内藤清成ニ奉仕シ、其子三之丞信季、其子角助信綱ト云、何レモ多病或ハ早世
 ニシテ、重職ニ預ラス。無着公幼稚ニマシ、一度御滅知アリシ御時モ
 此角助信綱ノ代也シカ、當家ヲ退テ永井殿信濃守尙政ト申セシ。御方、孤光公ノ御掣ナリ。ニ寄食ス
 ト。是角太夫信喜カ申越タル也。サレハ角助尙信ト申セシハ、杢右衛門信政
 カ伯父ナレハ、此人ニ御下屋鋪ニテ宅地ヲ賜リ、杢右衛門信政モ同居シ、後